

目次

「英訳『明治天皇御製』を読み解く」第三巻に寄せて…………… (2)	英訳御製解説 その101…………… (72)
『英訳明治天皇御製』を拝読して…………… (4)	「おに神も哭かすものは」 [Even the very gods themselves]
英訳御製解説 その81…………… (6)	英訳御製解説 その102…………… (75)
「あめつちもうごかすばかり」 [The power to move both heaven and earth]	「國たみはひとつ心に」 [My folk at call of duty have]
英訳御製解説 その82…………… (10)	英訳御製解説 その103…………… (78)
「言の葉の上になほひて」 [Sweet is the mystery that hangs]	「しきしまの大和心の」 [Yamato's manhood grand that]
英訳御製解説 その83…………… (14)	英訳御製解説 その104…………… (81)
「くもりなきころのそのこ」 [What does the clear and cloudless heart]	「つはものとともに勇みて」 [The chargers like their riders]
英訳御製解説 その84…………… (17)	英訳御製解説 その105…………… (84)
「むらぎもの心をたねの」 [The living verses that grow out]	「たかひのいとまる日は」 [When'er he rests from]
英訳御製解説 その85…………… (21)	英訳御製解説 その106…………… (86)
「ふむ人はあまたあれども」 [Full many a man would win]	「駒に乗るわざはいくばく」 [Although the rider be as apt]
英訳御製解説 その86…………… (24)	英訳御製解説 その107…………… (90)
「國たみのことばの花を」 [The flowers of Yamato's tongue]	「久しくもわがかふ馬の」 [To see the steed, my mate of years]
英訳御製解説 その87…………… (27)	英訳御製解説 その108…………… (94)
「わけばやと思ひ入り」 [I chose with care the path of life]	「國たみのひとつところに」 [Well do my people serve]
英訳御製解説 その88…………… (29)	英訳御製解説 その109…………… (97)
「おほそらにそびえて見ゆるたかね」 [To even the loftiest mountain's heights]	「子らはみな軍のにはに」 [The sons are, one and all, away]
英訳御製解説 その89…………… (33)	英訳御製解説 その110…………… (101)
「くにのためふるひし筆の」 [Ye offspring of the living pen]	「いかならむ薬すすめて」 [Where shall I seek the salve]
英訳御製解説 その90…………… (36)	英訳御製解説 その111…………… (105)
「ともすればうきたちやすき」 [The minds of men are apt to stir]	「いさみたつころのこまををひきとめて」 [Curbing their vainly bounding hearts]
英訳御製解説 その91…………… (39)	英訳御製解説 その112…………… (108)
「ともすればあらぬ方にと」 [How prone they are to stray afar]	「しづかにも世はをさまりて」 [When peace returns and bids]
英訳御製解説 その92…………… (41)	英訳御製解説 その113…………… (110)
「よもの海 みなはらからと」 [O universal brotherhood !]	「ちはやぶる神ぞ知るらむ民のため」 [The gods omniscient well must know,]
英訳御製解説 その93…………… (45)	英訳御製解説 その114…………… (113)
「あだし野にいざかがやかせ」 [Now scatter o'er the battlefield]	「ことしあらば火にも」 [Through fire and water]
英訳御製解説 その94…………… (48)	英訳御製解説 その115…………… (116)
「うつせみの世のためすむ」 [If in the cause of wrong'd mankind]	「いかならむ事にあひても」 [In all emergencies that rise,]
英訳御製解説 その95…………… (51)	英訳御製解説 その116…………… (120)
「きたひたるつるぎの光」 [The lightning flashes of your swords,]	「山をぬく人のちからも」 [The mountain-hurling power of]
英訳御製解説 その96…………… (54)	英訳御製解説 その117…………… (123)
「國のためあたなす仇は」 [Yet, while ye smite with all your]	「國といふくにのかがみと」 [To all the nations of the world]
英訳御製解説 その97…………… (58)	英訳御製解説 その118…………… (127)
「はし居して月見るほども」 [On the verandah musing lone]	「石だたみかたきとりでもいくさ人」 [The fostness call'd impregnable,]
英訳御製解説 その98…………… (62)	英訳御製解説 その119…………… (131)
「夢さめてまづこそ思へ」 [When from thy slumber]	「かちどきのひびくにつけて」 [Exulting with triumphant shouts]
英訳御製解説 その99…………… (65)	英訳御製解説 その120…………… (134)
「國をおもふみちにふたつは」 [That man loves not alone his]	「よろこびをいひかはしつづ」 ['Twi'x realm and realm reigns]
英訳御製解説 その100…………… (69)	「あとがき」に替えて…………… (137)
「ちはやぶる神の心に」 [How pleasing in the sight of all]	

「英訳『明治天皇御集』を読み解く」第三巻に寄せて

小柳左門(都城国立病院 院長)

畏友、小野吉宣さんが齊藤秀三郎氏による英訳明治天皇御集の解説を試み始められたのは、彼が五十五歳を過ぎたころだったらうか。それから数年の月日を経て、ここに第三巻目の著作を上梓されることになった。「五十にして天命を知る」とは孔子の感慨であるが、小野さんをご自分のなすべき事業の意義と喜びを、ここに見出されたと思ふ。そしてこの大いなる事業はまさに、彼にしかできないものであったと確信するものである。

小野さんは、外見からはちょっと想像しにくい、真の英語教師であった。質実剛健なる英語教師として三十余年、高等学校で教鞭をとってこられた。彼の平生は田園の主人のごとくであるが、彼が何かを語る時、魂をゆさぶるやうな胸底からの言葉がほとばしる。若いころから「国民同胞」などに彼が寄せてきた文章には、しばしば英米の書物や新聞などに関してその真髓にふれるものがあつたが、私ども凡人には分からない深い意味を英文に掴み取る素晴らしい洞察と英知を示され、多くのことを教へていただいた。それを思へば、教師として学生たちに話しかける彼の授業もまた、英語の言葉の持つ魂に触れやうとする真情に満ちてゐたであらうと想像する。そのやうな師に教へられた学生は幸いである。

ここに著はされた英訳明治天皇御集解説を読むとき、まず感じるのは小野さん自身の皇室に寄せる思ひ、そして明治天皇の大御歌によせる敬仰の心である。彼は英訳御製詩の素晴らしさを味読するほどに、齊藤氏が外国の人々に知らしめんとした努力のあとを知ってほしい、そして明治天皇の大御歌の真髓にふれてほしい、との願ひをこめて記してこられたと思ふ。本書の内容は、英訳の一つ一つの言葉とその調べに対して、英語の力を総結集しつつ、これでもか、これでもかといふほどに深く掘り下げられたもので、全く圧倒されるやうな解説に満ちてゐる。齊藤氏の英訳が明治天皇の大御心の深さに響き合つてをり、英詩の伝統を受け継ぎながら荘重な調べをもって作られてゐることを、小野さんの読解は教へてくれる。さらにそれぞれの御製にふれて、泉のやうにあふれてくる小野さん自身の感慨が、闊達な文章となつて著はされてゐるのだが、そこには彼の平生の学問と祖国への思慕から生み出される言葉がさまざまに織りなされてゐて、胸を打つのである。

当初、一首の解説を書かれるごとに私にもコピーを頂いて意見を求められたが、英語力の不足はいかんともし難く、返事もできぬまま無礼にうちすぎてしまった。しかし彼はただひたすらに驚くべき精緻さで解説を書き続け、岩をも貫く意志によって、ついにそのほぼ全文を踏破されたのであつた。

今、第3巻のゲラ刷りを読ませて頂いてゐる。読むほどに、さらに明治天皇御製英訳の大きな意味が感じられてくる。例えば、日露の戦ひのさなかに詠まれた御製、

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ

今までかつて、これほど悲痛かつ慈愛に満ちた言葉を発した国家元首があつたであらうか。この御製英訳にふれた外国の人々の感動の言葉が紹介されてゐるが、おそらく世界中のあらゆる時代の人々がこの御製に感銘を受けるだらう。しかも明治天皇の大御心は、はるか古代の神武天皇より代々に受け継がれ、その皇統は今日に至つてゐる。昭和天皇、そして今上天皇の御製にも、その大御心を具さに拝することができる。それこそは我が国の精神文化の底を流れる清らかな地下水である。その清らかな水を、私たち国民が濁らせるやうなことが決してあつてはならない。

さて、小野さんの著書をよみながら、所々にあらはれてくる小野家の家族の人々の言葉に、なんとも言へない懐かしさを感じるのには私だけではあるまい。そのやうな家庭の中に生まれた彼の生来の種子から、この本もまた生み出されたと

思ふ。枝ぶりのいい梅の木が何本も植わっている小野家のお庭の裏山には、春になると鶯が美しい声を奏でる。小野さんは、学生との勉強会にあてるべくご自宅の庭に塾を建てられ、梅鶯塾と名付けられた。この英訳明治天皇御製の解説も、「大学生たちとの研鑽の記録」との副題が付けられてゐるが、まさに小野さんに身近な若者たちとの心の交流から生まれた。

これからも小野さんにしかできそうもない仕事が待ち受けてゐるであらう。私の勝手な願ひは、英訳「昭和天皇御製」であるが、果たして如何。最後に、小野さんの若き日からのひとすぢの思ひをたどり、次の明治天皇御製を拝誦して筆を擱く。

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

平成21年 緋寒桜の咲くころ

都城市

<小柳左門氏 略歴>

○昭和二十三年一月七日生まれ

○昭和五十四年～五十七年米国アイオワ大学に於いて心筋梗塞の病態研究 医学博士

『英訳明治天皇御製』を拝読して

小野 繁(福岡経済大学教授)

あれはいつのことであらうか、私たち兄弟(繁・吉宣)の年齢から推して、昭和四十年代の前半のことであらう。休暇で帰省した私に弟が「うちのドージャー先生(故西南学院大学院長)が明治天皇の御製を英訳されてある云々」と言ったことがある。

その時、私は英訳による解説は可能であっても英詩による訳は、不可能であらうと思ったことを思ひ出す。

孔子は、詩経に集録されてある三百余編乃詩を評して、「詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く、思、邪無し」(どの詩も、うれしいにつけ、悲しいにつけ、素直に感情が表現されてある)と言ったが、明治天皇の各御製はすべておほらかな調べと国民を思ふ心から発する王者のそれである。「思邪なし」を超越した物なのである。これを英詩に移しかへるのは至難の技である。よって私は不可能であると思ったのである。

今を去ること十数年になるであらうか。文芸春秋が各界の名士に「あなたの愛読書一冊」と問ひかけたことがある。これに答へて日本文学者のドナルド・キーン氏が齊藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』(岩波書店)をあげ、その理由としてこの辞典を読むと日本語の勉強になると同時に英語の勉強にもなるからと語ってあるのが、私にとっても印象深く、齊藤氏の並々ならぬ英語力と国語(日本語)力に感じ入り、今にこのことを記憶してゐる。

このたび、弟がこの齊藤氏の御製の英訳の解説に取り組んでいることを知り、この人ならば、可能だと思ひ、一編なるごとくにありがたく拝読してゐましたが、今春(平成二十年)二月中旬、弟がこれを読んで何か書いてくれと頼んだとき、小柳陽太郎先生の名前を出すと、私たちのやりとりを聞いていた弟の末子が「叔父ちゃん、小柳先生から頼まれたとなら、いやちゃ、言えんパイ」と横から言ったので、私も苦笑しつつこれを引き受けた次第である。

そこで、三省堂の「コンサイエンス人名辞典、日本編」によると齊藤氏の略歴は、以下の如くである。

生れは、慶応二年とあるから、戊辰戦争の二年前であり、この人名辞典にしては珍しく齊藤永頼の子とあることから、父親は恐らく名のある人物であり、時代の趨勢の見えた人だったのであらう。その子、秀三郎に早くも六歳にして英語を学ばせてゐる。

秀三郎六歳とは明治五年である。彼の英語の師は恐らく英国人または米国人であつたに違ひない。この年齢でネイティブに学ぶと正しい発音を身につけ、英語の意味を皮膚感覚で習得できるものである。また、見識のある父親のことであるから、同時に和漢の学問をさせたに違ひない。

周知の如く東北諸藩は、大勢を誤り、戊辰戦争で官軍に抗して苦敗を嘗め、その後、不遇をかこつたところである。

相沢三郎中佐は、明治二十二年、仙台の生れである。その父親は推測するに齊藤永頼と同世代の人であらう。

中佐は少年時代を回顧して「私は父親に我々仙台人は白河北は一山三文とか、仙台のドン五里(官軍の大砲がドンと鳴ると五里逃げるの意)と蔑まれたものである。お前は、尊皇の大義を間違へてはならぬとコンコンと諭されたものである」と。

同じ仙台人である齊藤秀三郎も父親に同じやうな訓戒を受けたことであらう。この齊藤秀三郎が御製の英訳を決心したとき、先づ思ったのは拙い訳をして、陛下の歌徳を傷つけてはならない、であつたであらう。

ただし、御製と英訳にはいくつかの表現に微妙な違ひがある。これは日本語にあつて英語にはない表現がある箇所であると思ふ。齊藤氏の周辺には常に日本語を解する外国人がゐた筈であるから、彼らとの協議の結果、最も近い表現を選んだと考へられるから、読者は別に誤訳と考へてはならない。

齊藤氏の経歴の中に正則英語学校創設とあるが、私はこの正則英語学校出身の小野圭次郎の英文法で英語を学びました。私たちは小野圭の赤本と呼んでゐたものである。よって私は真に恥づかしい不肖の弟子にすぎないが、齊藤氏の孫々弟子となる。ちなみに私は昭和十八年の生れである。私の年齢以上の方には小野圭はなつかしい名前ではないだらうか。

最後に大帝の御製がどのやうに国民に取りあつかはれてゐたか、一例を挙げて結びと致します。

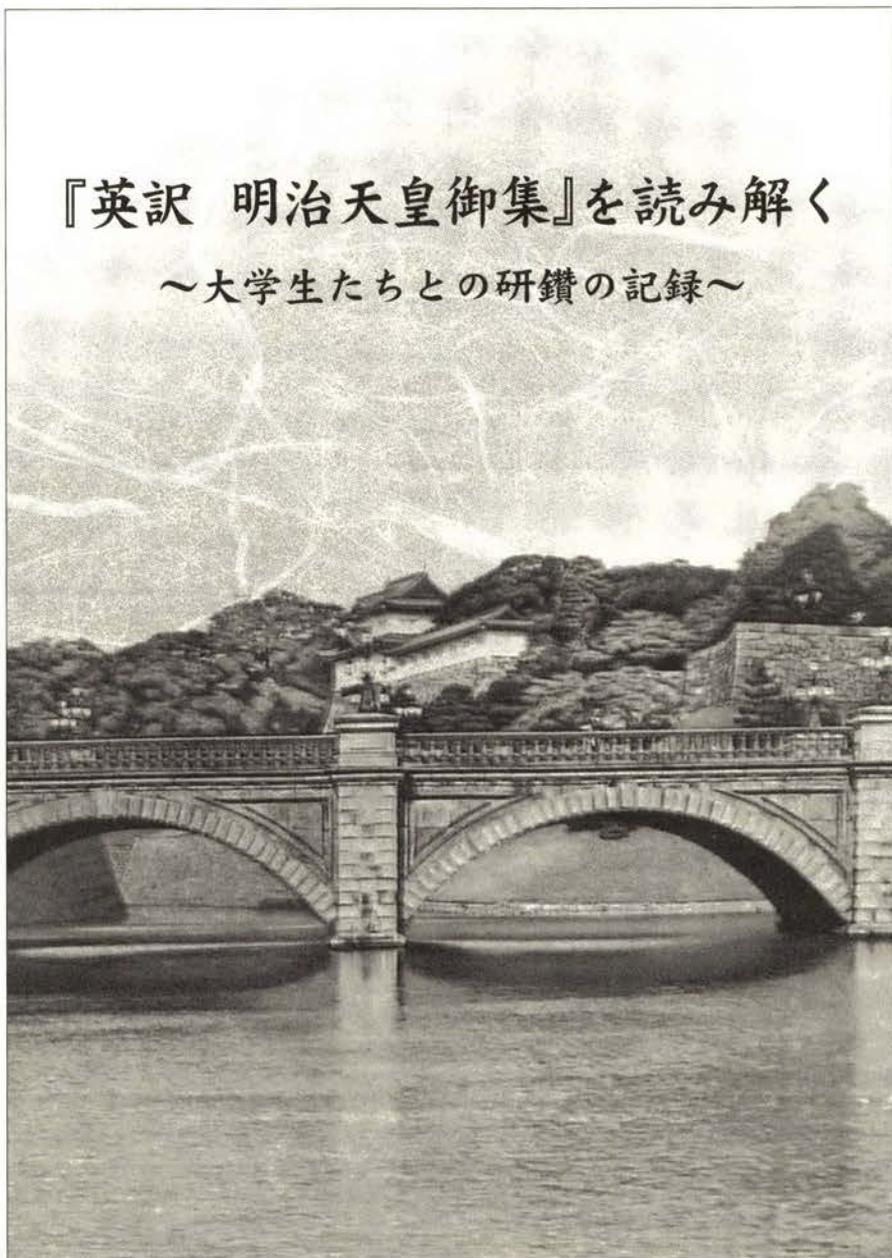
昭和三十年代の初めの真夏、福岡の片田舎の母の実家で法事がありました。於転婆の従姉が「暑か、暑か、こちらには扇風機一つないと」と言ひますと、明治三十五年生まれの伯父が容を改めて「暑しとも いはれざりけり にへかへる水田に たてるしづを思へば」(明治天皇御製明治三十七年)を朗詠しました。いつもは、一言いはれると、二言、三言は言ひ返す従姉が口をつぐんだ。伯父の態度に「まかり間違や煙管が飛ぶぞ」の氣勢を感じたからです。

一介の老農夫に過ぎない伯父でさえ、このやうに御製を教訓とし、拳拳服膺してゐたのです。

平成二十年 三月二十六日(水)

『英訳 明治天皇御集』を読み解く

～大学生たちとの研鑽の記録～



「あめつちもうごかすばかり」 [The power to move both heaven and earth]

あめつちも
うごかすばかり
言の葉の
まことの道を
きはめてしかな
歌(明治三十七年)

The power to move both heaven and earth
Hath Shikishima's song ;
Could I but render mine a tongue
Of truth so sweet and strong !

参考参考のため『明治天皇御集 巻中』を引用します。

「古今和歌集の序文の中に『力を入れずして天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ』云々とあるによりて詠ませ給へり。五句は、さる御希望を表はし給ふ御詞にして、歌道に対する深き大御心のほども伺ひ奉らる。」(二〇七頁)「てしがな」は「自分の願望を詠嘆を込めて表し、「・・・したいものだ」。「きはめてしかな」は「(まことの道)を極めたいものだ」と神に祈られる明治天皇の敬虔なお姿が見えてくるやうな「歌」であります。

一行目から入ります。

[The power to move both heaven and earth] [The power]=[「難事を為すの」力]の意。[move]=[to cause to act, affect] =「行動を起こさせる、影響を及ぼす」、第一他動詞として次に来る目的語を「感動せしむ」の意であります。[both heaven and earth]=[「天地の両方を」]の意。

一行目の訳は「天地の両方を感動せしむる力を」となります。

二行目に進みます。

[Hath Shikishima's song:] [Hath]=古文体、詩文に於て使用。[have]の第三人称単数現在直説法=[Has]。[Shikishima's song]=[The art of Japanese poetry]のことであります。

二行目の訳は「有してゐるのだ、敷島の道は」となります。

一、二行目は併せて一文となつてゐます。主部は二行目の[Shikishima's song]でありその動詞は前にある[Hath]であります。一行目がその目的部となつてゐるのです。何故語順転倒がなされたかを解明するために、音声面から見てみませう。

[The power / to move / both heaven / and earth]

弱・強 / 弱・強 / 弱・強 / 弱・強

この行は[Iambic]弱強調(rising disyllable metre)の四詩脚(Tetrameter)の行となつてゐます。格調を整へるために、主部と目的部が転倒されたのです。平常語順では[Shikishima's song hath the power to move both heaven and earth] であります。

「敷島の道と世界史との関連性について」

明治天皇が年ごとにお詠みになられました御製の数を表にして、敷島の道が世界史と何らかの関連があるのか探してみたいと思ひます。

	明治天皇 御集 (T11)	明治神宮 叢書御集編	角川文庫 明治天皇 御集	日本の動き・世界の動き
明治11年前 (1878)	20首	20首	87首	1865(慶応元年)Lincoln暗殺さる 1877(明治10)Russo-Turkish War, 西南の役
明治12年 (1879)	5首	5首	8首	米国大統領 Grant 来朝
明治13年 (1878)	5首	5首	5首	
明治14年 (1881)	3首	3首	3首	米国大統領 Garfield暗殺さる
明治15年 (1882)	11首	11首	13首	独逸伊三国同盟(Triple Alliance)
明治16年 (1883)	27首	27首	35首	
明治17年 (1884)	26首	26首	25首	Annam(安南)フランス保護国(protectorate)
明治18年 (1885)	14首	14首	11首	
明治19年 (1886)	19首	19首	13首	
明治20年 (1887)	7首	7首	3首	英国Burmaを併合
明治21年 (1884)	1首	1首	1首	フランスCambodiaを領有
明治22年 (1889)	1首	1首	1首	
明治23年 (1890)	5首	5首	9首	教育勅語 帝国憲法発布、Brazil革命、共和国となる
明治24年 (1891)	2首	2首	3首	独逸伊三国同盟(Triple Alliance)更新
明治25年 (1892)	9首	9首	13首	Hawaii共和国となる
明治26年 (1893)	5首	5首	6首	
明治27年 (1894)	7首	7首	4首	日清戦争Sino-Japanese War起る
明治28年 (1895)	1首	1首	6首	三国干渉、Return of Liaotung Peninsula

明治29年 (1896)	40首	40首	27首	Ethiopia(Battle of Adowa),伊の侵略。 第一回Olympic Games(アテネで開催)
明治30年 (1879)	17首	17首	10首	希土戦争(Turkish-Greek War)
明治31年 (1898)	33首	33首	32首	米西戦争(Spanish-American War)
明治32年 (1899)	25首	25首	25首	Boer War 英国の南ア侵略、米比戦争、 米国中国の門戸開放(open door)提唱
明治33年 (1900)	17首	17首	10首	英国南ア (Orange Free State and Transvaal Republic) 併合
明治34年 (1901)	21首	21首	29首	Queen Victoria死す
明治35年 (1902)	42首	42首	101首	Anglo-Japanese Alliance 成立
明治36年 (1903)	78首	78首	101首	Panama独立
明治37年 (1904)	280首	280首	311首	二月日露開戦Russo-Japanese War , 孫逸仙日本亡命
明治38年 (1905)	197首	197首	134首	三月奉天会戦。五月日本海海戦。 Treaty of Portsmouth.日英同盟更新
明治39年 (1906)	151首	151首	98首	San Francisco 大地震火災
明治40年 (1907)	196首	191首	47首	ヘーグ第二回万国平和会議
明治41年 (1908)	78首	76首	35首	ベルギー-Congo Free State併合
明治42年 (1909)	104首	104首	61首	
明治43年 (1910)	104首	104首	43首	韓国併合(Annexation of Korea)
明治44年 (1911)	56首	56首	18首	伊土戦争(First Balkan War), 孫逸仙大総統に当選
明治45年 (大正元年)	73首	73首	38首	7月 崩御。乃木大将殉死

この御製は明治三十七年にお作りになられたことは前記したところですが、1904年、世界史上では、二月に日露開戦 (Russo-Japanese War) であります。御製の数は

明治天皇御集(T11)	明治神宮叢書御集編	角川文庫明治天皇御集
280首	280首	311首

と、明治天皇の御生涯で最高数となっております。「あめつちもうごかすばかり」の祈りを込められ、御製をお詠みになられたのであります。日本国が尋常成らざる、國が減びるか、否かの瀬戸際にあった。御製の数から見てもただ事ではない、御心が拝察されるのであります。(御生涯で十万首近くお詠みになられてある中のほんの一部しか私達は目にすることが出来ません。その範囲内に限定されての統計であることを補足してをきます。)

三行目に進みます。

[Could I but render mine a tongue] これは祈願文の古文体であります。分り易いやうに現代調に書き換へますならば、次のやうになります。

[I wish I could make my Shikishima's song of truth so sweet and strong !] [render]=[Factitive Verb(補言附他動詞)]=[make -something such--=[(何を何の様に)ならしむ]の意。[mine]=[my]であります。母音の前にこの形を用ふるは古文体であります。(例へば「私の目」は[my eye]ですが、古文体では[mine eye]となります。但し子音の前では、冠詞を付けて単数形にして使はれます。[tongue]=[the power of communication, speech]=[「意思伝達能力, 言語能力」の意。

三行目の訳は「我が意思伝達の力を何とぞ可能ならしめ給へ」となります。

四行目に進みます。

[Of truth so sweet and strong !] [Of truth]は[of + 名]=[「形容詞」の意となりますから=[true]=[「まことの」。

[so]=[very, extremely]=[「極めて」]の意。[sweet]=[pleasing to the mind or feelings]=[「心、或は感情に快い」。

[strong]=[morally or intellectually powerful]=[「精神的または知的にしっかりした」]の意。

四行目の訳は「まことの道となり極めて快く力強くあれかし」となります。音声面から見てみませう。[song]と[strong]が脚韻(rhyme)を踏んであることに加へて[so sweet and strong !]は[s]音が重ねられて頭韻(alliteration)となっております。声に出して読み比べて見ませう。

[Of truth very sweet and strong !] [Of truth extremely sweet and strong !]

[Of truth so sweet and strong !] [very]や[extremely]より[so]の方が調べが良いでせう。

訳者・斎藤氏は御製に見合ふレヴェルの英詩に仕上げるために感心させられる工夫が成されてあるのがお分かりになられたでせうか。「あめつちもうごかす」格調高い響きとは成程かくの如きものなのだと心に深く浸みて来るまで読んで感じ取って下さい。

内容的には三点に於て対比が読みとれます。

①[heaven]に対しては[sweet]であり

②[earth]に対しては[strong]であることはすぐに分るでせう。第三点目の[Of truth](まことの道)は何に対比されるでせうか。一行目全体の[The power]に当たってゐます。「まことの道」に[The power](力)あらしめたいと祈りがこもるのでと言ふ訳者・斎藤氏のメッセージを読み落としてはならないでせう。

「ロシアに日本が勝った」と言ふニュースは、トルコのKemal Ataturk(Pasha)(1883~1938)を独立運動に奮い立たせたと言はれてゐます。当時の北欧の諸国民(一例として東郷元帥を讃へるトーゴービール)やアジア・アフリカの諸民族に白人支配から脱して自主独立の国家を建設したいと言ふ希望と立ち上がる勇気を与へたと言はれてゐます。もし明治天皇が一般的な政治家であるならば、「祈りが通じて、天地を動かした」と言ふやうな演説をなされたでせう。ところが心の働かせ方は全く逆であります。「祈りに祈り続ける」謙虚にして捨身の御歌をお詠みになられてをられます。再び読み返して見ませう。

「天地の両方を感動せしむる力を」

「有してゐるのだ、敷島の道は」

「我が意思伝達の力を何とぞ可能ならしめ給へ」

「まことの道となり極めて快く力強くあれかし」

[Of truth]の「まことの道」を切実に求道される明治天皇を御心を偲ぶことが出来ました。日露戦争を日本の侵略戦争だと「歴史認識」を迫ってくる勢力が内外にあります私達は心を静め歴史の真実から目を逸らさないで生きたいと願ふものです。最後に二度日英の御製を拝誦して終りとします。

<参考文献>

- 『明治天皇御集全』(T11) ○『新和英大辞典』(研究社) S44年版
○『明治神宮叢書御集編』 ○『明治天皇御集』(角川文庫)

「言の葉の上にはほひて」 [Sweet is the mystery that hangs]

言の葉の
上にはほひて
ゆかしきは
人のこころの
花にぞありける

Sweet is the mystery that hangs
Over the men's true heart
That blossoms into fragrant flowers
Of the poetic art.

この御製は何年の作品であるか、今のところは分かりません。前回は「言の葉のまことの道」を「極めたい」と神々に祈願された御歌でありました。今回も「言の葉」がテーマとなつてゐる御歌であります。「言葉」は英語では[language]であり、「話し言葉」では[speech]、「個々の言葉」を[word]と英語に直されます。ならば「言の葉」とは英語ではどのやうに言へば良いのでせうか。

『古今集』の仮名序には「ことのは」について「和歌は人の心を種としてよろづのことのはとぞなれる」(和歌は人の心を種としていろいろな言葉の葉すなはち、歌となつたものである)と述べられてゐます。前回の復習になります。 「言の葉」とは和歌のことです。斎藤氏は[Shikishima's song]と翻訳してゐたことを思ひ出して下さい。「三十一文字の言の葉で詠まれた和歌は香細^{かほ}しさを放ち、奥床しい。それは人の心の花が詩的に表現されてゐたのであつたことよ」と詠嘆の意を込めて詠んでをられます。

一行目から入ります。

[Sweet is the mystery that hangs] [Sweet]は「その81」に既出。[mystery]は「秘密」や「探偵小説」の意などカタカナ英語でよく目にしますが、ここでは=[something that is beyond man's power to understand]=「人間の理解力を越えたもの」「神秘、奥床しさ」の意で用ひられてゐます。「奥義」は英語では[the mysteries of an art]と言ひます。[that]は[the mystery]を先行詞にとる関係代名詞です。[hang]=[to fasten or be fastened to something without support from below]=「下から支へをしないで物を結びつける、または物に結びつけられる」の意。例へば、「雲が山頂にかかる」は英語では[A cloud hangs over a mountain.]と言ひます。雲が山を隠すだけでなく、景色を飾つてゐるともとれます。今ひとつ例を挙げれば「人間の運命は隠密の雲に蔽はる。」は英語では[A mystery hangs over man's destiny.]と言ひます。神様だけがご存知で当の本人である人間には分らないのが運命と言ふことでせう。そこに[mystery]=「神秘」があると言ふのであります。

一行目の訳は「蔽ひたる神秘こそ芳香を放つ」と訳します。

二行目に進みます。

[Over the man's true heart] [Over]=[hangs over]。連語となつてをります。[true]は[false]=「虚偽」に対し「まことの」の意。

二行目の訳は「ひとのまごころを」となります。一・二行目の文の構造は[Sweet]が強調され、しかも[heart]と四行目の行尾の[art]が脚韻(rhyme)を踏むやうに語順が転倒されてゐます。平常語順では[The mystery that hangs over the man's heart is sweet]となります。転倒させることにより、見事に詩となつてゐるのがお分かりになるでせう。

「匂ふとゆかしさの文化的背景」

「自由(liberty)」「平等(equality)」「民主主義(democracy)」の國——アメリカで奴隷解放の宣言をしたリンカーン大統領が1865年(慶応元年)暗殺されたことは、前回触れました。ならばMartin Luther King牧師が黒人差別反対運動で全国的に有名になったのは、いつ頃のことでしょうか？ 1955年だから日本では戦後のことで昭和30年代のことです。彼は穏健な公民権闘争を展開しました。と言ふことは、黒人には「公民としての権利——国会又は地方公共団体の議会に関する選挙権・被選挙権」が「平等」に与へられてゐなかつたこととなります。白人が黒人に対して持つ差別意識は、根強いものがあり、キング牧師は1968年(昭和43年)、白人暴徒により暗殺されました。

政治的スローガンのままに「自由」「平等」「民主主義」がその國に実現されてゐるかのやうに信ずるのは、[naive(ナイーブ)](うぶで無邪気)すぎることになります。

オリンピックで黒人が陸上競技では大活躍をしてゐます。水泳の競技で金・銀・銅のメダルを取って表彰台に黒人の姿を見ないのは何故でしょうか。日本人などの黄色人種までは良いが、黒人が一緒にプールに入ると、棄権する白人が出るからであるとの配慮からであると聞いてゐます。肌の色による差別は、陰に陽に在る、と言はざるを得ません。水泳競技は白人オンリー、陸上競技は黒人オンリーと言ふ棲み分けの理論が厳然として生きてゐるからであると言はれて久しいのです。未だに改善の兆しすら見えてゐないのが現状でせう。理想と現実の乖離が甚だしいと云はざるを得ません。

南アフリカではアパルトヘイト問題が起きてゐます。ニューヨークでは、黒人が集まる小学校には白人は避けるやうになって郊外へと移動して白人オンリーのコミュニティを作つてゐます。中心部に黒人オンリーの地区が出来てゐるのです。そのやうな國では「匂ふ」とか「ゆかしさ」などを求めることは、不可能に近いことではないでせうか。

一方、古来から一民族、一言語でまとまり深い歴史と文化を有してゐるのが日本であります。「匂ふ」の一語を例に挙げても奈良時代まで遡ることが出来ます。

「匂ふ」は元来、視覚に関する語であつたと云はれてゐます。

「万葉集」の八、一五三二を読んで見ませう。

草枕 旅行く人も 行き触らば 匂ひぬべくも 咲ける萩かも

道野辺に咲いてゐる小さい萩の花をじっくりご覧になられたことがありますか。萩の花が小さくて可愛いとも美しいとも詠んでゐません。「旅行く人も通りすがりに、もし触つたならば、きっと色が染まってしまうひさうなほどにも咲き満ちてゐる萩の花であることよ。」と現代語に訳されます。萩の花は紅葉色または白色ですが、一際美しく、触れば手に染むほど「匂ひぬべくも」咲き満ちてゐたのでせう。

平安時代には「臭覚に関する意義をあはせ持つやうになりました。「古今集」(一・春上・四二)の紀貫之の次の歌を見て見ませう。

初瀬にて

人はいさ 心の知らず ふるさとは 花ぞ昔の 香に匂ひける

歌意は「あなたの方はさあ、どうだか、お心のうちは分りません。けれども、昔なじみのこの土地は、梅の花だけが昔のままの香りで咲き匂つてゐることです。L.R. Rodd の英訳を参考にしてみませう。

[The state of human

Hearts I cannot know, and yet

Familiar village still greet

Me with the scent of years past.

「匂ひ」=臭覚の[scent]と取り、L.R. Rodd は英訳してゐます。ふるさとの村に来れば「昔ながらの匂ひ」で私に挨拶をしてくれると訳してゐます。[still]=[今も尚]に懐かしさが込められてゐます。

続いて、都から福岡の太宰府に流されて来た太宰府天満宮の祭神である菅原道真の人口に膾炙した「飛び梅」の歌を見てみませう。先づ、『Sugawara no Michizane and the Early Heian Court』 P.290 R.W. Borgen] から引用します。

When the east wind blows,
Let it send your fragrance,
Oh plum blossoms.
Although your master is gone,
Do not forget the spring.

「匂ひおこせよ 梅の花」のところは

[Let it send your fragrance,Oh plum blossoms.] 「梅の花よ、お前の香りを送ってくれよ」と英訳されてるのが分ります。

私達はかうして「匂ひ」と言ふ語を中心に歴史的に振り返り、味はふうちに日本の文化の深さと「ゆかしさ」をしみじみと感ずることが出来ます。皆様は如何思はれますか。

三行目に進みます。

[That blossoms into fragrant flowers] [That]は代名詞であり一と二の行を受け「それ」の意であります。[blossom]=[bloom, to unfold like a blossom]=「開花する、花のやうに開く」の意。[into]は「新状態に移る事」を表す前置詞。[fragrant]=[sweet or pleasant to smell]=「匂ひ芳しいまた気持ちがいい」の意。[fragrant]と [flowers]は[f]音の頭韻 (alliteration) となつてをり、詩の格調をソフトに高めてみます。

三行目の訳は「それは花開き香気馥郁たり」となります。

四行目に進みます。

[Of the poetic art.] [poetic]=[written in verse]=「韻文で書かれた」の意。[art]=[the works produced by artists]=「芸術家によって生み出された作品」の意。諺にあります[Art is long, life is short.](芸術は長く、人生は短し)が思ひだされるところです。

四行目の訳は「韻文で書かれた芸術の」となります。[the man's true heart](人のまごころ)と[the poetic art](韻文で書かれた芸術)が対比されてゐるのがお分かりになるでせう。「人のまごころ」が「韻文で書かれた芸術」即ち[Shikishima's song](和歌)に表現されるならば[blossoms into fragrant flowers](花開き、馥郁たる香気を放つ)と云ふのであります。

[[fragrant flowers]について]

この花は、「にほひてゆかしき」と明治天皇は言はれます。花は造花ではないのです。咲いたと思へば、散る花なのであります。心が敏感に反応してゐないならば、消えてしまふものであるでせう。空海が千年以上前に作ったと言はれる「いろは歌」が心に浮かびます。先づ、英訳から見てみませう。[A. N. Nelson 『The Modern Reader's Japanese -English Character Dictionary』Charles E. Tuttle Company. 1974 , P1014]

[Colors are fragrant, but they fade away.

In this world of ours none lasts forever.

Today cross the high mountains of life's illusions [i.e., rise above this physical world], and there will be no more shallow dreaming,

no more drunkenness [i.e., there will be no more uneasiness, no more temptations.]

「いろは歌」た次の通りです。

色は匂へど 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて浅き夢みじ 酔ひもせず

[うひ(初)]=有為は万葉仮名では不慣れで(の)、未経験の何故ならば夢もみず、酔ひもしないから。

[Colors are fragrant, but they fade away.]「色」とは宇宙に存在する全ての有形のものであります。「色は [fragrant]=香気を放つ、しかし [fade away]=散り去る」と言ふ。ここには、不易のこの世の真理が詠まれてゐるではありませんか。

私たちは、日常折に触れて、「ああ美しい!」と感動したり「懐かしい!」としみじみとした気持ちにもなることがあります。皆に共通する体験であります。しかし、唯それだけに終わってしまっているのも日常茶飯事のことです。日常性から脱却とはその感動の世界に、じっと踏みとどまり三十一文字の歌に表現する。そのことから始まるのでせう。なぜなら、いかに深い感動も時間の経過と共に、薄れて仕舞ひます。「いろは歌」にある通り [they fade away.] 跡形もなく散り去って行くのです。

消え去れば取り返しのつかない「勿体ない」ものがこの世にはあります。「匂ふ」は唱歌の世界には残っていますが、慌ただしい現代の生活では忘れ去られて行っているのではないでせうか。明治天皇がここにお詠みなされました「心の花」は、私たち一人一人の心の中に咲かせないでどこに咲かせるのでせうか。最初は稚拙でも良いではありませんか。私たち自身の感動を内心にとどめ、指で字数を数へながら、一首づつ「心の花」を咲かせて行きたいものであります。

再度日英の御製を二度拝誦して終ります。

<参考文献>

○『古今集』 ○『万葉集』

○[A.N.Nelson 『The Modern Reader's Japanese-English Character Dictionary』

Charles E.Tuttle Company, 1974, P1014

○『Sugawara no Michizane and the Early Heian Court』P.290 R.W.Borgen

「くもりなきこころのそこの」 [What does the clear and cloudless heart]

くもりなき
こころのそこの
しらるるは
ことばの玉の
光なりけり

What doth the clear and cloudless heart
E'en to the bottom show ?
It is the priceless gems of speech
That sparkle, shine, and glow.

今のところこの御製が何年に創作されたのか分かりません。明治末年頃世に出てゐた御製集には、掲載されてゐたのでせう。その後出版された御製集には見あたりません。何を基準にこの御製が割愛されたのでせうか。その理由の詮索はさて置き、私には素晴らしい御製に思へてなりません。大正・昭和になり、上の御製が国民の目に触れなくなったことは、寂しい限りであります。平成に生かされてゐる私達は、一層の思ひと心を込めて拝誦いたしたく念ずる次第であります。私達の日頃の心には幾重にも雲がかかり一つ晴れたかと思へば、また重く雲が心に掛る。何とかして晴れ晴れとした気持ちになれないものであらうか、と自問することがよくあるものです。「曇り無き心の底が何によって知られるのであらうか？」この御製を謹解しながら答を見つけ出したいものであります。

一行目から入ります。

[What doth the clear and cloudless heart] [doth]=[does]の古文体。[clear](from clouds)=[曇り無き]の意。[cloudless]=[cloud + less] =「雲のない、晴れ渡った」の意で[heart]を修飾する。

一行目の訳は「曇り無き晴れ渡った心は何が」となります。

二行目に進みます。

[E'en to the bottom show ?] [E'en]=[Even]の約。[bottom]=[the under surface of something]=「ある物の下面、底」の意。[show]=[to place something in sight]=「ある物を見える所に置く」の意。

一・二行で一つの疑問文の形を取ってゐます。散文的になりますが書き換へますと [What does the clear and cloudless heart show even to the bottom?] となります。

[the bottom]は「人の心の底」となるでせう。

二行目の訳は「人の心の奥底でさへも(何が)見せてくれるのか」となります。

「詩の創作の意義について」

ニーチェの「ツアラトゥストラかく語りき」に次の箇所があります。

「さて聖者は、森にありて何をかなす」と、ツアラトゥストラは問ひき。

聖者は答へき、「我は歌を作りて、これを歌ふ。歌をつくるとき、或は笑ひ、或は泣き、或は呟く。かくして神を讃ずるなり。

歌ふこと、泣くこと、笑ふこと、呟くことをもて我は、わが神なるかの神を讃ずるなり。

されど汝は如何なる施与を齊らしたる」と。

ツアラトゥストラが森に住む聖者に「何をしてゐるのか」尋ねます。聖者は「歌を作つて、これを歌ふ」と言ひます。

歌を作る目的は何かと言へば「歌ふこと。泣くこと、笑ふこと、咄くことをもて我は、わが神なるかの神を讃ずるなり。」私の神であるあの神を、詩を作り、悲喜こもごもに讃嘆するのである、と言ふのであります。しかしツアラトゥストラよお前は「どれだけのものを神よりもたらされたと言ふのか」と、聖者は問ひます。

ツアラトゥストラは、神により歌を歌ひあげる才能を齎されてゐるのに、歌を作り神を讃嘆してはゐないのであります。

次に、ニーチェは「されど、ツアラトゥストラはただ一人になりし時、彼は斯くその心に語りき「不思議の事なるかな。この老たる聖者はその森にありて未だ尚ほ、神の死したることを知らざるなり」と。ここには、当時の全世界の知識人に多大な影響を与へた章句があるのです。

ニーチェがツアラトゥストラをして「聖者に学び、私も歌を作り、或は笑ひ、或は泣き、或は咄く。かくして神を讃ずる」べきである、と言はしめてゐたならば、ヒトラー率いるナチスもあれほど思ひあがらずに、世界の歴史に良い影響を与へ得たのではないかと、残念に思はれてならないのです。日本では、当時、朝日新聞が中心となり、ナチスの政治運動を批判を加へず、国民に推奨しました。日独伊新体制を「バスに乗り遅れるな」とばかりに煽りたてたものでした。付和雷同する国民心理を徹底して分析検討してをかないならば、目新しいスローガンに再度振り回されることになるでせう。

ニーチェは神を仰ぎ信ずることを止め「神は死せり」と言ひましたが、私達は、森の聖者のやうに、「神は生きてをられる。歌を作り讃嘆する」べきでせう。そのことなしには、私達一人一人の内心に[clear and cloudless heart]をとりもどせませんし、現代の文明病から脱することも決して出来ないと私は、思ひます。皆様は如何思はれますか。

三行目に進みます。

[It is the priceless gems of speech] 一・二行目の疑問文に対する答の形として三・四行目があります。[of]=[と云ふ。a city of Newyork=ニューヨークと云ふ都市。[What]に対する[It]であり「それは」の意。[priceless]=[too valuable to have a price ; not to be bought at any price]=[余りにも価値がありすぎて値段が付けられない、どんな値段でも買へない]の意。[gem]=[jewel]=[宝石][speech]は「その80」に既出=[Yamato's speech]=[やまとことば]の意。

三行目の訳は「それは、金では買へないやまとことばと云ふ宝石です」となります。

四行目に進みます。

[That sparkle, shine, and glow.] この行では[gems of speech]が生き活きと説明されます。[sparkle]=[to throw off sparks]=[火花を散らす]、[shine]=[to give light]=[光を放つ]、[glow]=[give off light and heat without flame]=[白熱する]の意。

四行目の訳は「それは火花を散らし、光を放ち、白熱する」となります。

【英詩の工夫(devices)について】

T. S. Eliotが詩を読む楽しみに詩人(poet)の工夫(devices)を発見することにある、と言ってをります。詩の中に散りばめられ隠れた工夫(devices)を時間をかけ、謎を解くやうに見出して行くことは、思はずニツクリしたくなるそんな喜びがあるものです。

頭韻(alliteration)が二組あります。

[c音]の頭韻

一行目の[clear and cloudless heart]この[c音]の重なりが先づ心の清く澄んでゐるさまを見事に形容します。

[s音]の頭韻

三行目の[speech]から[sparkle][shine]へと[s音]が響きを荘重に奏で出します。[s音]の響きから[spirit(魂)]に火が点くと言ふことが暗示されてゐるでせう。[sparkle](火花を散らし)[shine](光を放つ)。そこから[spiritual gifts]=[精霊の賜物]が得られるに違ひない、と思はれます。

[ou音]の脚韻

二行目の行尾の[show]と四行目の行尾の[glow]が脚韻を成してゐます。

意味上の対照

[cloudless]と[priceless]について

心が[cloudless](晴れ渡った)状態になることは、形而下の[physical](肉体的な)又は[material](物質的な)ことでなく[metaphysical](形而上の)ことでもあります。[cloudless heart](曇りなき心)は、[money]では手に入らない[priceless](値が付けられない)程、貴重な物なのであります。英語での[priceless love]は、「(偽りの無い)真性の愛」と日本語に訳されます。金銀財宝をいくら積み上げても得られるものではない、それが[priceless love]＝「(偽りの無い)真性の愛」として大切にされるのです。仏教で言ふ「悟りも同様の心の状態でありませう。[money]では手に入らない[priceless](値が付けられない)である本物を、私達は感動に焦点を定め短歌を創作する過程で追究したいものであります。

訳者・齊藤氏は御製に込められた御心を憶念して等価交換としての英訳を工夫してみたことが分かります。

「本物に触れる喜び」

明治天皇が「くもりなきころのそこのしるるは」と上の句で詠まれてゐますが、「くもりなき」その「心の底」が知られたときの喜びはどれほど大きかったでありませうか。皆様の心に、思ひ浮かべて見て下さい。上の句と「ことばの玉の光なりけり」下の句に介在する物として、[physical](物質界の)のもの、[material](形而下の)のものは、何も無いでせう。在るとすれば「ことば」のみであります。なのにそれ以上何も求めないでいい心の喜びが生まれて[sparkle, shine, and glow]してゐるのであります。これこそ本物に触れる喜びなのではないでせうか。

ショーペンハウエルの『幸福について』の一節を読んで見ませう。

「善良で中庸を得た温和な性格は、環境が貧弱でも、満足していただけるのだが、貪欲で嫉妬深い邪悪な性格は、巨万の富をいただいても、満足はしない。けれども精神的に優れた非凡な個性を絶えず楽しむ人ともなれば、一般人の求める享樂の大部分は、全く無くもがなの享樂であり、むしろ煩わしくうるさいばかりである。」(『幸福について——人生論——』新潮文庫P14)一般の人々は享樂を求めることに狂奔してゐるが、内面的に富を湛えてゐる人は、外に向かつてまた運命に対しても左程大きな要求をしない、と言ふのです。

「だからホラーティウス(訳注 ローマの詩人、紀元前65年——紀元前8年)は彼みずからを語って

宝石、大理石、象牙、チレニア(訳注 古代イタリアのエトルリア地方)の鑄造、画幅、銀の皿、ゲトゥーリ(訳注 古代アフリカ北西部の地方)産の深紅の染料で染めた衣装など、持たぬ人は多いけれども、見向きもせぬ人は少ない。」

と言ひ、またソークラテースは店先に陳列された奢侈品を見て、『私に用のないものがずいぶんあるのだな』と言つたことであつた。」

人生の幸福にとっては、[physical](物質界の)のもの、[material](形而下の)のものは、第一義的な物ではない、私達の生き方が如何にあるべきか根本的に自問自答するヒントがここにあるでせう。幸福を外に求めそれを得ることが人性の最大の目標になったときには、例へば、「世界一の金持ちになりたい」と言つて投資事業をしてゐた堀江某青年は、塀の中に叩きこまれました。彼は現代のいいスケープゴートなのでありませう。

明治十三年生まれの祖母は、幼い私が、食事の時にご飯をこぼすと拾つて自分がいただきながら「米は八十八の苦勞が込められてゐるから、米と言ふ。一粒でもこぼすな。感謝して戴かないと罰が当るよ。」と厳しく孫である私達に躰けたものでした。物質的に豊かに現代人は暮らしてはゐますが、明治の人々に比べて見ると、物を大切にしない。それが生み出されるまでに、注がれた苦勞を偲ぶ気持ちが育たず、心が貧しくなつてゐて、神罰が当るやうな無駄使ひを大人も子供も平気でしてゐるのではないでせうか。物にしても単なる使い捨てが物ではない。祖母にとっては孫の私がこぼした一粒のご飯は、八十八の苦勞から生まれた本物の米であつたに違ひありません。本物として命に触れ得る心遣ひが、内心に息づくそのやうな人の道を回復したいものであります。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

(参考文献)

- 『幸福について——人生論——』新潮文庫
- 『欧米名著邦訳集』国文研叢書

「むらぎもの心をたねの」 [The living verses that grow out]

教(明治三十七年)

むらぎもの

心をたねの

をしへ草

おひしげらせよ

大和しまねに

The living verses that grow out

Of true sincerity,

May they with flower and seed o'erspread

Yamaoto's land and sea!

参考の為に『明治神宮叢書 第七巻 御集編』を引用します。「むらぎものは枕詞。心を種のは古今集の序の語によらせ給へるもの。やまと嶋ねにはわが国内にの意。嶋根は島といふに異ならず。」(223頁)『古今集』の序文は紀貫之が作ったものであると伝えられてゐます。最初に英訳で読んで見ます。()に和訳を記してをきます。

“Many things happen to the people of this world, and all that they think and feel is given expression in description of things they see and hear. (多くのことが世の中にある人に起る、彼らが思ひ感ずることすべては、見るにつけ、聞くにつけ、その歌をなす。)

When we hear the warbling(鳥が囀る) of the mountain thrush(鶯) in the blossoms or the voice of the frog in the water, we know every living thing has its song. (我々が花に囀る鶯の声を聞き、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるものすべてその歌をなす。)

It is poetry which, without effort(苦もなく), moves heaven and earth, stirs the feelings of the invisible gods and spirits(目に見えぬ神々と靈魂), smooths(和らげる) the relations of men and women, calms the hearts of fierce warriors. (苦もなく天地を動かし、目に見えぬ神々と靈魂の心を掻き立て、男女の仲をも和らげ、たけきもののふの心をも鎮めるのは[poetry(歌)]である。

Such songs came into being when heaven and earth first appeared. (そのやうな歌は天地が開け始まりし時より生まれ出でた。)

However, legend(世に伝はる事) has it that in the broad heavens(久方のあめの下) they began with Prince Shita Teru, and on earth(あらがねの土の辺にしては) with the songs of Susano-o no Mikoto. (下照姫に始まり、あらがねの土にしては、スサノオの尊より始まった。) [Rodd, L. R. 『KOKINSHU—Collection of the Ancient and Modern Poems—』]

「世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物、聞く物につけて、いひ出だせるものなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざるなり。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり。この歌、あめつちの開けはじまりける時よりいできにけり。しかあれども、世に伝はる事は、久方のあめにしては下照姫にはじまり、あらがねの土にしては、素耆鳴尊よりぞおこりける。」

遣隋使のあとを受けて七世紀から九世紀にかけて遣唐使が朝廷から唐に公式の使節が十八回派遣されたと言はれてゐますが、寛平六年(894年)菅原道真の建議により中止されました。その理由は、① 唐の衰亡が第一に挙げられてゐます。次の理由として高校の教科書類では、② 多大な派遣費用の調達難などであるとされてゐます。これは、いかにも唯物史観による理由付けの感がしてなりません。私には隋や唐の文化に謙虚に日本が長いこと学んで来たのはいいが、国民がどうも、日本の文化や歴史への自信と誇りを失い、猿真似の日本になりさうだと言ふ危機意識が菅原道真らの為政者に働いたのでせう。日本独自に国風文化を興さないならば、滅び行く唐の

二の舞となるのではないか、愚図愚図せず訣別しよう、と云ふ健全な国民意識が高揚したからに違ひありません。漢詩文隆盛の時代から和歌隆盛の時代の転機となったのが「古今和歌集」が生まれた時代背景であるとは言はれます。この時代に明治天皇は「教のたね」を求めてをられたのでせう。

一行目から入ります。

[The living verses that grow out] [living]=[alive, active]=「生きてゐる、活発な」の意。[verse]=[poem]=「詩文・韻文」の意。[grow]=[to spring up and develop to maturity]=「芽を出し、成長して成熟する」の意であります。が二行目の[Of]を伴って[grow out of]=「・・・から生ずる」の意となります。

併せて二行目に進みます。

[Of true sincerity,] [true]は「その82」に既出。[sincerity]は[true and sincere]として「その28, 29」に既出。[sincerity]=[freedom from pretense :honesty : genuineness]=「偽りのないこと：正直であること：本物であること」

一・二行目の訳は「人間の心の真実から生まれるいのちのある詩よ」となります。

「敷島の道と世界史との関連性について——その2」

仁徳天皇の御陵は、エジプト(Egypt)のギゼ(Giza)のピラミッド(Pyramid)より大きい、又、秦の始皇帝の陵よりも大きく、つまり世界一大きいものだ、と言はれてゐます。ただ大ききだけに感嘆するのではなく、ここで少なくとも二つの点に留意して置く必要があります。

エジプトの王制や秦と言ふ大国は、滅び去り遺跡としてだけ残ってゐること。

神武天皇に始まる日本の天皇の御陵は、遺跡ではなく今日も祭りがなされてゐること。

我国は、東西文化が融合する国である日本として今日まで万世一系の皇統が存在してゐます。次の年表で世界史との関連の中で、日本の歴史の一筋の縦糸と言ふべきものを、確認して見ませう。世界史の中に於ての日本の歴史の特有性が、具体的に分かつてこそ、歴史に対する誇りとそれを守り続けるようとする意志と責任感も生まれて来る、と考へます。

西暦	天皇	日本の動き・世界の動き
B.C.2600年		黄帝China統一
B.C.2355年		堯即位
B.C.2255年		舜即位
660年	神武天皇	神武天皇即位。紀元元年。
562-52	綏靖(すいぜい)	この頃インドに釈迦(Buddha)生る。
551		孔子(Confucius)生る。
525	安寧(あんねい)	ペルシャ王Cambysesエジプトを征服。
500	懿徳(いとく)	中米にマヤ文明起る(Maya Civilization)

473	孝昭(かうせう)	越(Yueh)呉(Wu)を亡ぼす。
399		ソクラテス(Socrates) 処刑。
386	孝安	プラトン(Plato) アテネにAcademiaを開く。
264-41	孝霊	第一ポエニ戦争(First Punic War)
214	孝元	秦始皇帝(First Emperor of Chin) 万里の長城を増築。
58-51	崇神(すじん)	シーザー(Caesar)の仏英(Gaul and Britain)征服。
44		Caesar暗殺さる。
B.C.27年	垂仁(すいにん)天皇	ローマ帝国(Roman Empire)成る。
A.D.4		キリスト(Christ)生る。
29		キリスト ^{たくさつ} 磔殺(Crucifixion)
79	景行	Vesuvius 火山爆発、Pompei及び Herculaneum二市埋没
200	仲哀	神功皇后三韓(新羅Silla, 高麗Kokuryo, 百済 Pekche)親征。
285	応神	百済(Pekche)より王(Wani)孔子の教を伝ふ。
313	仁徳	ローマ皇帝(Constantine)キリスト教に改宗。
476	雄略	東ローマ帝国(Eastern Roman Empire)滅亡。
552	欽明	仏教(Buddhism)日本に伝来。

世界一大きい御陵は仁徳天皇の御陵(大阪府堺市)ですが、応神天皇の御陵(大阪府古市)も同じ位大きいものであります。高さだけで言ふならばクフ王のものが146.6メートルで最高であります。広さや大きさを比べるだけでは何も意味が無いでせう。何故日本の王朝が今日に続き、エジプトや他の国の王朝は滅びたのか、その原因を究明してをくべきでせう。

ここに、一つだけ基準となるものとして言へることがあります。

「権力による強制で建設されたか—ボランティアで出来上がったか」この違ひは大きいと思はれます。十数年前になりますが、N. H. K. のドキュメンタリー番組で、大阪に住む人の家宝が披露されてゐました。大切に仕舞はれてゐた座敷の奥から、取り出された家宝が、仁徳天皇の時代に先祖が奉仕作業に使つたと伝承されてゐるモッコであったのです。私はそれを見て、「日本には奴隷はゐなかつた、御陵の建設に奉仕したのが、悦びであり誇りであったから家宝にしてゐるのである。」と、日本の古代史が目から鱗が落ちるやうに分かりました。御陵は目に見えるものであります、その根底には[*grow out of true sincerity*](目に見えない真心)が確かに在りそこから生まれた。それ故に、日本の縦糸は権力闘争によって断ち切られることが無くて、現代に生きてゐるのであります。これは、誠に世界史上稀有なることなのであり、自信と誇りの源泉となるべきところではありますが一般の国民に

は知らされないでゐます。「むらぎものこころのたねの教草」は、感動を持って伝えられるべきものでありませう。皆様は如何思はれますか。

三行目に進みます。

[May they with flower and seed o' erspread] [May····!]の祈願文となつてをります。[they]は一行目と二行目を受けてゐます。拗つて[they]=「敷島の道」の意となります。[with flower and seed]は形容詞句で[they]を修飾し「花と実を持つ」の意。[seed]=「たね、根本」の意。例へば、キリスト教では[sow the good seed]で「福音を伝える」と使はれます。御製の「こころをたね」が英訳されてゐるのです。[o' erspread]=[overspread]=[to grow in abundance]=「一面に拡がる」の意。

三行目の訳は「花と実を持つ敷島の道よ一面に拡がれ!」となります。

四行目に進みます。

[Yamato' s land and sea !]どこに拡がつて欲しいかがここに於て述べられます。[Yamato' s land]だけで「大和しまね」の意であります。何故[and sea]がここに加へてあるのか考へて見る必要があります。一つの手がかりは「頭韻」=[alliteration]であります。[s音]による[sincerity]=(まごころ)[seed]=(たね)そして四行目の最後[sea]であります。英訳をした斎藤氏の願ひは[land]だけにと留まらず[sea]までも拡げたいとの願ひが込められてゐるからであらうと、私は受け止めました。[sea]は陸を取り巻く海でせうか。「海外」でせうか。考へて見て下さい。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- Rodd, L. R. 『KOKINSHU——Collection of the Ancient and Modern Poems——』
- 『明治天皇御集 巻中』

「ふむ人はあまたあれども」 [Full many a man would win]

ふむ人は
あまたあれども
ことのはの
道の高ねは
たれかこゆらむ

Full many a man would win the flower
Of Shikishima's tongue ;
And yet who shall the summit gain
Of soul-subduing song ?

一行目から入ります。

[Full many a man would win the flower] [Full]は詩文の古体で副詞の働きをして=[very]の意で使はれてゐます。[many a man]=[many men]=[「多くの人々」]の意。[win]=[gain]=[「得る」]の意。[the flower]=[「精華」]の意。

一行目の訳は「大層多くの人々が精華を得るものだった」と訳されます。

二行目に進みます。

[Of Shikishima's tongue ;] この行では何の「精華」であるかが述べられます。[Shikishima's]は「その81」で既出。[tongue]=[song]であり同じく「その81」で既出。日本では古来、和歌を作り豊かに人生を送る糧とする敷島の道を意味してゐます。

二行目の訳は「敷島の道の」となります。

三行目に進みます。

[And yet who shall the summit gain] [And yet]=[Nevertheless]=[「それにも拘らず」]の意。[shall]は「その79」に既出。[summit]=[the highest point ,top]=[「最も高い点、頂上」]の意。[gain]=[「(頂上などに漸く)達す、(目的を)遂ぐ」]の意で目的語を取る他動詞。散文的には[shall gain the summit]と書き直されます。

三行目の訳は「それにも拘らず頂上に達するのは誰であらうか」となります。

四行目に進みます。

[Of soul-subduing song ?] [soul-subdue]は [soul]=[fervor]=[「熱情」]と[subdue]の合成語であります。[subdue]=[soften]=[「和らげる」]の意ですが①自然界ならば「服従せしむ」②荒地ならば「開墾する」③野獣ならば「馴らす」④情欲ならば「抑へる」等の意と変化します。

四行目の訳は「熱情を鎮める歌の」となります。

「音声面からの工夫について」

①頭韻(alliteration)

二行目の[Of Shikishima's]と四行目の[Of soul-subduing]は[o音]と[s音]の頭韻が組み込まれてゐます。

②その頭韻に加えて、[tongue]と[song]が脚韻(rhyme)となって格調(Metre)を高めて魂(soul)に快感を及ぼしてゐます。

次を読み比べて見て下さい。

[Of Shikishima's tongue :] [Of fervor softening song ?]

に対して

[Of Shikishima's tongue :] [Of soul-subduing song ?]

[tongue]の余韻が残る中で[soul][subduing]と[s音]が重なり、疑問詞[who]による疑問文でありますから下降調で[song?]と締めくくられる、この「調べ」の素晴らしさを声に出して読み味識して下さい。納得が行くまで何度も読んで見て下さい。

「敷島の道の奨励について」

明治天皇が御生涯で遺された御製の数は、十万首の多きに達すると伝へ聞いてをります。御歌所寄人 千葉胤明は「歌聖としての大帝」の中で次のやうに記してゐます。

「あの日露戦争の御繁忙を極めさせられた時でさへも、毎日四十首より少なく遊ばされたことはなく、御詠草は、奉書を二つ折りにして、一枚に四首づつ拝写したのでありますが、これが一日十枚を下ったことがないといふご熱心でありました。

而もその御製も、これはかうなくてはならないと、御納得遊ばすまでは、あくまで御吟味遊ばしたのであります。」(244頁)

単純に計算して、一日に五時間創作の時間があつたならば(そんなにあつたとは思へませんが仮にてであります)一時間に八首であります。「日露戦争の御繁忙を極めさせられた時でさへも」否、御繁忙なときであるからこそ、[soul-subduing song](熱情を和らげる歌)が、生まれて来たのではあるまいかとさへ拝察されるのであります。一首一首の歌が、ただ詠み上げられるだけではなく「これはかうなくてはならないと、御納得遊ばすまでは、あくまで御吟味遊ばしたのであります。」には、推敲を丁寧になされたことが伺へます。私はこれには、感服致します。納得の行くまで吟味されたが故に、心が浄化され清々しい気持ちで次に向かはれることがお出来になられたのでせう。

[Full many a man would win the flower]短歌を詠草する人が数多あることの喜びが訳者・齊藤氏によって表現されてゐるところであります。

「歌御会始と平等の思想」

「詩作といふもの」が、諸外国では職業詩人にのみ限られたことであります。ところが 古来日本では、敷島の道として詩作——は、[poet](職業詩人)だけのものではなかったことは文明論的に特筆すべきことなのであります。一般の国民の中で、芸術に親しむことに加へて、人間の心の修養の面からも——詩作を踏み行なふことがなされて来たのであります。天皇ご自身が実践することによってご奨励され、しかも「ふむ人はあまたある」。それが日本なのであります。詩作をする切っ掛けは色々あるでせうが、身分の高く教養のある人だけでなく、極一般の庶民が詩作に参加して、その作品が、詩としての芸術性を厳密に審査した上で、もし、選に預ければ、天皇の御前で披講されるのであります。

明治三十八年一月二十九日に「新年山」の御題で行はれました御歌会の情景をここに引用します。平等の思想が全国に行き渡つてゐたことが伺へます。

「参列の光栄に浴した人々は、それぞれ定められた席について居ると、両陛下におかせられては、ご機嫌麗しく、出御遊ばされました。

いよいよ預選歌の披講となりまして、講座は寂として声なく、水を打ったやうになつてをりまして、何れも入選者が何人で、その歌がどういふのであらうかと、耳を敬てて居たのであります。

その時、講師の声がほがらかに、このしずけさを破つてひびきました。

『山梨県、陸軍歩兵二等卒妻、大須賀松枝』

意外の入選者なので、一同は、はつと胸を躍らせました。

軍国の新年歌御会始には、ふさはしいやうにも思はれるし、さりとは又珍しいことであると、誰しもが考へたらしいのも無理のない事でありました。

陛下には、御式中は常に御微動だもされないのであります、この一刹那、御頭を少し御傾け遊ばされ、講

師の読み上げる預選歌を、じっと御聴きあそばさうとなされる御様子でありました。

講師の声は、しめやかにつづきました。

つはものに召出されしわが背子は
いづこのやまに年迎ふらん

人も人なり、歌も歌なり、列み^なるもの一同、ぐっと胸をうたれたのであります。

陛下には、この時極めて御感深く聞こし召された御様子に拝しました。

大須賀二等卒の妻女の歌をきこし召されて、陛下には深く御心を御動かし遊ばされたのでありませう。

眼前咫尺の間に、竜顔を仰いで、陛下のこの御様子を拝し奉って私どもは、思はず胸がこみあげて来て熱い感涙のために眼をうるほしたのであります。もし御式場でなかったならば、私は取り乱して泣いたに相違ありません。

限りなく御仁慈にわたらせ給うた陛下の大御心を拝察しまゐらせますると、今も猶、眼底に涙の宿るを覚えるのであります。

あらたまのとしたつ山をみる人の
こころごころを歌にしるかな

この御製は、この歌御会始の終わった後、陛下の遊ばされたのであります。この御製のかげには、かうした一場のうるはしい物語^{かく}が蔵されてゐたのであります。」

大須賀松枝の夫である「陸軍歩兵二等卒」は、観光旅行で、外国に行つてゐるのではないのです。日露の戦ひの最前線に出て、国家存亡を賭けた戦ひに明日の命の保証が無い身なのであります。

つはものに召出されしわが背子は
いづこのやまに年迎ふらん

女手一つで家を守つて、新年を迎へようとしてゐるのです。主人がビジネスで海外に行つて留守ならば、御土産を楽しみに待つてをれば良いでせう。「いづこのやま」が戦死者続出の203高地であるかもしれないのです。

「人も人なり、歌も歌なり、列み^なるもの一同、ぐっと胸をうたれたのであります。

陛下には、この時極めて御感深く聞こし召された御様子に拝しました。」

明日の命が知れない激戦地で新年を迎へてゐる一兵士とその妻の心と明治天皇の大御心とが、地位の差を乗り越えて平等に生き活きと通ひ合ったのであります。

[who shall the summit gain of soul-subduing song ?] (誰が熱情を和らげる歌の頂点に達するのであらうか) 修辞疑問文であり、一般的な解釈では

その答は[no one shall not gain the summit of soul-subduing song.] (誰もそこに達することが出来ません) であります。

御製では「ことのはの道の高ねはたれかこゆらむ」のところであります。「誰が越えたのでありませうか?」

その一人は、名高い専門の詩人ではない、無名の一婦人である大須賀松枝と言ふ「陸軍歩兵二等卒」の妻であつたと言ひ得るでせう。皆様は如何思はれますか。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○『明治大帝』大日本雄弁会講談社 昭和二年発行

「国たみのことばの花を」 [The flowers of Yamato's tongue]

国たみの
ことばの花を
わが窓に
つどへてみるが
たのしかりけり

The flowers of Yamato's tongue
That bloom among my folk
Are pleasing in my sight and grace
My casement when I look.

一行目から入ります。

[The flowers of Yamato's tongue] [flowers](=精華)は「その82」に既出。[Yamato's]は「その80」に既出。
[tongue](=国語)は「その81」に既出。

一行目の訳は「大和ことばの精華は」となります。

二行目に進みます。

[That bloom among my folk] [That]は関係代名詞で先行詞は前行の[The flowers]であります。[bloom]=[to produce blooms :flower]=「開花する :花を咲かせる」の意。[among](=の中に)は「その49」に既出。[folk](=国民)は「その39」に既出。

二行目の訳は「国たみの中に花を咲かせる」となります。

「天皇と国たみの関係について」

明治時代のことだから「国たみ」は「臣民」=[subjects]と英訳されるのが当然ではないかと私は思ったのでありますが、齊藤氏は[my folk]と英語に直してをります。何故でせうか。意味上からは、[folk]は元来[people]と同義語の集合名詞でありまして、[folk-song](フォークソング)[folk-lore](民間の口伝)[folk-tale](伝説)などと使はれます。米国では「内の人たち:家族」のことを[my folks]と言ひます。[folk]は、天皇と臣下の関係ではなく、天皇を親とするならば親子関係のやうな[harmonious(和合せる)]な情意の交流が感じられるのであります。[the folk]でなくて[my(私の)]を附した[my folk]の響きに一層その感を強くします。

三行目に進みます。

[Are pleasing in my sight and grace] [Are pleasing]の主部は一・二行目にあります。[pleasing]=[giving pleasure]=「楽しみを与へる」の意。[sight]=[the distance a person can see]=「人が見ることの出来る距離」の意。[grace]=[to adorn]=「飾る」の意。[transitive verb=他動詞]であります。その目的語は次行にあります。

三行目の訳は「私の面前に楽しみを与へそして飾る」となります。

四行目に進みます。

[My casement when I look,] [casement]=[a window with a casement]=「開き窓わくを取り付けた窓」の意。詩では[window(窓)]を[casement]で表現します。(参照『OXFORD ENGLISH DICTIONARY』)一般の家庭の窓に何かメモ紙を貼り付けたやうな物ではないでせう。ここでは全国から送られてきた二万首近くの和歌の作品、つまり——[works displayed in the casement](ケースに陳列された作品)のこととせう。[look]=「(視

線を向けるの意味にて)見る、眺める」の意。

四行目の訳は「わが陳列ケースに納められた作品を私が見る度に」となります。

音声面から見てみませう。

①二行目の[folk]と四行目の行尾の[look]が脚韻(rhyme)を踏んでゐます。

②散りばめられた[m音]と頭韻(alliteration)——[my]とのハーモニー

The flowers of Yamato's tongue

That bloom among my folk

[Yamato's] [bloom] [among]それぞれの[m音]が、声に出して読む人の 胸の中に留められ、響きを湛へ[my folk]に凝縮されて行きます。

Are pleasing in my sight and grace

My casement when I look.

[Are pleasing in my sight]=「私の目を楽ませる」ものは[My casement]に納められてゐます。どんなに価値あるものでありませうか。「その83」にありました[the priceless gems](=どんなにお金を出しても決して買へない宝物)として[sparkle, shine, and glow.](=光を放ち輝いてゐる)ものであります。

明治天皇の宝物は、ダイヤモンドや金銀財宝ではないのです、このやうにして国民から寄せられた和歌なのであります。この伝統は今上陛下にも宛ら継承されてゐまして、今年平成十八年の御題は「月」であり、国民の一人として私も短歌を創作し、半紙に墨書して宮内庁にお送り申し上げた次第でした。

平成十八年の八月に、ハワイから高木タエアと言ふ日系四世が日本にA.L.T.として赴任して来ました。九月になった頃、英訳された御製の「敷島の道」がテーマの「その78」から「その86」のところをタイプして見せ、「これらの英詩の感想を聞かせて下さい。」と尋ねてみたことがあります。タエア先生は「これはイギリスのエリザベス朝の作品のやうですね。」とか「フォームはシェークスピアのソネット(sonnet)のやうですね。」と感想を述べました。それを聞いた後に「実はこの英詩の作者は、日本の明治天皇ですよ。」と原作者を明かすと目を丸くして驚き「すばらしい(Priceless!)」と感嘆しました。

ソネット(sonnet)は[lambic Pentameter](弱強調の五詩脚)で十四行詩でありますから、厳格に言へば少し異なりますが、フォームから読めば、連想させる作品であることは確かであります。御製は[lambic Tetrameter](弱強調の四詩脚)で四行詩であり、「敷島の道」がテーマの四首を連続して読めば十六行詩となってをります。タエア先生が英訳された御製を「シェークスピアのソネット(sonnet)のやうですね」と感嘆したのも成る程と頷けるのであります。

ところで、比較することは礼を失することになるかもしれませんが、明治天皇は、世界最高の詩人であり戯曲家のシェークスピアに匹敵する詩をお作りになってゐたから、齊藤氏が英語に翻訳できたと言へることになるでせう。但し、明治天皇はこのやうな比較を、決して好まれなかったに違ひありません。何故なら、大元帥陛下としてのお勤めをなされるのがメインのお仕事でありますから、文筆で生計を立ててゐる詩人たちとは掘って立つ基準が根本的に異なるからであります。私達は御製を、今日、何時でも目にすることができますが、天皇と言ふ地位は、皆様ご存知の通り、[China]や西欧諸国の帝王と違ひ、権力闘争でなりあがった存在ではありません。ご幼少の頃からその地位に相応しい人格となるべく自己修養に努めて来られたのが天皇でありますから、闘争して人を押し退けたり自己宣伝に類することを好まれないのであります。明治天皇は御製が世間に出ることを好まれなかったとさへ言はれてゐます。私達の心が及ばないほど奥床しい御方なのでせう。

「御歌所について」

明治元年御即位なされた後に、諸般の制度が定められました。その中に文学御用掛を置かれ、そこに、特に御歌掛と言ふものが設けられ西三条季知卿がこれに携りました。明治六年に高崎正風が代って、同係を拝命し、翌七年より、毎年歳の初めに、民間から詠進をご嘉納あらせられるやうになった、と云はれてゐます。

明治十九年には「御歌所」が設けられてこの御歌掛は自然廃止となり、高崎正風がその所長を拝命したのであります。明治十九年二月に『明治天皇紀 第六』には「宮内省管制を定む」の項があります。「(前略)又、侍

従職中に御歌掛を設け、御歌掛長・参候・寄人を置き、六日式部次官高崎正風を以て御歌掛長と為す、尋いで、十五日宮内省勅任・奏任官員等及び年俸を改定す、」(542頁)西洋の文明や哲学を日本人が、心理的に上位に置き、軽佻浮薄な気持ちになって、それを追い駆け猿真似をするのではなく、「元立ちて道生ずる」と云ひます。古来からの日本の伝統に立つ敷島の道の正しい位置付けがされた上でこの改革が為されたのでせう。

『明治天皇の御聖徳』(昭和七年 天皇徳奉賛会)によれば

「天皇は御製を御発表遊ばさることは好み給はなかつたが、高崎御歌所所長は、国民に御製を謹誦せしむることは、世の風教に益を与ふこと少からざるを思ひ、独断にて自ら責を負ふてこれを発表したのであると伝へられてゐる。」(472頁)とあります。

高崎御歌所所長が「独断にて自ら責を負ふてこれを発表した」。ここは味はひ深いところであります。明治天皇はご裁可を与へられないから「独断にて」発表した。もしお咎めがあれば腹を切つて「自ら責任を執る」覚悟で発表した、と言ふことであります。その恩恵に浴して私達は今、かうして御製を拝誦できてゐるのであります。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『明治天皇の御聖徳』(昭和七年 天皇徳奉賛会)
- 『明治天皇紀 第六』(吉川弘文館)
- 『OXFORD ENGLISH DICTIONARY』発行

「わけばやと思ひ入り」 [I chose with care the path of life]

折にふれて(明治三十七年)
わけばやと
思ひ入りぬる
道にこそ
高きしをりも
みえそめにけれ

I chose with care the path of life
Whereby to walk the world ;
And I began to see at last
A lofty sign unfurl'd.

参考のため『明治天皇御集 巻中』を引用します。「志立ちて同時に、その道開くる、微妙の真理を詠ませ給へるなり。」(243頁)

一行目から入ります。

[I chose with care the path of life] [chose]は[choose]の過去形であり=[to select especially after consideration]=「特に熟慮の後に選ぶ」の意。[with care]=[carefully]=「注意深く」の意。[the path]=[a course or a way of life or thought]=「人生行路、生き方または物の考へ方」の意。[life]=[資質、特性]の意。平易に書き換へますと[I chose carefully which road to take in life](=私は、人生でどの進路を取るべきか注意深く選んだ)となるでせう。

一行目の訳は「私は注意深く人生行路を選んだ」となります。

二行目に進みます。

[Whereby to walk the world ;] [Whereby]=[by or through which]=「それによって又はそれを通して」の意。平易に書き直しますと[Where I should go in the world;](=世界の何処に進むべきか)であり、例へば[The path I chose was to come to somewhere in the world;](=私の選んだ道は世界の何処かであった)そこがアメリカであるかもしれないし医学の世界であるかもしれないし実業の世界であるかもしれません。[Everything you do is a different road.](=あなた方それぞれが選ぶ道はそれぞれ違ふ道であります)[It leads to somewhere different.](=その道は何処か違ったところに通じてゐます)と言ふことになるでせう。

二行目の訳は「世界の何処へ進むべきか」となります。

三行目に進みます。

[And I began to see at last] [And]=[then]=「而して」の意。[begin to]=[can]=「可能となる」の意。[see]=[to perceive with the eyes, understand]=「目で知覚する、理解する」の意。[at last]=[finally]=「遂に」の意。

三行目の訳は「而して私は遂に見ることが出来始める」となります。

四行目に進みます。

[A lofty sign unfurl' d.] [lofty]=「高尚な、気高い」の意。[sign]=[mark]=「しるし」の意。[unfurl' d]は「語中音省略」(Syncope)であり=[unfurled]=「広がる」であります。=[not furled]=[not hidden any more]=「(光景を)眼前に広がる」の意。

四行目の訳は「高き葉が眼前に帆を畳むことなく広げられるを」となります。

音声面から見て見ませう。

①格調 (Metre)

[I chose / with care /the path] / of life]

弱 強 / 弱 強 / 弱 強 / 弱 強

弱強調 (Iambic) の四詩脚 (Tetrameter) の行となつてをります。人生の意志的な出発に際して、「注意深く」を [carefully] と行尾に置くのではなく [with care] と弱強調で挿入してをり、又「道」をただ [the path] だけでなく「生き生きとした」道となるべく弱強調の [of life] を加へてゐます。それは、正面から立ち向かはんとする [positive] (ポジティブ) な [image] (イメージ) が籠められてゐるからでせう。

②頭韻 (Alliteration) と脚韻 (Rhyme) について

[I chose with care the path of life

[Whereby to walk the world ;

[with] [Whereby] [walk] の [w 音] —— (唇を丸く突き出し [u 音] より固く結び「う」と発音する) —— が [the world] につながる、これは「世界」へと広がるのですから、不易で且つ現代性のある詩となつてゐるでせう。

一行目の [the path of life (人生の道)] と四行目の [A lofty sign] が意味上から呼応してをります。そして [the world] と [unfurl' d] が脚韻 (Rhyme) となつてゐるのです。散文的に言ひ換へますと [And finally I can see a lofty sign, which has not been hidden any more.] (而して私は遂に、高き葉を見ることが出来る。其れは最早何物にも隠されぬ)

御製の「道にこそ」と「高きしをりもみえそめにけれ」が掛り結びとなつてゐます。天下に一人しかゐない私たち一人一人の選ぶ道は [Where to go in the world] (世界の何処に進むべきでせう。)[And] には努力精進の時間が込められてゐます。[at last] (遂に)「高きしをりも」「みえた」と詠まれてゐません。「みえそめにけれ」と言はれます。高所から「見えるものなり」などと説教を垂れられるのではない。明治天皇は国民と同じ次元にお立ちになられて「見え初む」とご体験を振り返られお詠みになられてゐるのであります。英訳では [I began to see at last] と翻訳されてゐます。深く私立ち一人一人のところに味はふべきところであります。

「私は注意深く人生行路を選んだ」

「世界の何処へ進むべきか」

「而して私は遂に見ることが出来始める」

「高き葉が眼前に帆を畳むことなく広がるのを」

皆様は人生の自分の踏むべき進路を定められましたか。「高きしをりも」「見え初める」日が必ず来ることを心に描きませう。

最後に二度、日英の御製を拝誦して終ります。

「おほぞらにそびえて見ゆるたかね」 [To even the loftiest mountain's heights]

峯(明治三十七年)
 おほぞらに
 そびえて見ゆる
 たかねにも
 登ればのぼる
 道はありけり

To even the loftiest mountain's heights
 That tower to the sky
 There winds a pathway, which to find
 If thou wilt only try.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「いかに困難なる事業にも、その志だに堅からば、成功すべき手段は必ずあるべきよしを譬へ宣へるなり。かの朱熹が、『精神一たび到らば何事か成らざらむ』といへるに同じ」(191頁)

一行目から入ります。

[To even the loftiest mountain's heights] この行を名付けるならば立志の行であり最初に来てゐます。[even]=[fully, quite]=[全く、～でさへ]の意。[the loftiest]=[the highest]=[最も高い]の意。[heights]=[the highest]points]。

一行目の訳は「最も高き頂点でさへも」となります。

二行目に進みます。

[That tower to the sky] [tower]=[rise to a great height]=[聳える、巍然と屹立する]の意。

二行目の訳は「大空に、巍然と屹立する」となります。

三行目に進みます。

[There winds a pathway, which to find] [wind](名詞の「風」ではなく動詞でありますからワインドと読む)=[twist]=[うねうねと曲がって進む]の意。[a pathway]=[a track made by foot travel]=[小径、(馬路に対する)人道、人たる者の踏むべき道]の意。散文的に書き直しますならば[, which to find]=[which pathway you should find]となります。

三行目の訳は「小径がうねる、探し出すべきその道」となります。

四行目に進みます。

[If thou wilt only try.] [If...only]=[～しさへすれば]の意。[thou]は古語であり=[you], [wilt]も古語であり=[will]のことであります。[try]=[to make an effort to do]=[～しようと努力する]の意。

四行目の訳は「もしあなたが努力しさへすれば」となります。

修辭的には隱喩法(metaphor)が使はれてゐます。即ち[mountain]は何に譬へられてゐると思はれますか。「おほぞらにそびえて見ゆる高い山」は、目に見える山ではない。到底不可能に見える人生(life)の難事に譬へられてゐることがお分かりになるでせう。

平易な英文で書き直し味はつて見ませう。

[There are paths in life that can be found if you try to find them .](あなたが、人生において進むべき

道を見いだす努力をするならば道は存在するのです。)

[These paths can even be found in the highest mountains in life.](これらの道は人生の一番高い地点に見いだされ得るのです。)

[the highest mountains]とは人生の局面(aspects of life)を示唆してをりますから[the most difficult or dangerous places](最も困難であり危険を伴ふことがあるでせう) [Anything is possible if you only try to find the pathway.](もしあなたがその道を見いだす努力をしさえすれば、如何なる事も可能となる)と解されます。

英訳は[If thou wilt only try]と未来時制で表現されてゐます。御製を受け止めた国民の立場で英訳がされてゐるからです。

此処で御製の下の句を見てみますと「のぼればのぼる道はありけり」と過去時制が使用されてゐます。「道はありけり」と明治天皇は、来し方を振り返り給ひ「確かに道はあったなあ」と過去となった歴史をご覧になってゐます。過去の詠嘆「けり」はしみじみと深く味はふべきところであります。時は日露戦争の最中であります。

「日露戦争と高嶺について」

明治三十七年二月に、日露両国の外交は遂に破綻したのであります。宣戦の大詔は煥発せられたのであります。

戦局が進むにつれて明治三十七年六月二十日、満州軍総司令部がおかれしました。大山元帥が総司令官に、そして児玉大将が総参謀長に任ぜられました。地政学的に見て満州を制圧するには、旅順が制圧されねばならなかったからでした。バルチック艦隊が海路南から日本海へと攻め上って来る前に、一日も早く旅順を落としてゐないならば、バルチック艦隊と旅順港の東洋艦隊との挟撃を恐れたから、海軍の方は、強く要求してゐたのであります。

ここで『少年日本史』を読んでみませう。

「大本営では、無理押しを承知で、第三軍に旅順の攻撃を命じました。

第三軍は、第一、第十一、両師団を以て、五月に編成せられ、司令官乃木中将之をひきいて旅順に向いました。第九師団も之に加わり、八月十九日、第一回総攻撃を行いました。難攻不落を誇る旅順の要塞は抜けず、我が軍五万のうち死傷一万五千に上りましたので、次には九月に正攻法を採りましたが、十分の成果がならず、十月二十六日、第二回の総攻撃も、我が死傷者三千八百に上りました。」(六百七十六頁～六百七十七頁)

『少年日本史』では第一回の総攻撃を記してをりますが、総攻撃に到る前の一一月二十六日より同三十日に亘る戦闘に対して明治天皇は左のやうな勅語を下し賜はつてをられました。

「攻囲軍は旅順要塞の前進陣地に対し、屢々峻要を冒し、劇戦数日に亘り、遂に敵を其本防禦線内に撃退せり。

朕深く其の勇武を嘉す。」歴史は丁寧に見て行くべきなのであります。皆様は「戦友」と言ふ軍歌を聴いたことがありますか。私達の世代は、幼い頃から、祖父や父達が歌ふのを聞いて、遙か満州で命がけて戦はれた父祖達のご苦勞を偲んだものです。旅順要塞攻撃に辿り着くまでに、「防人の歌」に比しうる親子の別れがあり、船の旅があり、敵地への上陸作戦が、一步一步我身に及ぶ危険をものとししないで、進められて来たのであります。

「『戦友』を聴いたことがありますか。」

明治が生んだ名歌「戦友」の歌詞を此処に引用します。明治三十八年頃の作と云はれ、日露の戦ひでの公私の関係と友情そして戦死者を出した親への、思ひやりがリアルにして切実に歌ひ上げられてゐまして、血脈としての歴史がこのやうな軍歌を通して私達の世代には、伝へられてゐたのであります。

一、ここはお國を何百里 離れて遠き 満洲の 赤い夕日に照らされて 友は野末の石のした

二、思へば悲し 昨日まで 真っ先駆けて 突進し 敵を散々懲らしたる 勇士はここに眠れるか

ここには、戦友である勇士が、敵の弾に中たり倒れたことが歌はれてゐます。倒れた友を後に残し、軍規に従

ひ、後ろ髪を引かれる思ひで、突貫攻撃を続けなければならなかったことが歌はれます。日が暮れて戦闘が中断された後に友を探しに戻るところが歌はれます。

七. 戦ひすんで日が暮れて さがしにもどる心では どうぞ生きて居てくれよ ものなといへと願ふたに

八. 空しく冷えて魂は くにへ帰ったポケットに時計ばかりがコチコチと 動いてゐるも情けなや
生き残った方の兵隊が戦死した友の家に手紙を書いて送ったのでせう。その手紙には、
遺品として時計が添へられたのであると歌詞から伺へます。この歌は十四番まであります。

十四. 筆の運びは拙いが行燈の^{あんどん}かげで親たちの 読まるる心 思ひやり

思はずおとす^{ひと}しづく

「我が軍五万のうち死傷一万五千に上りました」の箇所に会った時に、皆様は如何なる感懐を抱きますか。一人一人の戦死者には、帰りを神に祈って待ってゐた家族・肉親がゐたのであります。もし戦死の報に接したらどんな思ひがするでせう。家族や肉親はどれほど嘆き悲しむでせうか。その思ひに些かなりとも共感できたならば、胸が熱くなり涙が込み上げて来るのではないでせうか。「思はずおとす^{ひと}しづく」まで一緒に声に出して歌ひ歴史を偲びませう。

飼ひ犬や飼ひ猫が死んだら涙を流し、家族同様に葬式を挙げる時代であります。私達の國のために命を一一掛替へのない尊い命を一一捧げられた人に対しては、冷静に客観的に見るのが歴史であると教へられ、犬や猫ほどにも心が通はない。遺族にとってはこの国は、「犬死」どころではない歴史がまかり通つてゐるのであります。しかし、嘆くばかりでは駄目でありませう。見方によっては、心優しいこのやうな人たちも、正しい歴史が伝へられれば、翻然と追悼の誠に目覚めるに違ひありません。

乃木軍司令官は左のやうな奉答文を捧げてをりました。

「旅順要塞攻撃の準備戦に於ける戦勝に対し、特に優握なる勅語を賜ひ、感激に堪へず、臣等益々奮勵誓つて軍の任務を達成せんことを期す。

右謹みて奉答す。」

「旅順要塞攻撃」これを前にしてゐたのです。乃木軍司令官は、天皇陛下から「優握なる勅語を賜ひ、感激に堪へず、」と言ふ。旅順要塞を攻め落とすと言ふ任務を達成するまでは、肉弾突撃が繰替えされた文字通りの死闘でありました。途中「乃木では駄目だ。」の声も聞かれたでありませう。司馬遼太郎は「坂の上の雲」で乃木を凡将として扱つてゐますが、明治天皇は最後まで乃木を信頼されました。その信頼関係こそが日露の戦争の勝因であつたと思はれます。[The Globe](TUESDAY, JULY 30, 1930)をここに引用します。[A great ruler]のタイトルで明治天皇の崩御を悼んだ記事の中に[the personality of the Monarch](ミカドの人格)に言及する箇所があります。

[But it would probably be accurate to say(正確には次のやうに言ふべきではないかと思はれる) that but for the personality of the Monarch(もし君主たるミカドの人格と言ふものが無かつたならば) the statesmen would have been able to accomplish very much less,(政治家たちもあれほどまで仕事を遂行できなかつたであらう) and to do it much more slowly(また遂行するにあたつてもっと時間がかかつたに違ひない). Among the qualities attributed to him(ミカドが備へてゐた資質の中に) are the power of judging character(人を見抜く能力があつて)—probably the most valuable that a Sovereign can possess(これは一國の君主が持つべき資質の中で最も貴重なものである); great assiduity in business(ミカドは国事に孜々として倦ず精勵した), as was shown by his invariable attendance at the Conferences preceding the grant of a Constitution(欽定憲法に先立つ會議に欠かさず出席したことに示されるやうに); a wonderful memory for detail(細かいことに到るまで記憶力に優れ); great courage, both physical and moral(肉体的、精神的ともに極めて勇氣があつた); and complete disregard of his own personal comfort(又ミカドは、自身の個人的安樂をまったく顧みることがなかつた). (三十七頁)『世界に於ける明治天皇』下巻

「もし君主たるミカドの人格と言ふものが無かつたならば、政治家たちもあれほどまで仕事を遂行できなかつたであらう。」とありますが政治家だけでなく軍人にして同じ事が言へるでせう。

日露戦争に於ける「おほぞらにそびえて見ゆるたかね」とは、明治天皇におかせられては、果たして何であっただらうか、と考へて見ませう。

日本海海戦では、ロシアのバルチック艦隊であったでせう。五月二十七日は「海軍記念日」として祝はれてゐました。陸軍では「奉天会戦」であり「陸軍記念日」として三月十日が、昭和二十年までは「日東男子まゆあげて 無比の勝利を世に誇れ」と祝つてゐたのであります。「登ればのぼる道はありけり」父祖達が命を賭けて戦ひ拓いて来た道であったのではないでせうか。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『世界に於ける明治天皇』下巻
- 『少年日本史』
- 『明治天皇御集 巻中』

「くのためにふるひし筆の」 [Ye offspring of the living pen]

筆(明治三十七年)
 くのために
 ふるひし筆の
 いのち毛の
 あとこそこのこれ
 萬代(まんだい)までに

Ye offspring of the living pen
 The bard divine doth ply
 All in the cause of public weal,
 May ye abide for aye !

一行目から入ります。

[Ye offspring of the living pen] [Ye]=[thou]の複数形=「汝ら・・・よ」の意。[offspring]=[progeny]=「子孫」、複数形は[offspring][offsprings]の両形があります。拗って、[s]が付かなくてもここでは、「子孫達」の意で使はれてみると取ります。[living]=[active]=「活発な、活き活きた」の意。[pen]=[an instrument for writing with ink]=「インクでものを書くための道具、筆」の意。一行目の訳は「汝ら活き活きた筆から生まれた子孫達よ」となります。

二行目に進みます。

[The bard divine doth ply] [bard]=古語で①Celtic minstrel(古代ケルト族の)「吟遊詩人」西暦五百五十年にアングロサクソンによりケルト人は征服されましたからそれ以前の時代です。②[poet honoured at Eisteddfod](西暦千八百二十二年、英国ウェールズ芸術祭で認められた詩人)の意でありますから共に[poet]よりも歴史を感じさせる表現です。[divine]=[like gods]=「神の如き」の意。[doth]=[does]=強勢助動詞として[ply]を強調する。[ply]=[work hard, work diligently]=「せっせと使ふ」の意であり目的語は一行目の[pen]であります。二行目の訳は「神の如き詩人が誠にせっせと振ふ」となります。

「誰が筆を振ふのか?」

英語では主語の次に動詞が来て文が成り立ちますが、この御製の「くのためにふるひし筆のいのち毛の」の中で動詞に当るのは「ふるひし」であります。ならば「誰が筆を振ったのでありませうか?」英語に直す場合にはその詩文に相応しい主語を置かないならば文とはなりません。翻訳者は[The bard divine](神の如き詩人)が主語でなければならぬと考へたのでありませう。「古事記」「日本書紀」そして「万葉集」に始まる日本の古典は、[The bard divine](神の如き詩人)によって筆が振はれ書き残されたのではないでせうか。

明治三十九年の御製を二首此処に引用して、[The bard divine](神の如き詩人)と明治天皇との関係がどのやうなものであるかの的を絞りながら考へたいと思ひます。

書(明治三十九年——一九〇六——御年五十五歳)

石上いそのかみふるごとぶみをひもときて聖ひじりの御代のあとを見るかな

「石上」は「古」に係る枕詞です。明治天皇は、「古事」が書かれた「ふみ」(=「書物」)を「ひもとき」(=「繙き」)給ふのであります。「聖の御代のあと」を静かに仰ぎ見てをられるのでせう。然も、謙虚な御姿勢で「古事ぶみ」を繙いてをられます。

^{ひじり}
「聖の御代のあとを見るかな」「聖」とは権力ではなく高い徳で天下を治めた人のことであります。「万葉集」(一、二十九)には「たまたすき畝火の山の榎原の聖の御代ゆ^あ生まれましし神のことごと」とありますから神武天皇以来の天皇の御統治を神の前にひれ伏すやうに偲んでられる。「見るかな」の「かな」は歎嘆が込められてゐます。徳による歴代天皇の御治世が思ひ浮かべられ、その具体的事例の一つ一つに感動なされたことが伺えます。溯れる歴史が深ければ深いほど、それに比例して未来への信(belief)が、縦糸となって確実に遠くまでプロジェクト(project)されるでせう。

筆(明治三十九年)

思ふことつらねかねてはつくづくとふでのさきのみうちまもるかな

明治天皇を「歌聖」と後世の人が呼びますが、いつもすらすらと歌ができたのではないやうです。「思ふことつらねかねては」の「連ぬ」とは「詩歌を詠む」の意であり「思ふこと」が詩歌に詠み上げ兼ねてをられるのでせう。熟と筆の先を、目を離さずに、ご覧になつてをられます。

主語と動詞の関係から見てみませう。明治天皇である「私(I)」が主語であり、「うちまもる」が動詞です。この御製が出来上がるまでの心象をお詠みになられたことがおわかりになるでせう。同じやうに考へるならば、上の御製も「私(I)」が主語となる分けであります。訳者・斎藤氏から見れば「私(I)」と置くことでは、詩の韻律が成り立たない。「私(I)」ではなくて=[The bard divine](神の如き詩人)と言ふことで、[Iambic Trimeter](弱強三詩脚)となります。詩の形式としては、一行目と三行目は[Iambic Tetrameter](弱強四詩脚)の行であり、二行目と四行目は[Iambic Trimeter](弱強三詩脚)の行であり併せて四行の[Ballad-metre](バラード調)の作品となっております。

三行目に進みます。

[All in the cause of public weal,] [All]=[Wholly]=「完全に」の意。[in the cause of]=「…の為に」の意であり、例へば「正義のために」は英語では[in the cause of justice]と言ひ、また「人道のために竭さん。」は[I will labour in the cause of humanity.]となります。[the public weal]=[the public welfare]=[well-being, health and prosperity -of a person or a state]=「(一身上の)幸福、福利。(国家の)安寧、福祉」の意。「私は公に尽す。」は英語に直せば[I will labour for the public welfare.]となります。三行目の訳は「一切が国家国民の幸福と安寧のため」となります。

四行目に進みます。

[May ye abide for aye !] [May]は祈願文を作るために置かれてゐます。[abide]=[last, live in a place]=「持続する、ある場所に住む」の意。[aye]=[always]の古語であり「常に」の意であり、[for aye]=[for ever]=「永久に」の意となります。

四行目の訳は「汝ら子孫が永久に生き続けますやうにと祈る。」となります。

散文的になりますが、平易な英語に書き直して味はひませう。

[You children of the poet]

[The divine poet writes diligently for the children] [divine]=(神のごとく、神聖な)とは[Any poet who writes for public welfare is divine.][公共の福祉を願って書く詩人は全て神聖である。]とここに定義付けられるでせう。

[Because the poet wants to bring public happiness.]

[I hope the children can last forever.] [forever.](永久に)が[for aye]となつてゐるのは[ply](振ふ)と脚韻を踏むやうにてあります。声に出して発音すれば[forever]は開いた口から外へ出て消えて仕舞ひますが、一方[plai]の「アイ」と[for aye]の「アイ」が喉の奥から胸の中そして深く下腹まで響くのが感じられるでせう。御製の「萬代 までに」が、御祈りに深々と応へるやうに見事に英訳されてゐるところであります。

最後に日英の御製を二度拝誦して終了します。

〈参考文献〉

○『歴代天皇の御歌』日本教文社

「ともすればうきたちやすき」 [The minds of men are apt to stir]

塵(明治四十一年)

ともすれば
うきたちやすき

世の人の
心のちりを

いかでしづめむ

The minds of men are apt to stir
With every windy gust ;
How shall I clear the murky air
From blinding, maddening dust ?

参考のために『明治天皇御集 巻下』を引用します。「人情の機微なるところを巧みにたとへさせ給へり。ともすればは、ややもすればの義 いかでは俗に、どうぞしてといふに同じ。」(四百三十二頁) 払ふべき「心のちり」が直ぐにでも掃き捨てるべき「ちり」と見えなくて、それに踊らされて仕舞ふ。つまり、「浮き立ちやすい」のが私達凡夫の人情ではないでせうか。私達、世の人の「心のちりを」「どうぞ静めて」と明治天皇は神に祈ってをられるやうに伺へます。

一行目から入ります。

[The minds of men are apt to stir] [The minds of men]=「世の人の心」の意。[be apt to]=[having a habitual tendency : likely]=「習慣的性向がある: ~しさうな」の意。[stir]=[arouse, excite]=「呼び起こす、引き起こす、(ある感情が)起こる」の意。例えば、「群衆の間に不満が起こった。」を英語に直すと[Discontent stirred among the crowd.]となります。また、ヒトラーのアジ演説で聴衆の心が動かされると[Interest stirred within the audience.]=「聴衆の間に興味がわき始めた。」となります。

一行目の訳は「世の人の心は沸き立つ習性がある」となります。

二行目に進みます。

[With every windy gust ;] [With]=[because of ,through]=「…の理由(原因)で」の意。[every]=「~の度に」の意。[windy]=[exposed to wind]=「風」の形容詞形。[gust]=[a sudden brief rush of wind]=「突然短くさっと吹く風」の意。意味を一つ一つとっても解釈できません。そこで音韻論から見てみる必要があります。二行目と四行目は[Iambic Trimeter](弱強の三音節)を取り、バラード調になるやうに工夫が成されてゐます。拗って散文的には[With every gust of wind]と書き直して解釈すべきでせう。

二行目の訳は「風が一陣吹く度に」となります。[windy gust]は隠喩(metaphor)となってをります。何が暗示されてゐるか念頭に置いて、読み進む必要があります。

三行目に進みます。

[How shall I clear the murky air] [How shall I clear…?]と明治天皇は「どうして私は…したらよいのでせうか」と「問ひ」を發してをられます。

[clear]=[to make clear]=「~を明らかにする」の意。[murky]=[marked by darkness or gloom]=「暗黒又は薄暗がりの特徴」の意。[the air]=[the sky]=「空」の意。

三行目の訳は「私はどうして薄暗がりの空を晴らしたらよいのでせうか」となります。「空(air)」はどこにありますか。二つ考へられます。

①世人の心の中

②明治天皇ご自身の御心の中

③或は②と①は別々の物ではなくて②の中に①が包含されてゐるとも考へられます。

さて、明治天皇は深刻な問題のその答へが見つからなくて、神前にお立ちなされてゐる、そして「からりと空が晴れるやうに」何卒「国民のこころの塵を静めたい」と御祈願されてゐるのであると、私はイメージしてゐます。

四行目に進みます。

[From blinding, maddening dust ?]

高校の英文法では

[clear +場所 +of +邪魔な人・物]

[clear+邪魔な人・物 +from+場所]

の例で学ばれたと思ひます。日本語の「そんなことはきっぱり忘れなさい。」に対して[Clear your mind of such notions.]=[Clear such notions from your mind.]と云ふ例があります。だが、ここではこの用例は当て嵌まらないやうです。なぜなら[blinding, maddening dust]は「場所」ではなく言ふならば「邪魔な物」であるからです。『前置詞用法詳解』斎藤秀三郎原著・松田福松訳編を見てみませう。「分離 (Separation) は、“from” で表わすが、時として、“of” を使うことも有る。」(125頁) 昭和38年第29版 吾妻書房

分離 (Separation) の“from” は「時として、“of” を使うことも有る」。主流として「“from” で表わす」と言ふこの説に従ひませう。[blind]=[to make blind]=「盲目にする」、[madden]=「激情に走らせる。おもむかせる」の意。[dust]=[fine dry powdery particles, something worthless]=「細かい、乾いた粉末状の微粒子 (塵)、価値のない物」の意より「騒ぎ、紛議、粉擾^{ふんげう}」となります。

四行目の訳は「答へが見いだせず、狂ったやうな心から」となります。

御製の「浮き立つ」と云ふ表現には民心の動向——明治後期の文化と思想状況——が表されてゐるでせう。日露戦争後には戦中の反動として国民の間に虚脱状態や享楽的風潮が見られたと云はれます。ロシアでは1905年 (明治38年) 血の日曜日事件以後、各地で革命運動がたかまり、ご存知の通り1917年 (大正6年) にはロシア革命が勃発し、その結果帝政ロシアが打倒されました。日本にもその思想運動は流入して多方面に影響を及ぼしてゐました。例へば、社会主義思想の流行に目が眩み[blinding]になった層があつたでせう。[fanatic] (ファナティック) な政治運動に入り込んで、国民の心が二つに割れて争ひとなる。畢竟当事者達は[maddening] (クレージー) になって血が流される。明治天皇は大変御心を痛めてをられたに違ひありません。但し、明治天皇は社会主義思想が拒絶されるべきだとか国家主義的思想が良いなどとどちらか一方に立つ。そのやうなお立場ではないのです。敵味方に分かれて争う分裂した民心をこそ、ご憂慮されてゐると拝察するべきでせう。

世人の心と明治天皇ご自身の御心は「二境無く」国民が「^{いつ}」に帰する道を、神にお祈りし給ひ、ひたすら求めてをられる、そこから生まれた御製でありませう。

「心の塵を静める」ことの具現化について

『新編日本史』(原書房)の指導資料に戊申詔書が掲載されてゐます。他の指導資料に見られない画期的なこととあります。そこに「詔書の眼目は『宜しく上下心を一にし(中略)華を去り実^{じつ}に就き、荒怠相誠め自彊息まざるべし』にある。」(554頁)と指摘されてゐます。此处を読むならば「ごもつともであります」と云はざるを得ないところとありますから、「眼目」であることには間違ひないでせう。しかし実際に詔書を見てみますと、此处で終つてはゐないのです。ならば「詔書」の之に続くところは「何であるのか」「付け足し」とでも云はれるのでせうか。「抑々我が神聖なる祖宗の遺訓と、我が光輝ある国史の成跡とは、炳として日星の如し。寔に克く恪守し、淬礪の誠を輸さば、国運発展の本近く斯に在り。朕は方今の世局に処し、我が忠良なる臣民の協翼に倚藉して、維新の皇猷を恢弘し、祖宗の威徳を対揚せむことを庶幾ふ。爾臣民其れ克く朕が旨を體せよ。」(明治四十一年十月十三日)

「祖宗」とは神武天皇(御在世B. C. 七一年—B. C. 五八五年 在位 B. C. 六六〇—五八五年)のこと
であります。第百二十二代の天皇(御在世一八五二年—一九一年 在位一八六七年—一九一年)
が、第一代の肇国なされた天皇の遺訓を偲んでをられるのです。その間二千五百年ほどの隔りがあります。明
治天皇は「我が光輝ある国史の成跡とは、炳として日星の如し。」と言はれる。天業恢宏と言ふこと
であります。それは世界に例のない日本の歴史であります。徳川幕府が権力で統一して十五代約三百年
でした。比較すると高々三百年と云はざるを得ないでせう。

長者三代続かずと言はれます。福島県知事、和歌山県知事、宮崎県知事がと次々と汚職が摘発されて、
県の頂点に立った程の人物が晩節を汚してゐます。三選禁止すべきだ、いや、五選を禁止すべきだとか
言はれる。民主主義的に選挙で選出されるには、どうしても人の道を踏み外してしまふ金銭的等の誘惑
が潜んでゐるのでせう。これらの人はたかが一代で、私が当事者ではないので評論家的に言ひ得るの
ですが、身を持ち崩してゐるので。

「談合」にしても「根回し」にしても全く否定すべき事ではない日本的思ひやりが働いての智恵
が生み出したものでありませう。そこにエゴが働きすぎて犯罪行為として摘発されたのであります。
不幸な事件が起こらないやうに、公平にして公正となるべく「カイゼン」が、衆知を集めてなされねば
ならないでせう。安倍総理が云はれる「美しい国・日本」となるべく報道すれば、国民の心も美
しくなるに違ひないのですが、情報を受け取る国民に選択の余地のない程日本の醜い面ばかり
マスメディアは報道してゐるから、若者は、可哀想にも、日本の将来に夢も希望も抱けなくな
ってゐるのではないでせうか。

「道は遠くに在らず—国運発展の本近く斯に在り—」

現実政治の世界を垣間見るに付けても、寂しいかぎりであります。ところが、マスメディアには現れな
くとも、三代先を見据えてお国のために政治を、また実業を行つてゐる人は人目に付かないで黙々と
励んでをられるに違ひありません。御詔勅に在ります通りに「寔に克く恪守し、淬礪の誠を輸し」
てゐる方々の声と姿が世に見えないと憂へるだけではだめでせう。口先だけで憂へたり、嘆いたり
する人は多い。だが大御心を体認して実践してゐる人は、慎み深く陰徳を積んでをられるので
す。このやうな方々(silent majority)が、必死になって國を守り支へて来られたから今の日本
が存在するのでせう。「国運発展の本近く斯に在り。」実践してゐる人にとっては、嘆く暇はな
い。人を非難する暇はない。日本の歴史の中核を刻んできた人たちは、汚職で汚れる人を見て、
怒り心頭に發することもあつたでせう。だからといって[maddening](激情に走る)になることがあ
れども、己の尽す道を見失ふことはなかつたでせう。日々実践してゐるが故に道は遠くに
あるのではなく「炳として日星の如し。」であります。日々実践してをられる明治天皇は、二
千五百有余年を隔てても「神聖なる祖宗の遺訓」とは、「近く斯に在り」と言はれてゐるこの
ことを見逃しては成りません。この御詔勅の眼目はここに在るから、国民への揺るがぬ信
頼感も強く抱かれ「我が忠良なる臣民の協翼に倚藉して、維新の皇猷を恢弘し、祖宗の威
徳を対揚せむことを庶幾ふ。」と明治陛下は仰せられてゐるのではないでせうか。私はここ
にこの御詔勅の眼目は在ると思ひますが、皆様は如何思はれますか。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『明治天皇御集 卷下』
- 『前置詞用法詳解』斎藤秀三郎原著・松田福松訳編
- 『本ついのち』不二歌道会山口県支部発行
- 『新編日本史』(原書房 昭和六十二年 第一刷)

「ともすればあらぬ方にと」 [How prone they are to stray afar]

ともすれば
あらぬ方にと
ふみまよひ
教へがたきは
人の道なり

How prone they are to stray afar
To where the cliffs sink steep !
'Tis hard to inculcate on men
How duty's path to keep.

平成十八年十二月二十日の「産経抄」にイギリスのブレア首相が「一にも教育、二にも教育、三にも教育」と言ったと書いてあります。どのやうな場面で言ったのか分かりませんが為政者として教育の大切さを痛感しての発言であることは、伝はります。この御製は、教育を実践し成就することが如何に難しいかが大和言葉で、私達の心に染み込むやうに詠ひ上げられてゐます。

一行目から入ります。

[How prone they are to stray afar] [prone]=[having a tendency or inclination]=「傾向または性向のある」、例へば、「私達はとても怠けがちの性向がある。」を英語では[We are very prone to laziness.]と使われます。感嘆文にすると[How prone we are to laziness !]となります。[they]は三行目の[men]=「人」のことであります。[stray]=[to wander from a direct course ; err]=「道を踏み誤る」の意。[afar]=[to a great distance]=「遠くへ」の意。

一行目の訳は「人は何と遠くへ道を踏み誤る性向があるものか」となります。

二行目に進みます。

[To where the cliffs sink steep !] どこまで道を踏み迷ふのか場所が示されます。

二行目の訳は「切り立つ断崖絶壁が急に現れる(が険しくそそり立つ)」となります。

【頭韻(alliteration)について】

御製の上の句「ともすれば あらぬ方にと ふみまよふ」は、あるがままの人間の習性について詠まれてゐるところです。その内実を英語に表現するために[s音]による頭韻を配置することで効果が高められてゐます。

[stray afar](思ひも寄らない所へ迷ひ込む)

誰が迷ひ込んだのでせうか?三者三様の取り方があると思はれます。

①自分とは何の関係がない他人ですか? これでは、頭で理解しただけで詩を鑑賞したことにはなりません。それとも

②愚か者の自分自身である。心が働いて来てゐます。詩は作者との共感の世界に迫らねば成りません。

③自分の教育力が足りなくて最愛の子供が迷ひ込んでしまった。何とかして救い出したい、居ても立ってもゐられない、と言った慈悲心が働いてゐる。③のやうなお気持ちでをられると齋藤氏は御製から感じたに違ひありません。何故ならば、[the cliffs are](断崖絶壁が在る)と言ふのではなくて[the cliffs sink](行き止まりの断崖絶壁がそそり立つ)、と言ってをります。しかも[steep](険しい)と翻訳してゐます。アルプスを眺めてナポレオンは[steep]と感じたでせう。源義経が一ノ谷の合戦で一見したところ超えがたい[steep]な谷と思ったに違ひあ

りません。そこを[impossible to climb over](越えることが不可能だ)と迂回してみたならば歴史は違った展開をしたでせう。

三行目に進みます。

['Tis hard to inculcate on men] ['Tis]は[It is]の縮約(Contraction)であります。「詩行内に規定外の 余剰音節がある場合、格調を引き締めるために、それを省き一音節にする」(『英詩韻律法概説』篠崎書林 P.69) [hard]=[difficult to endure, severe]=[耐えることが難しい、厳しい]の意。[inculcate]=[To endeavour (…しよう)と真剣に努めること to force (a thing) into or impress (it) on the mind of another by emphatic (信念を持って) admonition(目上の人からの穏やかな説諭), or persistent (予想以上に永続的な)repetition(繰り返すこと)] =「心に '植ゑ付ける、教へ込む」の意。

三行目の訳は「人の心に '植ゑ付けることは難しい」となります。

四行目に進みます。

[How duty' s path to keep.] [inculcate]の目的語がこの行に書いてあります。[duty' s path](人のつとめ)は「その9」「その15」に既出。[the path](道)は「その8」「その10」「その11」「その61」「その87」に既出。[how]=[by what means]=[如何にして]の意。[keep]=[To guard, defend, protect, preserve]=[約束を守る、遵奉する、進路を守る、続ける]の意。例へば、「あなたは誓ひを守らねばならない。」は[You must keep your faith with any one.]となります。「十誠を守れ。」は[Keep the ten commandments.]となります。「守る」ことが「続ける」となる例として「私達は新年をお祝ひする。」は[We keep The new Year' s Day as a festival.]となる分けであります。日本の家庭では「お盆」(the Feast of Lanterns, the Bon Festival)には[to visit the graves](お墓参り)や[a Bon Festival Dance](盆踊り)をしたりして[make offerings to the forefathers](先祖様の供養)をします。母や妻は、その準備や後かたづけで大変忙しく、「お盆祭り終わったかと思へば、あつと言ふ間に正月が来る」と言ひます。師走とは先生だけが忙しいのではなく「祭り」を裏で支へる女性の方が大忙しのやうです。仕来りを守り続ける[keep]には、伝統文化に対する謙虚さとそれを守り続ける精神力が不可欠でせう。

時代が進むのはよい。だが國に於いても家庭に於いても道徳が後追ひの状態、保守すべき物が見捨てられてゐる。その回復がないならば教育の再生は、本物の力を生み出さないのではないでせうか。道に迷つてゐると気づいたら、どのやうな態度を取るべきか、昔から言はれてゐることは、「原点に戻れ!」であります。明治天皇は神武天皇の國家創業の精神に帰ることを成されてをられました。

さて、皆様は何処に戻りますか? そして具体的に何をどのやうに保守したら良いと思はれますか?

四行目の訳は「人として守るべき道を如何にして踏み続けるかを」となるでせう。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○「産経抄」平成十八年十二月二十日

○「OXFORD ENGLISH DICTIONARY VOLUME V」

○『英詩韻律法概説』篠崎書林 P.69

平成十八年十二月二十三日(土)今上陛下七十三歳のお誕生日に

「よもの海 みなはらからと」 [O universal brotherhood !]

正述心緒(明治三十七年)

よもの海

みなはらからと

思ふ世に

など波風の

たちさわぐらむ

O universal brotherhood !

Where art thou fled and gone ?

Why rage the sea and tempest where

The sun but lately shone?

参考のため『明治天皇御集 巻中』を少し長くなりますが引用します。「正述心緒(心の緒を正しく述べる)は、思ふことをありのままに詠みいづる義にして、万葉集に見ゆる語なり。四海兄弟と思し召すに、何とて波風の立ち騒ぎて、平和ならぬことはいで来るぞとなり大御心に世界の平和を希ひ給へるに、他国より道に違へることども出で来て、国際間に事あるを嘆かせ給へり。戦時中にしてこの御製あり。まことに尊び奉るべし この年十二月、東京帝国大学講師アーサー・ロイド氏、この御製数編を英訳してインビリアルソングスと題して印行し、それを世界各国の主催者におくりたるに米国大統領ルーズヴェルト氏拝読して、いたく心を動かしきといひ伝ふ。」「インビリアルソングス」とは[Imperial songs] [Imperial]は[emperor]の形容詞で=「天皇の、尊厳なる」の意ですから「御製」の英訳です。

一行目から入ります。

[O universal brotherhood !] [O]は(ou)と読み=「呼びかけ」.[universal]=[universe]の形容詞であり=[all created things including the earth and heavenly bodies viewed as making up one system]=「一つの体系をなしてみると考へられてゐる、地球と天体を含むすべての創造されたもの、宇宙」此処では神の目から見た「世界の」の意でせう。[brotherhood]=[the state of being a brother]=「兄弟であること」。斎藤氏の『英和中辞典』には[universal brotherhood]=「四海兄弟」とあります。

一行目の訳は「おお 四海兄弟と言ふに!」となります。

二行目に進みます。

[Where art thou fled and gone ?] [art]=[are]の古形。[thou]=[you]の古形で「汝」の意。[fled]=[flee]の過去分詞=「逃げる」の意。[gone]=[go]の過去分詞で=「去る」の意。[art + fled, gone]は受動態ではなく完了の状態と考へられます。現代語で二通りに書き換へてみませう。

①[Where have you fled and gone ?](あなたはどこへ逃げ去ってしまったのですか。)この文は、完了形で「逃げ去った」ことに気づいたばかりです。

②[Where are you fled and gone ?](あなたはどこへ逃げ去ってゐるのですか)「逃げ去ったあなたを」探し求めてゐる「完了の状態」であり時間の経過が込められてゐます。

[thou](汝)とは、ロシア皇帝のことでありませうか。日本は何処までも外交で解決しようと交渉に全霊を注いで来たのであります。日本側から見て、[thou](汝)の真心は「どこへ逃げ去ってゐるのですか?」日露の間に真心の架け橋を架けたいと言ふのが明治天皇の御志であります。

明治三十六年一月の歌御会始めの御製は御題「新年海」でありました。

「波風の」立たない「静かなる世」とは平和な世界でせう。戦争のない平和な世界を願はれてゐるのが、静謐の底から神意のごとく伝はって来る御製であります。

「平和を祈念される皇室の伝統」

日露の対立を、日本側は外交努力によって解決しようとするが、それも叶はず、戦端を開くにやむを得ざる悲痛極まりなき状況。それは、如何ともしがたい祖国日本に突きつけられた試練なのであります。

今次の大戦に於いても同じやうな状況がありました。昭和天皇は、昭和十六年九月五日の御前会議の席上で「成ルベク平和的ニ外交ヲヤレ 外交ト戦争準備ハ平行セシメズ外交ヲ先行セシメヨ」(『杉山メモ』上三百十頁)と言はれ、日米の開戦へと傾斜しがちな軍部首脳に対して、外交による平和的に問題を解決すべきであるところを強調されてゐました。「杉山メモ」とは杉山陸軍参謀総長が遺したメモであります。昭和十六年九月六日には対米・英・蘭(オランダ)に向けての「帝国国策遂行要領」が正式に決まった御前会議の席上、昭和天皇が、上の明治天皇御製を懐中から取り出して声高らかにお詠みなされたのであります。皆様はご存知でせうか。

山岡荘八は、小説『太平洋戦争』を戦後十数年をかけ、心血を注ぎ込み書き上げてゐました。その一節に詳しく述べてありますから読んでみませう。

出席者は原枢密院議長、近衛総理大臣、東条陸軍大臣、及川海軍大臣、杉山陸軍参謀総長、永野海軍軍令部総長、武藤陸軍、岡海軍の両軍務局長であつた。

さすがに、誰の頬にも今日は重苦しい緊張がみなぎっている。

(日・米和すべきか戦うべきか……?)

と云つても、すでに相手には全く握手する気はないのだから、これほど悲しい会議はあるまい。

が、当時は誰もまだそれを知らなかつたのだ。知らぬということは、ある意味では時代を揺さぶり、歴史を変える不思議な救いでもあり、破滅の使者でもあると云える……

陛下が出席されると、今日は、原議長が、陛下の代わりに、陛下と同じ質問の形で強い非難をこめて門を開いた。

「この案を見ますと、外交よりもむしろ戦争に重点がおかれているかの感がありますが、これについて、政府および、統帥部の趣旨を明瞭にうけたまわりたい」

及川海相が起立して、昨日、近衛が陛下の前で述べたと同じことを述べて着席した。

次には当然統帥部を代表して杉山参謀総長が起つべき番であつた。しかし杉山も起たなければ永野も起たなかつた。

政府代表が海相だったので、また海軍の永野が立つのはおかしい。今度は杉山が起つべきなのだが、彼は、昨日陛下の前でたしなめられているので、それで済んだつもりか、それとも気遅れして起ちかねたのかも知れない。

気づまりな沈黙がしばらく続いた。

と、突然席を立てて発言されたのは陛下ご自身であつた。

このようなことは従前全く例のないことだつた。

「ただいまの原枢相の質問はまことにもっともと思う。しかるに、これに対して統帥部から何ら答えのないのはなほだ遺憾ではないか」

一同は、全身を硬直させて息を詰めた。

天皇のご発言も異例だつたが、実は統帥部にも政府にも、全くどうしてよいのかわからぬまま、要綱議案に突き上げられてついて来ているといった、これまた誠に異例な状態だつたのだ。

おそらく誰ひとりとして戦争をよしとする者はこの場にもくといになかつたに違いない。しかし、戦争をしないで済むように外交交渉の手があるかとなつたらまるきりその用途はつけようがなかつたのだ。(「十二月八日前後」126頁～128頁)

私達は軍部の暴走を止めることが出来なかったから、戦争になってしまった、と意識の中に叩き込まれてみますが、「日本の軍部の暴走のみで戦争が起こった」事ほど単純な問題では無かった。『ウェデマイア回想録』や『チャーチル回顧録』で明らかなやうに「如何にして日本に先制攻撃をさせるやうに追い込むかが彼らの戦略であったのでありますから、先が見えなかったことが伺へる所です。この下りを読むと統帥部が返答に窮したのも無理はないと思へるし、何故堂々と起って答へないのか、と言ふ疑問も湧いて来るでせう。実は、杉山参謀総長は六日の御前会議の前日に陛下に呼ばれ、「戦争準備に強い懸念を示され色々質問をされてゐた。」のであります。特に「対米戦争は三ヶ月くらいで片付ける」と云ふ杉山参謀総長に対しては「シナ事變のときも一ヶ月くらいで片付けると云ひながら四年経っても片づいて居ない」と、その楽観的な見通しを厳しく批判されてゐたのであります。

『失はれし政治——近衛文麿公の手記』には次のやうに書いてあります。「シナは奥地が開けて居り予定通り作戦し得ざりし事情をくどくどと弁明申し上げた処、陛下は励声一番、総長に対せられ『シナの奥地が広いと言ふなら、太平洋はなほ広いではないか。如何なる確信あつて三ヶ月と申すか。』と仰せられ、総長は唯頭ただこうべを垂れて答ふるを得ず」（『天皇語録』140頁参照）

山岡荘八の「十二月八日前後」に戻りませう。

ここではっきりしていることは、アメリカの云うままに、仏印はもちろんシナからも満州からもそっくり兵も居留民も引き上げさせたら、あるいは戦わずに済むかもしれないということだった。しかしもしもそれをなしたら大日本帝国はこんどは内部から音をたてて崩壊するに違いない。

シナ本土で蒋介石と合作しながら、しきりに赤化の手を伸ばしている共産党軍の中には、もう日本の捕虜を洗脳して、そうした場合の尖兵たらしめようとする訓練が着々と実施され始めているのだ……(128頁)

天皇ご自身の発言があつても、胸に勝算のない統帥部は、まだ席を起つて発言しようとしなかった。

昨日と同じやうに三ヶ月で……などと云う答えは通用しないとわかっているからであった。

再び突然に……陛下は胸ポケットから一枚の紙片をとり出されて、昂たかぶつた声でそれを読みあげられた。

「——四方の海、みなはらからと思ふ世に、など波風の立ちさわぐらむ」

それは明治大帝の御製であった。陛下はそれご自分で認められて席に臨まれたのだ。

四方の海はらからみな同胞と思ふ世に

など波風の立ちさわぐらむ

それは数千年にわたつて邪よこしままな心のけがれを払い、大宇宙の心を心として生きようとひたすらそれに努めて来た天皇の、敵も味方もない、同時に血と力の世界に住まう人間には、ちょっと理解のしようもない良心の声であった。(130頁)

「アメリカの云うままに、仏印はもちろんシナからも満州からもそっくり兵も居留民も引き上げさせたら、あるいは戦わずに済むかもしれない」このもしもに対して、戦後の高見から歴史を裁き「平和のためには引き上げるべきであった」と安易に云ふことが出来るでせうか。現代の日本に於て考へるならば「一切の世界に進出してゐる企業を早晩に引き上げて仕舞へ」と云ふに等しいことであります。一億二千万の国民が現在の生活レベルを維持できなくなり「大日本帝国」同様に「日本国」は「こんどは内部から音をたてて崩壊するに違いない。」と云へるでせう。

山岡荘八氏の『太平洋戦争』の「十二月八日前後」を更に読み続けたいところではありますが、紙数の関係上ここで割愛します。一度全体を読んで戴きたい良書であります。

三行目に進みます。

[Why rage the sea and tempest where] [rage]=[to continue out of control]=[制御できない状況が続く]の意。[tempest]=[a violent wind often accompanied by rain, hail or snow]=[しばしば雨、あられ、または雪を伴った強い風、暴風雨]の意。[the sea and tempest] は[bread and butter](バター付きのパン)や

[brandy and water](水を割った火酒)の用法と同じで「暴風雨を伴った海」の意です。この行を、散文的に平易に書き直しますと[Why does the sea and tempest rage where?]となります。

三行目の訳は「そこは何故、暴風雨となった海は吹きすさぶのか」となります。

四行目に進みます。

[The sun but lately shone?] [but]は接続詞の「しかし」の意ではなく副詞で=[only, merely]=「ただの、ほんの」の意です。[lately]=[recently]=「近頃」の意。[shone]=[shine(光を放つ)]の過去形。

四行目の訳は「太陽はほんの近頃まで照ってゐたのに」となります。

「よもの海みなはらから」「よもの海」とは太平洋、大西洋、インド洋、北極・南極海のことでせう。それらは一つの海として繋がってゐるやうに「世界に住む人は皆兄弟として太陽の下に生かされてゐる!」と言ふ御心懐が伺へます。明治天皇はそれをどこまでも貫いて行かうとなされて来たのであります。しかしながら、[Where... gone?](どこへ行ってしまったのか?) [Why...rage](何故海は荒れ狂ふのか?) [W音]の頭韻(Alliteration)が [where The sun but lately shone?]重ねられ、悲痛な響きが奏でられます。御製に見合った素晴らしい英詩となつてゐます。

最後に二度、日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

山岡莊八『太平洋戦争』講談社文庫

○『天皇語録』

○『失はれし政治——近衛文麿公の手記』

○『杉山メモ』上

○W・チャーチル『第二次大戦回顧録』

CHAPTER IV PEARL HARBOUR!

[At the Mansion House luncheon on November 11 I had said that if Japan attacked the United States a British declaration of war would follow “within the hour”.](11月11日の約束で、もし日本が米
国を攻撃したら、英国は即時宣戦布告を行ふ約束がなされてゐた)

[It was Sunday evening, December 7, 1941. In two or three minutes Mr. Roosevelt came through. “Mr. President, what’s this about Japan?”](チャーチルはルーズベルトに「日本が攻撃したことについて」電話で
尋ねます)

[“It’s quite true,” he replied. “They have attacked us at Pearl Harvour. We are all in the same boat now.”](ルーズベルトは「全く真実だ。日本軍はパール・ハーバーの我が軍を攻撃した。今や米英は皆同じ舟に
乗ってゐる。」と答へました。

チャーチルの回顧録を丁寧に読めば、如何に首を長くして日本が先に戦争を仕掛けてくるか待ってゐたの
かが要所所々で伺へます。[They did not wail or lament that their country was at war. (アメリカは自国が
戦争になったことを嘆いたり悲しんだり)] [They wasted no words in reproach or sorrow. (彼らは非難したり
悲しむのに言葉を弄することがなかった)] [In fact, one might almost have thought they had been deliv-
ered from a long pain. (事実、米国民は長い苦痛から解放されたと言っても差し支へないでせう) 真珠湾攻撃
を日本がしてくれたので米国民の心が苦痛から解放された「真珠湾を攻撃してくれて有難う!」と言ふのです
から、流布してゐる通説と全く逆のことが記されてゐます。

「あだし野にいざかがやかせ」 [Now scatter o'er the battlefield]

あだし野に
いざかがやかせ
ますらをが
とぎすましたる
太刀の光を

Now scatter o'er the battlefield,
Ye heroes of my guard,
The lightning flashes of blades
That ye have burnish'd hard!

今回の御製は、私が持ってをります数種類の『御製集』には掲載されていません。『明治天皇の御聖徳』120頁にこの御製の引用がありますが年月は記してありません。想像の域を出ませんが、戦場に立つ兵士の心構へを詠まれた明治三十七年頃の御製ではないかと思はれます。

コロンビア大学の名誉教授で「日本文学、日本文化の研究とその海外への紹介に対して勲二等旭日重光章を受賞した」ドナルド・キーンは、新潮社から『明治天皇』上・下巻を平成十三年(2001年)に出版してをりました。その下巻には「第五十三章 暴君ニコライ二世」があります。その中で明治天皇がどのやうなお気持ちで大戦時を過ごされてゐたのか端的に記されてゐます。心が引かれる箇所でもありますから一緒に読んで見ませう。

「これら高まる緊張の数ヶ月間、天皇は戦争の可能性に心を奪われていた。この時期に詠まれた御製は、天皇の危惧を示している。

民のため心のやすむ時ぞなき
身は九重の内にありても

天皇は恐らく家族のことを考える時間など、ほとんど無かったに違いない。」(『明治天皇』の下巻349頁)襲ひかかってきた野鳥からひな鳥を守る親鳥のやうに国民のことを思はれて「心のやすむ時」が、明治天皇には「ぞなき」ですから「全く無かった」のでありませう。一方、当時世界最強の列強ロシアの皇帝のニコライ二世はどうであったのでせうか。ヨーロッパの皇帝達は、近い親族関係にありました。

ドイツ皇帝ヴィルヘルムは、ヴィクトリア女帝の孫であり、ロシアのニコライ皇帝の妻アレクサンドラもまた、女王の孫でありました。「ニコライは、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の影響下にあった。これ以上悪い影響は、ちょっと考えられない。」(同353頁)どのやうな悪い影響を与へたと言ふのでせうか。ドイツ皇帝は彼自身を「大西洋提督」、ニコライを「太平洋提督」に見立ててゐました。ニコライへの数多い書簡で彼は「常にニコライの野望を扇動して止まなかった」のださうです。ドナルド・キーンは「これら二人の皇帝が何百万という臣下の生命を握っている絶対権力者であることを思うと、ぞっとする。間近に迫る戦争に関与することになる三人目の皇帝である明治天皇は、唯一その肩書きにふさわしい人物だった。」日本の文化や歴史の研究家として客観的にを旨として『明治天皇』上巻は書かれてゐるやうに見受けられます。だが、やがて下巻に入り日露戦争の段となりますとスタンスが違ってゐます。「これら二人の皇帝が何百万という臣下の生命を握っている絶対権力者であることを思うと、ぞっとする。」と言つてゐるではありませんか。自分の心情を正直に吐露してゐるのが感じられます。

さてドナルド・キーンが言ふ「暴君ニコライ二世」の率ゐるロシアとの戦端が開かれたのであります。勝敗が決した後世に生きる私達にとっては、冷やかな気持ちで歴史的な知識を量的に如何に蓄へても、その姿勢では、戦火のその時代を生きた父祖達と私達の間心の橋は架からないでせう。もし、「日本が負けてゐた

ら)・・・「ぞっとする。」こんな気持ちになって歴史に迫ったのがドナルド・キーンなのです。

「暴君ニコライ二世」の支配下で抜け出せないで喘いでゐる。それは日本だけではない。東アジアの国々だけではない。「暴君ニコライ二世」が現実的に「太平洋提督」となれば、必ず太平洋を挟んでアメリカとの直接対決する事態は迫ってくる。「あたかも無防備の自分の庭に完全武装したロシアの兵士が、侵入して自分の喉元にピストルを突きつけた。そのやうな二十世紀を現実に生きてゐると考へるならばドナルド・キーン同様に「ぞっとする。」のではないでせうか。日本の敗北は他人事ではなかったのでせう。

一行目から入ります。

[Now scatter o'er the battlefield,] [Now]=[as to express command or introduce an important point]=「(命令したり重要な点を導入したりするときなどに)さあ、いざや」の意。[scatter]=[throw ,cast here and there]=「あちこちへ投げる」の意で、「(疑惑などを)晴らす、(敵を)追い散らす」などに使われますが「(敵を)殺す」=[kill]の意味はありません。「土に種を蒔け。」は[Scatter seed on the soil.]と英語に直されます。[o'er]=[over]の短縮形で「その62」に既出。[the battlefield]=[a place where a battle is fought]=「戦場」の意。

一行目の訳は「いざや、戦場に撒き散らせ」となります。

二行目に入ります。

[Ye heroes of my guard,] [Ye]=[Youの複数形]=「(詩文)汝ら(何々)よ」と呼びかけに使われます。「その46」に既出。[heroes]=[a person who is remembered and honoured for his courageous life and deeds]=「勇敢な生涯と行為のために記憶・尊敬される人、(戦時の)勇士」の意。[guard]=[a position of defense]=「国防」の意。

二行目の訳は「我が国防の勇士達よ」となります。

三行目に進みます。

[The lightning flashes of blades] 構造的には一行目の[scatter]の目的語になってゐます。[lightning]=[the flashing of light caused by the passing of electricity from one cloud to another or between a cloud and the earth]=「一つの雲から他の雲へ、または雲と大地との間に電気が通ることによって生じる光のひらめき、いなびかり」の意。[flash]=[a sudden burst as of light]=「光などの突然のひらめき」。通常では「いなびかり」を[a flash of lightning]で表しますが、韻を踏むやうに[The lightning flashes]としてあります。[blade]=[sword]=「刀身」の意。

三行目の訳は御製の「太刀の光を」に当ります。

四行目に進みます。

[That ye have burnish'd hard !] [That]は三行目の[blades]を先行詞に取る関係代名詞であります。[burnish]=[to make shiny]=「磨く、砥ぐ」の意。[hard]=[with energy, great effort, or strain]=「元気を出して、非常な努力をして、または緊張して」の意。

四行目の訳は「汝らが磨ぎすました」となります。

「太刀の光の意味するもの」

前回の「平和と友情とを求むるころ」の歌は、三井甲之の『明治天皇御集研究』に拠れば「即ち祖国防護の精神」であり、「日本精神は平和精神である。」と云へるのであります。「平和精神」とは、[pacifist]=「平和主義者」が唱へる――非常時に於いては全く通用しない――空理・空論であつては、ならないのであります。「世に闘争・変革・戦乱あらざらしめむとする故に、この平和精神が非常時にその威力を発揮して、平和を克復しようとするのである。」(『明治天皇御集研究』二十一 戦争と平和 186頁 國文研叢書 18)

「b音」の頭韻(alliteration)が配置されてゐます。一行目に[battlefield](戦場)には祖国を防衛するために

「ますらを(heroes)」が派遣されてゐます。三行目の[blades](太刀)は、四行目の[burnished hard](砥ぎ澄ましたる)が故に、難解ではありますが、「ますらを」の[blades](太刀)こそは「平和精神」を象徴するものとなるのであります。皆様の心には消極的でなく積極的な意味を有する「平和精神」が湛へられてゐますか。最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『明治天皇御集研究』二十一 戦争と平和 186頁 國文研叢書 18
- 新潮社『明治天皇』上・下巻 平成十三年(2001年)

「うつせみの世のためすすむ」 [If in the cause of wrong' d mankind]

をりにふれたる(明治三十七年)
 うつせみの
 世のためすすむ
 軍には
 神も力を
 そへざらめやは

If in the cause of wrong'd mankind
 My avenging sword I bare,
 Why need I doubt but that the gods
 Will fight my righteous war ?

参考のため『明治天皇御集篇 巻中』を引用します。「うつせみの現し身にて世の枕詞。世の為は世界人類の為の義。「やは」は反語、添へざらむや、否必ずそへらると強いふ意。天皇に、この御信念御確信ありつればこそ、大戦役にも彼の如き戦捷は得たりしなれ。」(233頁) アジアの一小国日本が、世界最強の列国ロシアに対して、国家の存亡を賭けて立ち上がったのは、大義(cause)が我が方にあったからであります。ロシア帝国は、軍事的侵略の魔の手を伸ばし朝鮮半島にまで及んできておりました。此処で立ち上がらないで座視してゐたならば、どのやうな状況が生まれて来るのか、私達の父祖達は、少なくとも二点に渡る共通の理解を有したやうです。①ここで、ロシアの勢ひに留めをさして置かないならば子々孫々がロシアの支配下に置かれる。②日本民族の自主独立権が奪はれるだけでなく、近い将来、世界人類の人権が奪はれる。

それ故に平和愛好の日本民族もイザとなれば太刀を手に立ち上がるのであります。詰まり、我が方日本に大義(cause)ありとの共通理解が銃後の国民にまで行き渡つてゐたからでせう。明治の父祖達は、国際法に則り正義の軍をすること全き全世界の人々よ「ご覧あれ!」の気概を有して戦つたのであります。米国ハワイから来てみます日系四世のA. L. T. (英語助手)に日露戦争について尋ねますと全く知りません。「どちらが勝つたのですか?」と尋ねるから「君の曾々おじいさん達が勝つたのだよ。」と答へますと「始めて知りました。」「嬉しいです。」とにっこり笑ふ、そんな時代ではあります。丁寧に読んで行きませう。

一行目から入ります。

[If in the cause of wrong' d mankind] [If]=[in the event that]=[「・・・と言ふ場合に」]の意。[cause]=[「大義」]、[in the cause of]=[「・・・の為に」]の意。[wrong]=[to do wrong to]=[「不正なことをする、(人の)権利を害する」]の受身形で[wronged]となり=[「権利を害された」]の意。[mankind]は①[mankind]前にアクセントが来て=[「男性」、②[mankind]後ろにアクセントが来て=[「人類」、ここは②の「人類」]の意。

一行目の訳は「もし権利を害された人類のために」となります。

二行目に進みます。

[My avenging sword I bare.] [avenge]=[to take vengeance for]=[「の仇を打つ」]。[revenge][avenge]の相違をハッキリさせて置きます。自分自身の仇を討つ事を[revenge]と云ひまして、古代ユダヤに語源を発する[avenge]は「親などの仇を討つ」意となり公的に許される復讐となります。[bare]=[uncover]=[「(さやを) 払ふ、剣を抜く」]の意。この行は、語順が転倒されてゐますから散文的になりますが、書き換へますと[My avenging sword]となります。

二行目の訳は「仇なす敵を討つ剣を私が抜く場合に」となります。誰の剣を抜くのでせうか。[My avenging sword]には[my]が付いてゐますから天皇である「私の剣」であります。

「日露開戦に到る最終的経緯」

明治三十七年(1904)一月三十日 総理大臣官邸で開かれた会議の席上、伊藤は一案を草し、日本にとって決断の時が来たことを説いた。それに対する出席してゐた元老、閣僚は一致して伊藤の意見を支持した。

二月一日 天皇に謁見して参謀総長の大山巖は「日本から先に戦端を開くべきである」との意見を上奏した。

二月三日 ①天皇に謁見して内閣総理大臣桂太郎と外務大臣小村寿太郎は「ロシアとの戦争が今や不可避である」事情を仔細に奏上した。②同時に「元老、閣僚を翌日の四日に召集し、御前会議の場で天皇が裁断を下すこと」を奏請した。

二月四日 ロシアとの国交断絶が御前会議で裁可された。

二月五日 露国との国交を断絶す。「露国に対する最後通牒既に発せられ、開戦の期

將に至らんとす、仍りて是の日夕刻天皇、陸海軍に勅語を給ふ、其の文に曰く、

朕は東洋の平和を以て朕が衷心の欣幸とする所なるが故に清韓の両国に関する時局の問題に付き朕が政府をして昨年来露国と交渉せしめり然るに露国政府は東洋の平和を顧念するの誠意なきことを確認せしむるの止むを得ざるに達したり蓋し清韓両国領土の保全は我日本の独立自衛と密接の関係を有す茲に於て朕は朕が政府に命じて露国と交渉を断ち我独立自衛の為に自由の行動を執らしむることに決定せり(以下略)』『明治天皇紀 第十巻 』(604頁)

「私の剣」を抜くに到る天皇の御苦悩がどれほどのものであるのか私達は迫って行く必要があるでせう。Donald Keeneは日露の戦力について次のやうに書いてゐます。「陸軍は、日本が戦争に勝つ見込みは五分五分と踏んでいた。海軍は勢力の半分を失うことを覚悟したが、残る半分が敵を壊滅すると信じた。」([Okamoto "The Japanese Oligarchy(寡頭制少数政治) and the Russo-Japanese War"]の100頁～101頁を参照)。日本が戦争で勝つ見通しは、悲観的に成らざるを得ないものでありますが意思決定者である元老と閣僚は全員で開戦を支持したのであります。明治天皇は大日本帝国憲法に則り「政府に命じて露国と交渉を断ち我独立自衛の為に自由の行動を執らしむることに決定」せざるを得ないのであります。天皇は、今や、最終決定をするには誰にも相談することが出来ないであります。もしや、破れることにでもなれば・・・最終責任は・・・誰が取るのか?皇祖の神にしか問ひかけることは出来なかつたに違ひありません。聖徳太子の時代より「和を以て貴しと成す」の国是があります。臣下が国民を代表して奏請した結論を覆すことは國に反乱を起こすこととなります。苦渋のご決断を、明治天皇が如何になされたかが、痛いほど分ります。分れば分るほど自国の歴史への愛着が湧いて来るものでありませんか。小林秀雄は「歴史と文学」の中で次のやうに云つてゐたことが思ひ出されます。

「歴史に対する健全な興味が喚起できなければ、歴史に関する情操の陶冶といふ事も空言でせう。歴史に関する情操が陶冶されぬところに、国体観念などといふものを吹き込み様がありますまい。国体観念といふものは、かくかくのものと聞いて、成る程さういふものと合点する様な観念ではない。僕等の自国の歴史への愛情の裡にだけ生きてゐる観念です。他では死ぬばかりです。」(『歴史と文学』昭和16年9月初版 創元社 9頁) 国柄のすばらしさとは観念ではない、況しては、スローガンであつてもならない。「僕等の自国の歴史への愛情の裡にだけ生きてゐる」ものであると心得るべきでせう。

三行目に進みます。

[Why need I doubt but ... ?]は修辞疑問文であります。例へば「私は彼が成功するのを疑ふ必要はない。(I need not doubt that he will succeed.)」を修辞疑問文で書き換へますと[Why need I doubt that he will succeed ?]＝「私は彼が成功するのを疑ふ必要があらうか、否ない。」となります。[doubt]と[that]の間に[but]が入つてゐますが打ち消しに続いて[but that]と置かれるのは仏語より出づる習慣で「いささかも、これっぽっちも～ない」。[the gods]は天皇が毎朝お参りに成られる「神々」のことであり、[God]ならば固有名詞でキリスト教で云ふ「一神」であります。

三行目の訳は「私は(神々が為せるみ業を)何故疑ふ必要があらうか、いささかもありはしない」となります。

四行目に進みます。

[Will fight my righteous war ?] この行の主語は前行の[the gods]でありますから[Will]は「神の意志」と云ふこととなります。[fight]=[to take part in a fight]=「戦ひに加はる」の意。[righteous]=[acting in accordance with what is right]=「正しいことに従って行動してゐる、正義に叶へる」の意。

四行目の訳は「神々が正義に叶へる我が戦ひに加はり給ふを」となります。

[[w音]と[m音]の頭韻(alliteration)による効果]

一行目の[wrong' d mankind](人権を害された人類)のために立ち上がった日本民族の世界史に誇るべき存在が、二十世紀の初頭にありました。三行目の[Why]による修辭疑問文は勿論強い否定の意味が暗示されてゐます。四行目の[Will]は、「天佑神助」を表す神の意志であります。[wrong' d mankind]の中には戦火を交えてゐるロシア以外の人類総てと言ふこととなりますが、何れ「よもの海みなはらから」と詠まれてゐる通り「波風」が鎮まればロシアも「はらから」と云ふ御精神でられます。[My avenging sword](仇なす敵を討つ劍)と[My righteous war](正義に叶へる軍)に冠せられた[My]には訳者・斎藤氏の深い思ひ入れを感じることができません。神に通ずる至誠をもって重い責任を完うしようとされるご覚悟がこめられた[My]でありませう。上は天皇から、兵を指揮する将帥そして一兵士に至るまで「天佑神助」のもと戦かはれたから、乾坤一擲の勝利があり、今日の私達が存在するのである、としみじみと有難く味識させられる御製ではありませんか。

最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『歴史と文学』小林秀雄 昭和16年9月初版 創元社
- 『明治天皇紀 第十巻』
- 『明治天皇御製集 巻中』

「きたひたるつるぎの光」 [The lightning flashes of your swords,]

きたひたる
つるぎの光
いちじるく
世にかがやかせ
わがいくさびと

The lightning flashes of your swords,
Well steel'd in hundred wars,
Display now to the wondering world,
Ye valiant sons of Mars!

鍛へ上げられた太刀の光を「著るく」はつきり目立つやうに世界に向かって輝かせよと「わがいくさびと」に語りかけるやうにお詠じられてゐます。平和を「光」とするならば 戦争のイメージは[a moonless ,dark night]ではないでせうか。「闇夜」とは英語で、[a dark night](暗い夜)または、[a moonless night](月の出てゐない夜)と云ひます。例へば「彼は闇夜に一灯を得たる心地がした。」を英語に直しますと[He felt as if he found a light on a dark night.]となるでせう。「闇夜」に「つるぎの光」を「著るく」世界に向かって「かがやかす」ことにより、云ふは安く成就するは難い業である平和の世界が招来するのでありませう。心を込めて味はひたいと思ひます。

一行目から入ります。

[The lightning flashes of your swords,] [The lightning flashes]は「その93」に既出してをりまして「(とぎすましたる)太刀の光」の意。[your swords]=「汝の太刀」の意。

一行目の訳は「汝の太刀の光よ」となります。

二行目に進みます。

[Well steel'd in hundred wars,] [Well]=[fully]=[十分に]の意。[steel]=[to overlay or edge with steel]=[鋼鉄をかぶせる、または鋼鉄で刃をつける]の意。[steeled]は[swords]を修飾してゐますから「鍛練された刀」の意となるでせう。[hundred]=[a very large number]=[非常に大きな数]。[war]=[a struggle between opposing forces]=[相対する力と力との争ひ、戦闘]の意。[in hundred wars]は「指折り数へられないほど何度も 参加した戦闘で」の意となるでせう。[swords](太刀)は人を切れば刃が零れて仕舞ふものですが、戦闘で鍛へられ血糊で汚れることもなく却って[your swords]は「ひかり」「かがやく」と云ってをられます。

戦争→戦闘→平和への過程に於て武力が相拮抗する五分五分の戦ひであるならば、僅かな精神力の差が物を言ってくるのではないでせうか。隠喩 (metaphor)としての「つるぎの光」が「かがやく」とは、日露戦争を勝利に導く核心を突く何とも味は深い表現であると思はれませんか。

三行目に進みます。

[Display now to the wondering world,] [display]=[示す、現わす]の意。他動詞であり目的語に当る章句は、一、二行目に置いてあります。[wonder]=[([that it should be so](斯くあらんとは)驚く)の意。「黄色人種の日本人に勝てる筈がない。」が当時の世界の見てゐたところだったのです。[wondering]を良く味はつて下さい。

三行目の訳は「斯くあらんとはと驚く世界の人々に示せ」となります。

四行目に進みます。

[Ye valiant sons of Mars !] [Ye]=「汝ら」は「その46」「その93」に既出。[valiant]=[boldly brave, heroic]=「勇猛なる、英雄的な」の意。[sons]=[of some ancestors, country, etc]=「子孫、後裔」の意。[[Mars]は二つの意味があり=①「(ローマ神話の)軍神」②火星であります。これの形容詞形は[martial]=[of war]=「戦争の」であり「軍歌」は[martial song]であり、「戒厳令」は[martial law]であります。「士気」は英語で[martial spirit]と云ひますから、ここでは①の「軍神」の意味で使用されてゐるでせう。

四行目は「汝ら^{いくさ}軍の神の勇猛なる後裔よ!」となります。

「日露戦争に学ばなかった昭和の私達」

西洋人に分るやうに[Mars(軍神)]が使用されてゐます。その後裔とは私達の曾祖父方たちのことでせう。明治三十七年に始まった日露戦争も年を越え、北満州の冬は極寒零下と云はれます。暖かい部屋で温々と安全な生活をしてゐる私達には想像も付かない厳しい風土でありました。素手で赤く焼けた鉄板を触れば火傷をしますが逆に零下二十度の鉄板を触れば凍傷を負ひ大変なことになります。

明治天皇が、手あぶりの火鉢も遠ざけられて北満州で戦ふ兵士達と出来るだけ同じ条件にご自分を置かうとされたのもこの冬のことでした。「人言を容る」と言ふことをよく成されるお方でありましたが、この事に関してはお聞きになられなかつたさうです。

ロシア兵は豪華な毛皮の外套を着てゐて、我が曾祖父達は貧しく寒い「肋骨服」しか着てゐなかつたことが旅順の「陳列館」で見られるさうです。ロシアが築いた旅順要塞は日清戦争後、約八年かけて「一万五千ルーブル、セメント二十万樽を費やして造った」と言はれてゐます。そこを勝ち取るために乃木大将率ゐる第三軍でした。

福田恒存の「乃木將軍と旅順攻略戦」の中から読んで見ませう。

「東鷄冠山北堡壘の殆ど完璧とも言ふべきベトンの築城を目の前にし、爾靈山の地勢に親しく接したなら、誰も絶望的な嘆息に手を拱く他はありませんまい。」と、福田氏は爾靈山の古戦場(二〇三高地の意)に立つた正直な感懐を述べてゐます。「誰も絶望的な嘆息に手を拱く他はありませんまい。」昭和の筆法鋭い批評家福田氏は「絶望的な嘆息」を上げざるを得ない感想を懐きました。まさしくその要塞に我が曾祖父達は「生け贄」として或は「犠牲者」として、しかし雄々しく怯むことなく立ち向かつたのが旅順攻略戦でした。世界史上から見まして一人一人の命は十字架に賭けられたキリストの死に匹敵する重大な意味と価値があることに気づいてゐる人は、果たして現代の日本に何人ゐるのでせうか。心許ない限りです。

福田氏は「爾靈山」の頂上に立って乃木將軍や戦士の方々を偲び次のやうに言つてゐます。「私は爾靈山の頂上に立ち西に北に半身を隠すべき凹凸すら全くない急峻を見降ろした時、その攻略の任に當つた乃木將軍の苦しい立場が何の説明も無く素直に納得でき、大仰と思はれるかも知れませんが、目頭が熱くなるのを覚えました。」(90頁)『福田恒存全集 第六巻』文藝春秋社

歴史の勉強が年代を唯覚えるためであつたり、事件の因果関係を中心に捉えようとするれば知識は増えるが、無味乾燥でありまして、何の感動も呼ばないでせう。「半身を隠すべき凹凸すら全くない急峻」とは、攻撃をする方にとっては自分の身は安全な地でありました。機関銃掃射すれば敵を一網打尽に出来るところでありませう。一方、突撃を敢行せねばならない兵士にとって地獄へ飛び込まねばならない事と同じだったのでせうか。乃木將軍にとっての命題は難攻不落の要塞を攻め落とすことなのであります。幾人も幾人も兵士は撃ち倒される。戦死する兵士の遺家族の悲しみを想へば、命令を出す方はたじろぐ気持ちに襲はれないことはなかつたでせう。だが一瞬でもそれに心が揺るび驕りが將軍の顔色に出れば兵士のモラル(morale)「士気」は維持できなかつたでせう。恐るべき精神力があつたからこそ中断することなく、遂には、勝機が生まれたのでせう。それがマックスで貫徹されなかつたならば、日本人全体が遺家族のごとくならねばならないのであります。

乃木大将の次男保典中尉も二〇三高地で戦死したことは皆様良くご存知でせう。

知識で知ることと子供を二人とも戦場でなくした大将の心が分るのとは次元が異なります。次男保典の戦

死の報を受け取った将軍はテントのランプを消されたさうです。奥の方に行き一人になられ、嗚咽されたやうです。男子は人に涙を見せては成らないと云ふ時代です。連絡に当たった将校は厳肅の感に打たれ思はず涙を流した、と伝えられてゐます。

二〇三高地を完全に日本が占領した後に将軍は「爾靈山嶮豈難攀 男子功名期克艱 鐵血覆山山形改 萬人齊仰爾靈山」を絶唱してをります。福田氏は二〇三高地に立ち「爾靈山の嶮 豈 攀じ難からんや、男子功名克艱を期す、鐵血 山を覆ひて 山形 改まる、」と言ふやうに音吐朗々詩吟をされたのではないかと思はれます。此処まで来れば「その攻略の任に當つた乃木将軍の苦しい立場が何の説明も無く素直に納得でき」るものであります。私も福田氏と同じやうに「目頭が熱くなるのを覚えました。」これは何も「大仰」なことでもない普通の人なら涙なくして先へ進めない所ではないでせうか。皆様は如何思はれますか。

「萬人齊しく仰ぐ爾靈山」乃木将軍は一万七千名に及ぶ死傷者のことが思はれてならなかったであります。——尊い命を捧げた余りにも多くの犠牲者達のことを思ふと涙が溢れ出て来て仕方がなかったでせう。溢れ出て止まない涙を拭ふこともなく男泣きをしながら——英靈の勲を仰ぎ見たのであります。少しでも将軍のその思ひに近づきたいものであります。私も一度北満の旅順を訪れ、遠く異国の地に眠ってをられます「わがいくさびと」を慰靈申し上げる旅をしたいものである、と念じてをります。

現状は「乃木凡将論」に目が眩み大東亞戦争の将帥達は学ぶ姿勢を失つてゐました。又、唯物史観により侵略戦争のレッテルが貼られたままであり、未だに剥がすことができてゐません。「つるぎの光」の「かがやき」は厚いヴェールに覆はれ空洞化した歴史が支配してゐる悲しむべき現状があります。ここで心を込めて日英の御製を二度拝誦ませう。

〈参考文献〉

- 『福田恒存全集 第六卷』文藝春秋社
- 『明治大帝 附明治美談』講談社
- 『至誠の人 乃木希典将軍』展転社

「國のためあなす仇は」 [Yet, while ye smite with all your]

仁(明治三十七年)

國のため

あなす仇は

くたくとも

いつくしむべき

ことな忘れそ

Yet, while ye smite with all your might

Your country's bitter foe,

Let not your hearts forget with love

Of all mankind to glow !

「その93」の御製から日露の戦ひがいよいよ始まったことが伺はれました。それぞれの御製は一首一首独立してゐますが英詩では連作として扱はれてゐるやうに思はれます。

ここで、平易な英語に直してお浸ひをしてみませう。

「その94」では[Mankind is a victim.](人類が犠牲となつてゐる。)& if Japan was wronged by Russia, it is the right thing to take avenger on them.(日本がロシアから不当に取り扱はれてゐるならば、彼らに復讐するのは正当である。)[Then, why should I question whether the gods will support us?](もしさうであるならば何故私は神々が護つて下さることを疑ふべきであらうか。)[He is very confident that the gods will support him.(天皇は神々が守護し給ふと確信して居られます。)]

次に「その95」をお浸ひします。[This poem is motivating his soldiers and praising them.](この御製は兵士達に動機付けを与へられそして彼らを讃へて居られます。)[The soldier's spirit is like the lightning flashes in the sky.](兵士の魂は空に輝く稲光のやうである。)[It's very strong and determined and awe-inspiring.](それは大変強力で決然として畏敬の心を起さしむ。)[The world is watching the lightning of the soldiers.](世界は兵士の発する閃光を注目して観てゐます。)]

此処で今回の御製に入りますが、参考のため『明治神宮叢書 第七卷 御集篇(1)』を引用します。「雄々しき大御心と、人道を重んじ給へる仁慈深き御思召とを歌ひ給へるなり。古へ神功皇后三韓を征伐せさせ給ひし時の軍令に、『其敵少なくともな輕りそ、敵強くともな屈ぢそ、奸暴をば聴しそ、自らに服ふをばな殺しそ』とあるも同じ大御心なりけり。』戦つてゐる「仇」を國のために全身全霊を込めて「くたく」ことをせねばならない。その際ここには四点に及ぶ現代性のある、しかも重要なポイントがあります。

- ①その敵が我が方より少ない兵力であっても輕視してはならない。
- ②敵が如何に我が方より強力であっても怖じ気づくことがあつてはならない。
- ③奇策(a cunning plan)・奸計(a dark design)を聴許してはならない。
- ④我が方に降服してきた捕虜を殺してはならない。

皆様は神功皇后の三韓親征とはいつ頃のことであるかご存知ですか。

西暦二百年、仲哀天皇九年のことです。三韓とは当時、①新羅(Silla)②高句麗(Kokuryo)③百濟(Pekche)の三国に分裂し争つてゐたことを指します。韓半島の平和が当時も今も、日本に取りまして不即不離の問題なのであります。

(神功皇后の三韓親征は、福岡県をご帰途、お通りになられましたから、各地に言ひ伝へが今尚残つてゐます。例へば、飯塚の地名は、大変良いお持て成しをしてくれたから神功皇后が「いつか又来る」と言はれた、それが訛つて「飯塚」になつたと云ふ由来があります。また、糟屋郡宇美町に宇美八幡宮があります。ご祭神は神功皇后であらせられ応神天皇ご降誕の地でもあります。今日でも子供を「産み」八幡宮として安産信仰が盛ん

である神宮であります。他にも色々興味深い神話がありますがここでは割愛します。(新全国歴史散歩シリーズ40『福岡県の歴史散歩』)

さて、この軍令が、明治天皇の御製に三十一文字となって甦り、詠まれてみると言ってもよいところであります。特に④にあります「降服してきた捕虜を殺してはならない」は1899年(明治32年)の第一回ハーグ平和会議で謳はれた「戦時国際法」の条項が思ひ浮かぶところでもあります。これに加へ「ダムダム弾および毒ガス使用禁止」など「陸戦法規」を極めて厳格に遵守して戦ふことをしたのが日本でありました。西暦二百年から既に皇室の伝統として存在してゐたのでありますから、他の国々に比べまして私達の父祖達は取り立てて新しく突きつけられた国際法規を守らされたのではなかったことを銘記して置くべきでせう。

ところが、日本の今の教科書は第二回のハーグ平和会議に付随するマイナーな「ハーグ密使事件」しか扱ってゐない。国民の心を豊かに育てる視点が欠落してゐるからであります。偏ったマイナーなデータしか子供に提供しない不甲斐ない教育からは、次代を担ふべき子供達に美しい心は育ちません。調べてみるに憤りを覚えます。

一行目から入ります。

[Yet, while ye smite with all your might] [Yet]で今回の詩は始まってゐますが、前文を受けて使用される語であります。[Yet]=「さりながら」、[while]=[although, even though]=「～する一方、～と雖ども」の意。[ye]=主格[you]の複数。[smite]=[to strike hard especially with the hand or a weapon]=「特に手または武器で激しく打つ」の意。[with all your might]=[with might and main]=「全力を振り絞って」の意で「その2」に既出。

一行目の訳は「さあれども、汝らが全力を振り絞って打ち負かすと雖ども」となります。

二行目に進みます。

[Your country's bitter foe,] [bitter]=[hard to bear : painful]=「堪へ難い、苦痛の」の意。[foe]=[enemy]=「敵、仇なすもの」の意。

二行目の訳は「汝が國の仇なす敵を」となります。

三行目に進みます。

[Let not your hearts forget with love] 御製の「ことな忘れそ」が[Let not your hearts...]と英訳されたところです。散文的には[Do not let your hearts forget...]と言ひ換へられます。「な...そ」は「(動作の制止・禁止を懇願して)・・・してくれるな。」の意であります。[love]=[benevolence]=「仁愛」の意。

三行目の訳は「他を慈しむ仁愛の心を忘れてくれるな」となります。

四行目に進みます。

[Of all mankind to glow !] [all mankind]=[everyone including your enemies]=「汝の敵を含む全ての人の意。[glow]=[to shine with an intense heat]=「強烈な熱を發して輝く」の意。逐語的に意味を取りましても、[Of]が何処を修飾するのか難解なところでもあります。そこで、理解しやすいやうに、散文的に書き直してみませう。[Do not your hearts forget to glow with love of all mankind !]となります。[Of]は目的格の働きをしてゐますから[love](愛)の対象は[all mankind](全人類)と云ふことになってゐます。

四行目の訳は「汝の心が全ての人々を愛して輝くことを忘れてくれるな」となります。[Marxism](マルクス主義)は、権力闘争のエネルギー源として[bourgeoisie](ブルジョワジー)階級に対する[hatred](憎悪)と[resentment](ねたみ)に求めました。この御製は[love of all mankind](全人類への愛)が行動のエネルギー源として働くべく詠まれてゐます。当時の世界の人々に輝きを放ったところであり、「その92」の「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちはぐらむ」と共に上の御製は、二十世紀初頭の文明史上、燦然と光輝を放つ名歌であると言っても過言ではないでせう。

「汝の敵を愛せよ」について

戦争とは無情な修羅場であります。ところで、勝敗が決まった後は、如何なる姿勢で臨むべきか考へて見たことがありますか。昨日まで自分達の命を狙って殺そうとしてゐた敵に対して憎悪の燃えたぎる炎を消さねばなりません。一刻も早くその火を消さないと平和の心は双方に生まれません。この御製は、日露の戦後ではなくて、戦ひの最中であつた明治三十七年に詠まれたことを知り畏敬の念を抱かざるを得ません。どうして此のやうな慈悲の心が生まれるのか疑問が湧きませんか。『孟子(下)』巻第九 万章章句上(講談社学術文庫127頁)の三を引いて吉田松陰は『講孟筭記』巻の三下 の中で次のやうに言つてゐるところがその答へを暗示してゐると思はれます。平成十九年一月二十一日(日)17:00～輪読した箇所であります。

「怒りを蔵さず、怨みを宿めず。

此の二句、尤も善し。徒に弟に於けるのみならず、仁人の心、他人に於けるも亦

斯の如し。『論語』に「怨みを匿して人を友とするは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ」

と云ふ、亦同意なり。凡そ人に交るの道、怨怒する所あらば、直ちに是を忠告直言すべし。

若し忠告直言すること能はずんば、怨怒することなきに若かず。若し然らずして是を蔵匿留置して、時を待ちて是を発せんと欲するは、陰柔小人のする所にして、誠に臆病と云ふべし。君子の心は天の如し。怨怒する所あれば雷霆の怒を発することもあれども、其の事解くるに至りて、又天晴日明なる如く、一毫も心中に残す所なし。是、君子陽剛の徳なり。」(440頁)

松陰先生は「『怒りを蔵さず、怨みを宿めず』、怒りを隠さず、怨んでもそれをいつまでも根に持つことがない、と云ふ二句がとりわけよい。この問題は、弟に対する時だけでなく、仁人の心は、他のすべての人々に対してもこのやうなものである。」と言はれます。

『論語』に、「怨みを匿して人を友とするは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ」とあるが、それも同じ意味である。凡そ人と交際する道は、もし相手に対し、怨怒することがあつたならば、直ちにこれを忠告直言すべきものである。もしそれができなければ、むしろ怨怒しない方がよい。」とも言はれます。

「もしさうではなくて怨み怒りを胸のうちに隠しておき、折を見てこれをはき出そうと思つたならば、それは陰険な小人の行為であつて、まことに臆病だといわねばならない。」このやうな心の働かせ方を「陰険な小人の行為」に走ってはならないと厳しく戒められます。

「君子の心は天の如くである。されば怨み怒りするところあれば、雷霆の怒りを発することもあるが、そのことが納得いくなれば、また青空や太陽のごとく、少しも心のうちにそれを残すことがない。これがいよゆる、君子の陽剛の徳といふものである。」(442頁)私達は、松陰先生に習ひ志を立て修養に努めるべきであります。乃木將軍は「君子陽剛の徳なり」が画餅にならないやうに日々怠らず戦場に於て尚修養に勤め励んでをられた。將軍のその心にまっすぐに迫れる歌があります。

乃木大将と敵の將軍ステッセルとが水師營で会見をした情景を歌つた「水師營の会見」の三番と四番を此処に引用します。

3. 乃木大将は厳かに 御めぐみ深き 大君の 大みことのり 伝うれば

彼かしこみて 謝しまつる

4. 昨日の敵は今日の友 語る言葉もうちとけて 我はたたへつ 彼の防備

彼はたたへつ 我が武勇

両將軍共に「昨日の敵は今日の友 語る言葉もうちとけて 我はたたへつ 彼の防備

彼はたたへつ 我が武勇」と歌はれた通りの心境に達してゐたことが伺はれ両將軍の心に平和が生まれてゐるのであります。「怒りを蔵さず、怨みを宿めず」の清々しい君子としての心の交流がここに歌はれてゐることがお分かりになるでせう。

音声面から見ますと一行目では[smite]と[might]が[Rhyme](韻)を踏んでゐまして前回の[The lightning flashes(つるぎの光)]を言及してゐます。二行目の行尾の[foe](敵)と四行目の行尾の[glow](底から光る)は[Rhyme](脚韻)を踏んでをります。同時に[glow](底光り)すること[The lightning flashes](つるぎの光)の如

しと[simile](直喩)となってをります。これが意味するところは「汝の敵」に対して「愛の光」を発して、平和な世界を招来しよう!であります。このメッセージの素晴らしさに感動しない人はゐないでせう。
最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『孟子(下)』巻第九 万章章句上 岩波文庫
- 吉田松陰 『講孟筭記』巻の三下 (講談社学術文庫127頁)
- 新全国歴史散歩シリーズ 40『福岡県の歴史散歩』
- 『明治神宮叢書 第七巻 御集篇(1)』

「はし居して月見るほども」 [On the verandah musing lone]

はし居して
月みるほども
たたかひの
にはのありさま
思ひやりつつ

On the verandah musing lone,
As on the moon I gaze,
How goes the day with us, I trow,
Where lightning flashes daze ?

前回の「その96 ——仁——」は[Yet, while ye smite with all your might

Your country's bitter foe,

Let not your hearts forget with love

Of all mankind to glow !]でありました。平易な英語で散文的に書き直してお浚ひをしてみませう。

[Still, even though you are fighting your enemy, please don't forget that we are all humans. Please love all mankind including your enemies.]となるでせう。「汝の敵をも愛せよ」が三十一文字の大和言葉で歌ひ上げられてゐます。明治天皇の[Philanthropy]=「博愛」のご精神が乃木將軍と敵將ステッセル將軍との水師營の会見の場で具体的に実現してゐたところを偲んだところでありました。

一行目から入ります。

[On the verandah musing lone] [verandah]=[porch]=「(庭園などに向かつた)縁側」の意。[muse]=「肉体の存在を忘れて思ひ入る」が[musing]となつて、二行目にある主語[1]の主格補語となつてゐます。[lone]=[詩・雅]companionless]=「連れのない」の意。

一行目の訳は「縁先に唯一人深く考へて居る」となります。

二行目に進みます。

[As on the moon I gaze,] [As]=[While]=「…しながら」の意。[gaze]=[to fix the eyes in a steady look]=「…を見つめる」「その64」に既出。

二行目の訳は「月を眺めながらも私は」となります。

三行目に進みます。

[How goes the day with us, I trow,] [How]=[in what way]=「どんな風に」は「その33」「その58」「その63」「その77」「その90」に既出。

[go]=[proceed]=「進む」の意。[the day]=「戦闘(day of battle)、勝敗(day's work on the field of battle)、勝利」の意。例へば、O.E.D.には1600年 E. Blountの言葉として[Without his aide, the day would be perilous.](彼の助力無しには戦争の勝敗は危機的になるでせう。)があります。「味方の戦況は如何に進むか」を上
の英詩に習って英語に直すならば[How goes the day with us?]となるでせう。この質問に対する返事として、
二・三例を挙げませう。①「我々は戦ひに勝つ。」=[We will win(or carry) the day.②「戦いに負けるだらう。」
=[We shall lose the day.]③「形勢宜しからず。」[The day goes against with us.]となります。[trow]=(古
語)[think, wonder]=「思ふ、疑問に思ふ」の意とありますが、これでは意味が繋がりません。原義を調べると中

英では[trowen]=「信じる」であり[treow](信念)より派生したことが分ります。掘って散文的に書き直せば[I wonder how the day goes with us.]となるだけでなく、内意として[I believe we will win(or carry) the day..]が込められてゐる感じがします。掘って[trow]は[wonder]と[believe]を合成しての「思ひ遣る」を英訳した語であると考へます。皆様は如何思はれますか？

三行目の訳は「戦況は如何に進むか、と私は思ひ遣る」となります。

四行目に進みます。

[Where lightning flashes daze ?] [Where]は[the day]から来る「戦場、たたかひの庭」を先行詞に取る関係副詞。[lightning flashes]=「つるぎの光」。「その95」に既出。[daze]=(vt.)では[to dazzle with light]=「光で目を眩ませる」ですが、ここでは、(vi.)でありますから[to dazzle with flashes]=「ぴかぴか光る」の意となるでせう。

小柳陽太郎先生が「日露戦争における天皇と国民」について講義をされてをります。そこを読みますと「ぴかぴか光る」が一体どんな光なのか感じ取ることが出来ます。一緒に読んでみませう。

剣(明治三十七年)

あらはさむときはきにけりますたをがとぎし剣の清き光を

これはまさしく日露開戦に際してお詠みになつたお歌でせう。開戦の時の切迫した国民感情については先ほどお話した通りですが、(註。引用してはをりませんが『日本への回帰』を各自で是非お読み下さい。)とりわけ、「とぎし剣の清き光」の「清き」といふ言葉に注目していただきたい。昨日の竹本先生の「武士道」についてのお話を思ひ出しながら、この一首を味はつていただければ、よくわかつていただけると思ひますが、「ますらをの剣」の放つ光は「清い」のです。そこに武士道の神髄があるのです。)(『日本への回帰』第三十三集)お月様やお星様が空に輝くのを見て「きらきら光る」または「煌々と照る」と表現します。私には戦場での体験はありませんが、まさに切り結んだ白刃が、発止と音を立てるやうなその一瞬には「清い」光を放つのでありませうか。戦場に立ったことのない私達でも祖国日本のために戦はれました父祖方の「たたかひの にはのありさま 思ひ遣る」ことは出来るのであります。

四行目の訳は「戦ひの庭に剣の光が清く光る」となります。

『思ひ遣り』について

私達の心が、生きとし生けるものに対して「思ひ遣る」心の働きが衰へると、一体人生はどうなるでありませうか。きつと生き甲斐が感じられなく味気ないものとなるでせう。今や一対一の人と人との付き合いが出来ない。一対0.5(ゲーム機器)との付き合いしか出来ない子供が年だけ取り、責任感もないままで大人になってゐるとも云はれます。畢竟、個人的な狭い世界の中で刹那的、物質的欲望を満たすことに狂奔せざるを得なくなり社会は退廃的なムードが支配するに違ひありません。国家や民族を生命体として捉へて考へてみますならば、衰退期の民族や国家にも同じやうなことが言ひ得るでせう。

[China]には四千年の歴史があるとよく云はれます。孔子・孟子を生み出し人類の文明に光を与へた偉大なる國でありました。ところが、二十世紀に入つての清国は如何であつたでせうか。ロシアの満州進出は日を追つて熾烈を極めてゐまして、朝鮮半島に手を伸ばしてくるのは、目前に迫つて来てゐました。

それを象徴する事件が一九〇一年(明治三十四年)七月、満州の北端を流れるアムール川(黒竜江)の北岸、ヴラゴウチェンスクにおいて、四千人に近い清国の国民をアムール川に追ひ込んで虐殺すると言ふ事件が発生してゐました。その危機を危機として現実に「思ひ遣り」受け止める力は、清国政府には、悲しいかな存在しませんでした。無辜の同胞が虐殺されたことに対して、憤ることも惨劇に出会つた家族のことを思ひやり悲しむこともなかつたのであります。

当時の日本はこの事件を人ごととしてではなく、「思ひ遣り」ロシアの非人道的な所行を許してはならないと、満身の怒りを込めて受け止めてゐたことが窺はれます。その典型的な一例として第一高等学校の学生が

記念祭歌として「アムール川の流血や」を作詞してあります。

- 一、アムール川の流血や 氷りて恨み結びけん 二十世紀の東洋は
怪雲空にはびこりつ
- 二、満清既に力尽き 末は魯縞も穿ち得で 仰ぐは独り日東の
名も香んばしき秋津島

愚鈍の私には六十歳になっても決して出来さうにない素晴らしい詩であります。皆様より少し若い当時の若い学生が「アムール川の流血事件」を決して見逃す分けには行かぬ。「氷りて恨み結びけん」と強い意志と気概を歌ひます。「末は魯縞も穿ち得で」の「魯縞」とは[China]の「魯」の國で産出する美しい絹織物のことであります。どんなに強い矢でも、「末は」その勢ひの尽きる時には、薄い絹織の布でさへも突き通す力が失はれて仕舞ふと言ふのです。満州族が支配する清國も「魯縞も穿ち得で」既に戦ふ力が尽き果ててゐる。此處で詩が止まってゐるならば、傍觀者の情勢判断に過ぎない。或は無責任な今流行の評論家の発言にすぎないでせう。

【日本——白人によるアジア侵略に対する最後の砦】

アジアの全ての國が力を奪はれ、力を取り戻す気概も失せてしまつてゐる。その中でただ一つ、「名も香んばしき秋津島」がある。「秋津島」とは日本国・大和の國の古來からの呼び方。「香んばし」とは日本國を修飾してゐます。「心惹かれる」「美しい」「立派な」國である日本の國だけが、ロシアの侵略を喰ひ止めることが出来る最終にして最後の砦なのである、と実にか高らかに歌ひ上げてあります。

西洋では、[Poetry expresses beautiful thoughts in beautiful words.]＝「美麗なる思想を美麗なる言葉にて描くものが詩である。」と言はれます。[beautiful]には形や色の完全さだけでなく高尚な精神美を備へたものを形容します。魂が籠もり行動意思への飛躍がないならば、如何に美文でも死文に過ぎません。美しいものが、神様から戴いた力を添へてゐるか否かが、本物と偽物とを分かつ分水嶺(criterion)となるのです。

この詩は秋津島の大和の國々にみなぎつてゐた興隆期の日本の時代思想に表現を與へたものであつたと言へるでせう。ここには青年の國家に対する誇りと責任がひしひしと感ぜられるのであります。

清國の國民の生命と財産を守ることが出来ない清朝政府は、日露戦争に際して、日本と中立條約を結んでゐました。日露の戦に出た古老達から傳へ聞いた逸話があります。日露兩軍とも飲み水が合はないで下痢に襲はれた時期がありました。兩軍共に下痢がつくと踏ん張りがきかず力が殺がれてどうしようもない困難な状況が襲つてゐたときのことです。實質支配してゐた満州地区の馬賊の頭目が日本軍にだけ下痢止めの薬をこっそりと調合してくれたのださうです。その薬は、皆様もご存知の今でも日本で売られてゐる「正露丸」でした。戦前までは「征露丸」と呼ばれてゐた由縁が偲ばれる名前ではありませんか。その御陰で日本軍には腹に力が入り戦へたと言へてゐるほどです。このやうな逸話を、幼い頃他にも沢山聴いたものでした。「冬の夜」の二番は「困炉裏のはたに縄なふ父は 過ぎいさの手柄を語る。居並ぶ子どもはねむさを忘れて 耳をかたぶけこぶしを握る。困炉裏火はとろとろ 外は吹雪。」であります。

私の家は昭和二十八年まで困炉裏でありました。そのころ何ヶ月かに一度、隣組の人が「庚申尊天」と呼ぶ寄り合ひに集まつて来ました。夕食と一緒に食べ深夜まで話が弾んでゐました。日露戦争で砲兵だった人、満洲義軍に入つてゐた人、金鷄勳章を明治天皇から戴いてゐたお爺さん方が大きな声で体験談をなされてゐるのを、隣の部屋で私達兄弟は文字通り「ねむさを忘れて 耳をかたぶけこぶしを握つて」、テレビのない時代でしたから幼いながらも心に描き戦場をリアルに「思ひ遣り」ながら聴いたものでした。日本の歴史を実体験から語る人の話が聴ける至福の時代であつたなあと思ひます。今では日清・日露の戦を感動の琴をかき鳴らしながら話す人も亡くなりました、歴史に推参し「思ひ遣る」ことが不可能となつてゐます。日本の歴史の縦糸は切られたままであります。

戦況を尋ねるときに[How goes the day ?]で意味は通じると思はれます。ところが英詩ではこの疑問文の後に[with us]が付けてあります。何故でせうか。二つ考へられます。

- ①英詩の格調の上で、バラードの韻律を踏むために弱・強の[with us]がつけられた。
- ②日露戦争に至る上官と部下の関係は鍛へる時は厳しく徹底してゐたさうです。しかし夜、部下が毛布を外し

て寝てみると風邪を引かないやうにと優しく毛布を掛けてやってゐた。部下に対しても輜重の軍馬に対しても温かく接してゐたと伝えられてゐます。また、戦場に立つ兵士たちと銃後で國を守る人達が心を本当に一つにしてゐたのであります。(ならば大東亜戦争時は、と比較されますが特攻隊の生き残りの私の従兄弟は、訓練を受けてゐましたときに、「飛行機よりも人間の命の方が大切だから、真逆の場合には落下傘を使用しなさい。」と言はれてゐたさうです。「実際に戦友の松井君は落下傘で脱出したのは良かったが、梨の木に引っ掛かって宙ぶらりんになり大笑ひしたことがあった。」などと話してゐました。)

軍規を破る不届き者はいつの時代にもどこの国にも存在します。ところが日本にだけ特有のものであるかのごとく喧伝されるから暗いイメージしか戦前に対して抱けない日本人ばかりとなつてゐます。歴史に明暗は付きものですが、一部の例外を除いて何時の時代も日本人は本性はやはり「優しくて思ひ遣り深い」のではないか。

[with us]には、やむなく戦場に立たされてゐたのは「向かう三軒両隣の」ごく普通の私達の父祖達であり銃後の守りも我欲を抑へた典型的な日本人であつたでせう。国民が皆、戦場からの知らせを一日千秋の思ひで待つてゐたでせう。「戦況はいかが?」=[How goes the day?]に[with us]を付けることにより、上は天皇陛下から一庶民に至るまでの国民全体の心が一つになつてゐるその意を込めて、齊藤氏は英訳してゐたのではないでせうか。最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『日本への回帰』三十三集 小柳陽太郎「日露戦争における天皇と国民」
- 『日本への回帰』三十八集 小柳陽太郎「明治の精神」
- 『戦後教科書から消された文部省唱歌』ごま書房

「夢さめてまづこそ思へ」 [When from thy slumber]

折りふれて(明治三十七年)
 夢さめて
 まづこそ思へ
 いくさ人
 むかひしかたの
 たよりいかにと

When from thy slumber thou dost wake,
 Be these the thoughts that rise :
 " What tidings glad or sad from where
 The banners flout the skies?"

明治天皇は御製の「夢さめて まづこそ思へ」とは誰に対して言うてをられるのでせうか。「いくさ人」とありますから、一見、軍人へのご命令のやうに受け取れさうです。ところが下の句まで拝誦しますと遠く南満州に出征してゐる「いくさ人」のことを「まづこそ思へ」と明治天皇ご自身に言うてをられるのだと言ふ、緊張した調べに、私は驚かされます。

参考のため『明治天皇御集 巻中』を引用します。

「深夜 大御夢さめて、まづ出征軍の上をおぼしやらせ給へるなり。」(234頁)御製の「夢さめて まづこそ思へ」とは誰に対して言うてをられるのでせうか。「いくさ人」とありますから、一見、軍人へのご命令のやうに受け取れさうです。ところが下の句まで拝誦しますと遠く南満州に出征してゐる「いかさ人」のことを「まづこそ思へ」と明治天皇ご自身に言うてをられるのだと言ふ緊張した調べに驚かされます。

一行目から入ります。

[When from thy slumber thou dost wake,] [slumber]=[to sleep usually lightly]=「通常ちよつと眠る」の意。ここではぐっすり眠る[sleep]ではなくて、「うたた寝程度の浅い眠り」しか取られてゐなかつたことが窺はれます。散文的になりますが平易に書き直すと[When you wake up from your sleep]となります。

一行目の訳は「汝が浅い眠りから覚めると」となります。

二行目に進みます。

[Be these the thoughts that rise :] [thought]=[process or power of thinking, reason]=「(理性を有する者の) 考へること、思考」の意。[that]は関係代名詞で[the thoughts]を先行詞に取る。[rise]=[to come about]=「(思想などが) 浮かぶ」の意。難解な詩文ですから簡単には分らないでせう。平常の語順に戻すならば[The thoughts that rise (should) be these :]となります。[these]は指摘代名詞であり三・四行目の疑問文を指します。二行目の行尾の[rise]と四行目の行尾の[skies]が脚韻(rhyme)を踏むやうに[Be these]が行頭に置かれてゐます。加へて「夢さめてまづこそ思へ」に籠もる強調の意も込められてゐるでせう。

二行目の訳は「これらのことなれ、心に浮かぶ思ひは」となります。

三行目に進みます。

[" What tidings glad or sad from where] [tidings]=[news]ではありますが[tide]=[to enable to surmount or endure a difficulty]=「困難を切り抜けさせる、または困難に耐へさせる」の気持ちを込めた[tidings]と置いたのでせう。[glad tidings] (吉報)[sad tidings] (凶報)であり[from where]は「戦場から送られて来る」の意。三行目の訳は「戦場から知らされる吉凶交々の報は如何にと」となります。明治天皇はそれらの知らせ一つ

つに最終的なご責任を痛いほど感じてをられるのでせう。

四行目に進みます。

[The banners flout the skies?] [banner]=[flag]=ここでは「軍旗」のことです。[flout]=[disregard scornfully]=「軽蔑して無視する」の意。[the skies]=[weather, climate]=「天候、気候」の意。

四行目の訳は「軍旗はさまざまな天候をものともせず進撃する」となります。

「鬼気迫る戦場について」

丸バツ思考が全てに当て嵌められて、日本人は小学生から「平和は○で戦争は×だ」単純に教へ込まれてきます。ならば「[armaments](軍備)[military buildup](軍備増強) [reduction of armaments](軍備縮小)はどちらになるのでせうか?」と問ふて見たい。米欧の生徒は皆、それらは平和を築くために必要不可欠のことであると答へるでせう。日本の子どもだけは[reduction of armaments](軍備縮小)だけ中には○を付けるかもしれませんが、[armaments](軍備)[military buildup](軍備増強)も×を付けるのではないでせうか。戦争を誘発しないためには[armaments](軍備)が、ものを言ふのであり、平和を求めるが故に、外交と軍備は車の両輪なのであります。「戦争を望まない。」「戦争をしてはいけない。」と口で言ふだけで平和が維持できるのか思考を停止させないで自分の頭を働かせて翼々考へて見るのが成されるべきでせう。

戦場に好むと好まざるとに閑はず立たざるを得なくなった兵士の気持ちを偲ぶことが先ず第一に成されるべきであります。自分の命が大事である。同様に、戦場で命がけの戦いを私心を去り勇敢に戦ってゐる兵隊さん一人一人の命も掛替へのない地球よりも重い命であることに変わりがあるでせうか。命の尊さを子どもに教へるのは良い。だがこれらの命は尊いがあるの命は尊くないなどと差別を設定しては国民に健全で豊かな精神は育たないでせう。何故ならば、「勝れてゐる、ゐない」は比較できるものであります。が、「尊い」は比較を絶する存在であるから「仰ぐ心」が育ってゐないならば「尊いもの」が「尊く」見えてこないであります。このことは何処の國でも幼い頃から教へ込んでゐることであります。

戦場とは鬼気迫るところであります。夏目漱石が旅順の二〇三高地攻略戦の戦地と、旅順港湾の戦跡を訪れて起稿してゐる『満韓ところどころ』から偲んで見ませう。

「自分で此処を攻め寄せてきた経験を有つてゐる市川君の話は、甚だ詳しいものであつた。市川君の云ふ所によると、六月から十二月迄屋根の下に寝たことは一度もなかつたさうである。」

ああさうかと読み過ぎてはならない箇所です。雨や嵐の日はどうしたのであらうか。北海道よりも北にある戦地ですが冬の寒さをどうして耐えたのでせうか。

「あるときは水の溜つた溝の中に腰から下を濡らして何時間でも唇の色を変へて^{すく}凍んでゐた。食事は鉄砲を打たない時を見計らつて、何時でも構はず口中に運んだ。その食事さへ雨が降って車の輪が泥の中に埋まって、馬の力ではどうしても運搬が出来なかつた事もある。」(『漱石全集 第八巻』二十七 215頁)

想像を絶するご苦労が成されてゐたのであります。素直に耳を傾けることが肝要な姿勢であり礼儀でありませう。明治四十二年九月十日(金)の日記に旅順に向かふ折りの箇所から気候の厳しさが窺へる所があります。

「厠に行く寒さ。田中君汽車に乗る。貨車 lantern 揺れて火が消える。外套を来てすくまる。窒息して病人が出る(炭火)平野水が二三滴しか飲めず。清野理事シャツを半ダース着る。」(『漱石全集 第十三巻』 446頁) 平時においては九月十日でさへ「外套を来てすくまる。」ほどであり「シャツを半ダース着る。」も寒いのが南満なのである。そこで「六月から十二月迄屋根の下に寝たことは一度もなかつた」「あるときは水の溜つた溝の中に腰から下を濡らして何時間でも唇の色を変へて^{すく}凍んでゐた。」人間の精神力の極限に挑みながら戦はれた体験がここには語られてゐます。

「体験の重み」

上に引用しました漱石の文の続きが戴けない。読んでみませう。

「今あんな真似をすれば一週間経たないうちに大病人になるに極まってゐますが、医者に聞いて見ると、戦争のときは身体の組織が暫くの間に変つて、全く犬や猫と同様になるんださうですと笑つて居た。市川君は今旅

順の巡查部長を勤めてゐる。」(『漱石全集 第八巻』二十七 215頁)この市川君は運良く生き残り「今旅順の巡查部長を勤めてゐる。」から笑って済ませるかもしれません。しかし平和が来るやうにと戦ひ命を落としてしまった方々には理解しがたい譬へであります。「全く犬や猫と同様になるんださうです」戦死をされた方には無礼ではないでせうか。「・・・と笑って居た。」笑って済ませる体験では無い。何か大切なことが見落とされてゐる気持ちになります。

昭和四十九年八月霧島で合宿教室が開催され小林秀雄先生が「信じることと知ること」と題して講演をされました。一九一三年ベルグソンがさる大きな会議に出席してゐたときに「精神感応の問題」に話が及んだことを例に挙げて次のやうに話されます。

「あるフランスの名高い医者も出席してゐたのだが、一婦人がこの医者に向かつてかういふ話をした。この前の戦争の時、夫が遠い戦場で戦死した。その時、パリにゐた夫人は、丁度その時刻に夫が斃れた夢を見たのです。それをとりまいてゐる数人の兵士の顔まで見たのです。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫は夫人が見た通りの格好で、周りを数人の同僚の兵士に取り囲まれて、死んだ。」

これに対して二つの態度がある。

- ① 医者は「夫人の見た夢の話を、自分の好きなやうに変へてしまふ。その話が正しいか正しくないか、つまり夫人が夢を見た時、たしかに夫は死んだか、夫は生きてゐたかといふ問題に変へてしまふ」と言ふのです。
- ② 「しかし夫人はさういふ問題を話したのではなく、自分の経験を話したのです。夢は余りにもなまなましい光景であったから、それをそのまま人に語ったのです。それは、その夫人にとって、たった一つの経験的叙述なのです。」勿論、ベルグソンと同じやうに小林秀雄も夫人の体験を重視してゐるのです。正しいか正しくないかで如何に追求しても夫を亡くしたこの夫人の悲しみを分って遣ることは出来ません。事實は反対の結果となつて現れる「逆夢」もあります。この夫人に取りましては事實そのままとなつて現れた「正夢」であつたのであります。

乃木將軍の奥様にも夢の話があります。静子夫人は長男勝典が戦死した報に接しられた時、武士の妻らしく少しも取り乱した風もなく落ち着いてをられた。と言ふのは前夜、夢の中で母上いとまに暇乞ひに来てをられた、と言ふ逸話があります。如何に名譽の戦死であるとは云へ、自分の血肉を分けた子どもの死を願ふ母親はゐるはずがありません。昨夜見た夢が「逆夢」でありますやうにと神様に祈りながら一刻一刻を緊張して過こらしてをられたに違ひないと私には思はれます。ただ一人で留守を守る武人の母親として他人の前では、涙を堪へることができて、家族の中で誰よりも先に幽冥異にし、戦死してしまつた息子の為に涙を流されなかつたと言ふことが考へられるでせうか。私は、長男勝典の遺影の前にただ一人で座つてをられる乃木静子夫人の姿を心に思ひ浮かべる時に胸が熱くなり言葉を失ひます。小林秀雄氏は「歴史は人間の興味ある性格や尊敬すべき生活の事實談に充ち充ちてゐる。」「普通の人間なら涙なくして読むことが決して出来ないものだ」と言はれる。「さういふものを歴史教育から締出してつてゐるのは昭和一六年四月『歴史と文学』氏が書いた時代と今もちつとも変らないのでせう。

日露戦争とは、明治と言ふ国家が世界史の中で突きつけられた試練(test)であり、うち勝たねばならない試練(trial)であつたのです。歴史のうねりの中に我身を置いて味はふならば感動の涙に濡れることが出来るでせう。イラクで二千人以上の戦死者を出して戦つてゐるアメリカに対しましても違つた視点が生まれてくるのではないでせうか。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『日本への回帰』昭和四十九年合宿教室講義小林秀雄「信じることと知ること」
- 『漱石全集 第十三巻』
- 『葦牙 7』
- 『歴史と文学』
- 『明治天皇御集 巻中』

「國をおもふみちにふたつは」 [That man loves not alone his]

述懐(明治三十七年)

國をおもふ

みちにふたつは

なかりけり

いくさのにはに

たつもたたぬも

That man loves not alone his land

Who for her fights and dies ;

He likewise loves his native clime

Who stays at home and prays.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「戦捷は、全国民の一致協力の結果より成るもの、義勇奉公は国民全体のことにして、決して軍人のみに限らざるよしを宣へり。当時国民の熱誠高潮に達して、出征するもの砲烟の間に馳駆するもののみ花やかに見えたるにより、隈なく広き大御心よりかくは詠ませ給へるものと拝察せらる。」(217頁)

一行目から入ります。

[That man loves not alone his land] [That]は遠方を指すので[That man]=[The soldier on the battlefield]=[戦場の兵士]の意であり、「その93」にありました「ますらを」のことでせう。[not alone]は二行目の末尾の[;]と三行目の[likewise]=[also]が呼応してゐますから[not only A , but also B]=[AだけでなくBもまた]と両方肯定する文となつてゐます。[land]=[nation, country]=[國]の意。

一行目の訳は「ますらをだけが國を愛するにあらず」となります。

二行目に進みます。

[Who for her fights and dies ;] [Who]は関係代名詞で先行詞は[That man]であります。[her]は[land]を指す代名詞、[for her]=[國のために]の意。「死を決して戦ふ」を英語で[fight to the death]と言ひます。また「死ぬまで戦ふ」を[fight to the last drop of one's blood]と言ひます。同様の意味で[fights and dies]が使はれてゐますが四行目の行尾の[prays]と脚韻(rhyme)を踏むやうに、工夫をして[and dies]と置かれてゐます。

二行目の訳は「彼はお國の為に死を決して戦ふ」となります。

三行目に進みます。

[He likewise loves his native clime] [He]は[That man]を受ける代名詞。[likewise]=[also]=[もまた]の意。[native]=[born in a particular place or country]=[特定の場所または國に生まれた、生國の]の意。[clime]=[①climate(気候)②atmosphere(雰囲気)③country(國)]の三つの意味があります。皆様が日本を離れて外国旅行をして一番に感じるものは何でせうか。[native clime]とはそれであると思はれます。外地では、①気候風土の違ひ②言語の違ひから生ずる空気の違ひ③生國を離れて自己の内面に存在する故國との違ひ等々があるでせう。三行目の訳は「同様に、彼は生國の天地を愛する」となります。

四行目に進みます。

[Who stays at home and prays.] [Who]は[his native clime]を先行詞に取つてゐます。[Who]は人を先行詞に取りますから、訳者・齊藤氏は、高度な英語力を駆使して、[the clime]を[personifying](擬人化)してゐるこ

とになります。[stay]=[prop, sustain]=「支へる」の意があり、[stay at home]=「宅に居る」の意となる。
[pray]——①to God——②for something——③that it may be so =①祈る ②祈禱する ③祈願するの意。
四行目の訳は「ふるさとの国人達は、宅居して武運長久を祈願する」となります。

「國を思ふ道について」

主語の[That man]は形容詞節を従へてゐます。

①[Who for her fights and dies ;](國のために死を決して戦ふ)

四行目にある形容詞節は

②[Who stays at home and prays.](宅居して武運長久を祈る)であります。

御製では①は「いくさのにはにたつ」であり②は「いくさのにはにたため」であるでせう。明治天皇の大御心はこの二つの道は別のものではない。「國を思ふ」と言ふ一点に置いて上下の区別のない、或は危険である危険ではないなどの差異のない[A united way]一つの統一された道である、と詠まれてゐるのであります。

皆様は①と②を比較しなさいと言はれれば、①がより尊い②はそれ程でもない、と頭の中で思はれるのではないでせうか。心の底から「成程その通りだ。」と納得が行きますか。大切なところでありますから『短歌のすすめ』(國文研叢書 12)を引用して考へて見ませう。

「歌の作り方」の中に 戦争の歌——短歌の人間性——と言ふ章があります。人間のところが、納得が行く前に外部から「斯くあるべし」の観念を強制されると一見力強いやうであります。其処には、自己の本然の心を偽り「うそ」が入りこみ、脆いものとなるのであります。人間が思想し生活を営んで行く上で、大変重大なしかも難しい問題を含んだ例が取り上げられてゐます。次の大東亜戦争時の歌を詠んで下さい。

すがやかに晴れたる山をあふぎつつわれ^{みいくさ}御軍のひとりとなりぬ

山田輝彦先生は次のやうに解説されます。

この歌のどこに問題があると考へられてゐるのでせうか。

『すがやかに』というのは、すがすがしいという意味でしょう。「御軍の一人となりぬ」は、軍隊の一員となったという意味です。「みいくさの一人となる」という言葉は、自分が軍隊の一員となったというので、単に自分が軍隊の兵営に入ったということとは違います。もときびしい運命を背負うということを意味します。ところが、「すがやかに晴れたる山を仰ぎつつわれ・・・」となると、後には(ハイキングにでも行こう)というような言葉がふさわしいのです。それも、すがやかに晴れた山を仰ぎつつ、自分は宮門に入って行ったというなら、まだ分ります。しかし、何の人情もない人ならともかく、故郷や肉親を離れて行く人に、そういう感情がありうるでしょうか。まして、みいくさの一員になるという場合に当然起こってくる悶えや、悲しみ、家族への心残り、そういうものを乗り越えて行かねばならぬ決意——といった悲劇的なものが、全くないようにこの歌は作られているのです。実際にこういう経験をする人はいないでしょうし、かりにあったとしても、それは全く特殊の経験、ほとんど架空の経験でしかあり得ない。こういう歌を国民学校の教科書に載せて、皆こんなふうになれと教えることは重大な問題です。つまり、そこには人間の真実というものが失われているからです。これは恐らく架空の想像によって作った歌だと思ひます。もし作者があるとすれば、兵士となる悲しみなどを口にする、人から非難されるかも知れないので、どこかにあった歌の一部を借用して「われみいくさの一人となりぬ」の句をそれにくっつけたのかも知れません。これも偽りの歌です。偽りというのは、「かくかくであらねばならない」という固定した観念によって詠んでいるからです。軍隊に入るということは、すがすがしいことではなければならない、という観念に基いて詠まれてゐます。本当に軍隊に入るものの気持ちは、そんなものではありません。悲しいけれども、それを乗り越えて行くという複雑な思いが、現実の心境であろうと思うのです。(86～88頁)

ここには大きく二つの感情があります。

①「悲劇的感情が自己の内面を支配する世界」

故郷や肉親を離れて行く人、つまり「みいくさの一人になる」場合に人間として当然起こってくる「悶えや、悲し

み、家族への心残り」などの悲劇的感情が人間の心には自然に起こってくるものであります。

この世界を歌って人口に膾炙してゐるのは日露戦争時、与謝野晶子の詩があります。彼女が「君死にたまふことなかれ」——旅順口包圍軍の中に在る弟を嘆きて——を歌ったのは戦後の日本史の教科書全てに掲載されてゐますから皆様ご存知でせう。この感情が国民の心の全体になれば、どういふことになるのでせうか。厭戦気分が支配し、戦はずして國は滅亡する以外に何が望めるのでせうか。しかしこの感情が決して在ってはならないと自分に言ひ聞かせても、心の中から消えるものではない私の世界は肉体が滅びるまで在る、悲劇的感情は『方丈記』に云ふ「澱ミニ浮カブウタカタハカツ消カツ結ブ」もので、否定したり滅することができないものである、と思はれます。「滅私奉公」にはその点で心理的に無理があります。故に教条的になり偽りを生んだのです。

②「公に開かれた広やかな世界」

そのやうな悲劇的な感情を乗り越えたヒロイックな精神。人間の意識の流れを凝視すれば「滅私」ではなくて聖徳太子が唱道された「背私向公」の方が的確であることがお分かりになるでせう。

明治天皇は②の方にばかりスポットライトが当てられてゐるが、出征してゐる主人の為に家を守る夫人または子どもを出征させて野良仕事をしてゐる老人達にも同等の価値があると詠んでをられるのです。

皆様は「陰膳」と言ふ言葉を聞かれたことがありますか。これは、[pray](祈る)の具体的行為とみなされまゝです。家を離れ兵士として遠く外地で戦ふ方と共に「陰膳」を捧げて食事をする習慣が日本にはあったのです。この習慣はつい最近までありました。私の兄は昭和十八年生れですが、南方戦線に出征してゐた伯父さん(母の兄さん)には、戦後も安否が分らなかったのです。無事帰還することを祈るために、戦後も陰膳を上げてゐたさうです。伯父には兄と同年の娘がゐまして、その遺娘(私たちにとっては従姉妹)と一緒に兄は、陰膳をすゑに行ったことを良く覚えてゐると言ひます。皆様はそんなこと馬鹿げてゐると一笑しますか。戦後何年かは遺骨が帰らない家ではどこの家も自然に行われてゐたごく常識的な風景であつたのです。冷めた目で笑はれるならば、歴史の命は絶たれてゐることになり、切ない気持ちになります。

さて、戦後の丸バツ教育では①と②に対してどのやうな結論を出すのでせうか。その教育では①の感情のみ丸(○)であり、②はバツ(X)と成るところでせう。偏つた教育が実施され六十年が経ってをります。①に属する与謝野晶子の詩——思想的に捻くれたところが見られ私は嫌いですが——を教へることを私は否定せよとは言ひません。そればかり教へないで、並列して子供には両方をオープンに提示した方がベターでせう。その夫である与謝野鉄幹の「旅順口封鎖隊」と言ふ四行十二連からなる詩も生徒に教へて上げたいものです。日本の子供達が偏つた思想の持ち主——[selfishness](我が儘)に[cause](大義)を与える人物——となつて欲しくないからです。

明治三十七年二月、仁川沖のロシア艦隊を攻撃して日露戦争が開始されました。ウラジオストックから回航したロシアの艦隊が旅順港の奥深くに潜み込んだのであります。そこで港の口に日本の船を並べて沈めることで敵艦を封鎖して仕舞へと言ふ決死の作戦が立てられたのであります。

「この大任を果す者 誰そと厲しき一令に 応と微笑み名を陳るは 死を決したる二十人

あな勇ましの人々と さすがに猛き將軍も 感にあまりて涙ぐみ

しばし詞はとだへたり」

死を決して名乗り出たのは二十人に及んだのです。選ばれたのは七十七名の兵士でした。五隻の船(小艇)に乗り込んだ決死隊——七十七勇士が「もとより敵の守備かたき 砲火十字の修羅の海」へ 入って行くのであります。彼らには晶子と同じやうに兄弟なり親も妻も子も祖国に残してゐたのであります。鉄幹は歌ひます。

「國には親も妻もあり 子もありと云へ戦ひに 死ぬる命を惜しまぬは

「日本の武士が憤ひなり」死ぬる命を惜しまぬ武士を晶子の夫・鉄幹は、讃へてゐるのです。

この詩だけでなく鉄幹は「嗚呼廣瀬中佐」六行からなる十二連の詩も作つてゐます。

「敵のみなとの要害に 五艘の舟を沈めては 九死のなかに生きたりし

旅順封鎖の決死隊 いさましき海いくさ 血汐に染まぬ人もなし

天皇陛下のみいづゆゑ いのち生きては帰りつれ 猶もみなとをすきまなく

塞ぐぎえざるは耻なりと わが功をほこらざる やまとの武士のゆかしさよ」
志を立て世のため人のために如何に生きるべきか考へる時期に「日本の武士が慣ひとは?」「やまとの武士のゆかしさとは?」を自問をして置くことが大切なことではないでせうか。晶子が歌った姉としてまた母親の悲劇的な感情だけを与へられて成長するならば、片肺人間ではないでせうか。現代は平気で弱者苛めが横行してゐます。①のみ子供に提示するから②の健全で勇気ある精神が育つてゐない。弱い者苛めは断じて許さないと云ふ「勇気」を歴史から具体的に偲ぶ教育が欠如してゐるからであります。

大東亜戦争時は「兵士となる悲しみなどを口にすると、人から非難されるかも知れないので、」家族的な恩愛の情はどこかに置き去りにして②のヒロイックな精神のみを強調した。この時代の教条的な思考では①の悲劇的感情はバツ(X)であり②のみが丸(O)であつたのでせう。戦後はそれが逆になつてゐるだけで片肺教育であることには変りないと言はざるを得ない。重大で深刻な問題は戦前も戦後も本質的には解決されてゐないと言ふことに気づかねばならないでせう。

明治天皇は戦場で命をかけて戦ふ兵隊と戦場に出ないで家を守り武運長久を祈る人々に同等の価値があると「國をおもふみちにふたつはなかりけり」と歴史を振り返られご詠嘆なされてをられるのです。國の勢ひと力は二つに分裂しない一つに寄り合はせ[unite](統合)され根元的な力となるのでありませう。

最後に日英の御製を二度拜誦して終ります。

〈参考文献〉

- 『短歌のすすめ』(國文研叢書 12)
- 『明治天皇御集 巻中』
- 『与謝野鉄幹 与謝野晶子集』明治文学全集51 筑摩書房 昭和四十三年版
平成十九年三月四日(日) 於て 梅鶯塾 「多賀君・林君卒業記念合宿」の為に

「ちはやぶる神の心に」 [How pleasing in the sight of all]

折にふれて(明治三十七年)
 ちはやぶる
 神の心に
 かなふらむ
 わが國たみの
 つくすまことは

How pleasing in the sight of all
 The gods that guard the land
 Must be the true fidelity
 Of this my patriot band !

明治三十七年の「折にふれて」四十八首の内にある一首であります。次に続く三首も併せてご紹介しておきます。

なりはひは よしかはるとも 國民の 同じところに 世を守らなむ

(なりはひは職業。國民のは、世を守らなむに対して主格の語法なり。五句は、國民に世を守るべしと諭し給へるなり)

國民の ひとつところに つかふるも みおやの神の みめぐみにして

(國民の忠良なるを喜び給ふにつけて、祖宗の御恵を感謝し給へるなり。結句の下に、言外に詠嘆の意のこもれり)

身をまもる 道はひとすぢ 位山 たかきいやしき しなはあれども

(位山は、位階のことを譬へていふ。飛驒の国なる山の名にして、筍の用材を産出せしによりて名あり。下句は高位と下位と階級はあれどもの義。位階に高下の別あれども、踏むべき正道に二つは無しと教へ給へるなり。)『明治天皇御集 巻中』(239~240頁)

國民が、職業の貴賤また、位階の高低に関係なく、自分のそれぞれの持ち場で「まことを尽くしてゐる」それは「神の心に」叶ってゐるだらうと、國民に対する絶大なる「信」をお詠みになってゐます。

一行目から入ります。

[How pleasing in the sight of all] [pleasing]は「その73」に既出、=[giving pleasure :agreeable]=「楽しみを与へる、気持ちの良い」の意。[in the sight of]の主語は神々である。分り易いやうに散文的に書き直して見ませう。[How pleasing it is to see all]となります。

一行目の訳は「全てを見るのは何と気持ちの良いことであらう」となります。

二行目に進みます。

[The gods that guard the land] [The gods]は一行目の[All]と一緒になつて[All the gods]=「全ての神々」の意となります。[that]は関係代名詞。[guard]は「その93」に名詞として既出、=[protect, defend]=「守る」の意。[the land]は「その99」に既出、=「わが国」の意。

二行目の訳は「わが国を守る神々の」となります。明治天皇は[all the gods](すべての神々)をご覧になってゐます。神は目に見えぬ存在ではないことに注目して置くべきでせう。

三行目に進みます。

[Must be the true fidelity] [fidelity]=[faithfulness]=「忠節」の意。散文的に言へば[It must be the true

fidelity]であります。

三行目の訳は「それは本当の忠節であるに違ひない」となります。

四行目に進みます。

[Of this my patriot band !] [Of this]は二行目と併せて[this true fidelity]となつてをります。
[patriot]=[English patriot originally meant “fellow countryman” and derived from Greek patriots “of one’s forefathers”, which in turn came from pater “father”]=[英語の[patriot]は本来“同胞”を意味しギリシャ語の[patriots]から派生した。[patriots]は[patrios]=[自分の祖先の]から出たもので、[patrios]は更に[pater]=[父]から出たもの即ち「愛国者」の意。[band]=[a group of persons united for a common purpose]=[共通の目的のために団結した人々の集まり、紐帯^{ちゅうたい}]の意。[this]=[my patriot band]であります。
[this]と先づ抽象的に示して[my patriot band]と具体的に表現されてゐます。

四行目の訳は「この我が国民の」となります。

「誰が[the true fidelity]を尽すのか」

誰が「まことの忠節」を尽すのでせうか。前線に立つ兵士だけでせうか。御製では「わが國たみのつくすまことは」と下の句で言はれてゐる様に「わが國たみ」即ち国民全体の意でありませう。

「ちはやぶる神の心に」「叶ふ」と言ひ得るやうな「まことを尽す」ことについて、具体的に偲んで見たいと思ひます。参考のために小田村寅二郎先生が書いてをられます文章を読んでしばらく考へて見ませう。『日本思想の系譜(下)』の一〇五に「軍人勅諭」(明治十五年—— 一八八二 —— 一月四日)について解説がなされてゐます。

「(前略) さて、この「軍人勅諭」が他の詔勅と異つてゐる点は、本文そのものが和文をもって記され、かつ平仮名を用ひて、ごくやさしく、かんでふくめるやう、いはば、“対話の姿勢”とでもいふごとき記述の仕方であらうか。また文中、皇軍の歴史、本質から説き起され、軍人の道を諄々と訓諭せられてをる。奉読する者をして自然に厳肅な緊張感にさそはせるとともに、情理豊かな上官の心情をも指摘せられ、生き生きとした御言葉として、天皇の大御心が躍動して迫り来るを覚えさせる。(後略)」(392～393頁)

この『日本思想の系譜(下)』と云ふ書物は、昭和四十六年に時事通信社から出版されてゐました。皆様は「軍人勅諭」と言ふものを実際に読んだり、話しに聞いたことがありますか。私の幼い頃は、祖父や父などはよく暗唱して見せてゐたなじみ深いものではありませんが、敗戦後の学校教育では、軍国主義の元凶とされてゐました。「軍人勅諭」など、戦後教育の完璧と言って良い成果で、目にするも毒であると遠ざけられてゐた文書でありました。アメリカの海軍兵学校に防衛大を卒業後入学した太田文雄学兄(現・防衛大学教授)は、そこには、英訳された海軍兵学校の五省が存在してゐたと言ふから驚きであります。それも占領政策で軍国主義に類するものとして禁止してゐた代物^{しろもの}であります。ところが、現実には、日本では危険であるからと禁止してゐた大和魂と言ふソフトはアメリカで盗用されてゐたやうです。その目的は日本人を骨抜きにする為であつたのですから、アメリカ本国ではチャッカリと利用してゐたのです。

小田村先生は次の様にも言はれてゐます。

「明治以降百年間の日本の政治では、軍人出身者の総理大臣は、決して昭和初期に限つたことではなかつた。しかし、昭和二十年(一九四五)の敗戦に至る約十年間の日本の政治は、「軍部」なるものの勢力によって、過大な政治掌握がなされてしまった。明治天皇が御在世であられたならば、この事態を何とごらんになられたことであらうか。『軍人勅諭』の精神から遠く隔たつてしまつてゐたその軍人らの心情に対しては、烈火のごときお叱りがあつたかも知れない。」明治天皇は軍人が政治に関与するやうになることについて強く御警告を發してをられたのであります。

「日本の敗戦に至る最後の日までこの『勅諭』に忠実であつたのは、当時の政治に関与しなかつた数少ない一部の将校と、多くの名もない下士官、兵卒たちであつた。その人々こそは、敗戦日本にあって、輝かしい将卒であつたと言はねばならない。『勅諭』の精神に一途に生き貫いた名も無き将卒と、『勅諭』を心の拠り所とするこ

とを忘れてしまつてゐた將軍らとを同日に論ずることは、敵に慎まねばならぬことである。」

「勅諭」は日本の國の成り立ちを説いた前文に続き五つの項目からなつてゐます。そこは「一 軍人は忠節を尽すを本分とすべし……」から始まり「世論に惑はず政治に拘はらず只々一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ その操を破りて不覚を取り汚名を受くるなかれ」とあります。忠節を尽すとは軍人が政治に口を出さない、と言ふ一点が守られないならば「凡そ七百年の間の武家政治に戻つて仕舞ふと警告されてゐた」のであります。

「只々一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」日本軍の精強さの秘密がここにあると言つて過言ではないでせう。スローガンとしての「平和」と「基本的人権」思想にドブブリ浸かつてゐる日本人への警告であるのか蔑視であつたのかは分りませんが「死は鴻毛よりも軽しと覚悟」が出来てゐる日本人が一人もゐないことを見抜いてゐたのでありませうか。

小田村先生はまた次のやうに言はれます。

「出世街道を進んだ多くの軍人たちの心情にはすでに、『軍人勅諭』の精神は枯渇してゐたかも知れなかつたからであり、それを証するいくたの実例がみられたからである。それはともかく、いまわれわれ日本国民は、改めてこの『勅諭』を、心静かに拝読し、心中深く味はひ返してみたいものと思ふ。」(三九四頁)

「只々一途に己が本分の忠節を守り」給ふた明治の先達の気概は私達のD.N.Aの中に眠つてゐるに違ひありません。勅語を心静かに拝読し、心中深く味はひ返す時と場所を生み出したいものであります。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○『日本思想の系譜(下)』時事通信社版 昭和46年

○『明治天皇御集 巻中』

尚参考として「螢の光」 二 .つくしのきはみ、みちのおく うみやまとほく、へだつとも そのまごころは、へだてなく ひとつにつくせ、くにのため。

三. 千島のおくも、おきなほも やしまのうちの、まもりなり いたらんくくに、いさをしく つとめよわがせ、つつがなく。(明治14年 小学唱歌)

「おに神も哭かすものは」 [Even the very gods themselves]

誠(明治四十二年)

おに神も
哭かすものは
世の中の
人のこころの
まことなりけり

Even the very gods themselves
Can not but weep to see
My people fight their country's fight
With such fidelity !

参考のために『明治天皇御集 巻下』を引用します。

「四一五頁にも、『人の心の誠なりけり』、『人の心の誠なりけれ』といへる御製二首あり。誠を以て人の根本義とせさせ給へるなり。かつて軍人に下し給へる勅語に於いても五箇条の徳目(忠節、礼儀、武勇、信義、質素)を挙げ給ひ、『さて之を行はんに、一の誠心こそ大切なれ』とて一の誠心を五箇条の精神とし、『心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはへの装飾にて、何の用にかは立つべき。心だに誠あれば、何事も成るものぞかし』。と仰せられたり。」(四八〇頁)

一行目から入ります。

[Even the very gods themselves] [Even]は「その88」に既出=「～でさへ」の意。[the very]=「まさに、まさしく～」の意。[gods]はキリスト教の一神教の[God]と違ひ、多神教の神の場合は複数形で表記する。[themselves]=(不定反照代名詞で)前にある[gods]を強調する。[Even][very][themselves]は、それぞれ[gods]を強調してゐます。一行目の訳は「^{まさ}正しく鬼神でさへも」となります。

私達の生活の中には神と同列に鬼がゐます。例へば、「鬼のみぬ間の洗濯。(When the cat is away, the mice will play.)」「鬼の目にも涙。(It moves even a fiendish(フィーンディッシュ) heart to tears.)」「鬼に金棒である。(It is arming a devil with an iron bar.)」等と鬼が良く出てきます。節分の豆まきでは「福は内、鬼は外。(In with luck ! Out with the demon !)」等が心に浮かんで来ます。鬼とは、邪心を持つ神霊(the Spirit)のやうであります。漢語では「死者の霊」を表し、和語では「荒々しく恐ろしい神」と説明がなされてゐます。柔和・情熱など徳を備へた神霊を和御魂(にぎみたま)と呼ばれ、一方荒く猛き神霊を荒御魂(あらみたま)と呼ばれます。

二行目に進みます。

[Can not but weep to see] [Can not but weep]=[Can not help weeping]=「(頑なに泣くまいとしても)何うしても泣かないではゐられない」の意。[to see]=「・・・を見て」の意。これの目的語は三・四行目にあります。二行目の訳は「何うしても泣かずにはゐられない」となります。

三行目に進みます。

[My people fight their country's fight] [My people]は「日本国民」の意であります。[The people]でも良いところが[My people]となつてゐるのは、親が子に対するやうな愛情の籠もる[my]であります。このやうな[my]は「その1」「その19」に既出。

[fight their country's fight]=[国家の戦いに銃とり戦ふ]の意。

三行目の訳は「我が國民は国家のために戦ふ」となります。「我が国のため」ならば[our country]であるのに、

何故[their country]としたのでせうか。一行目を神が住む天上界と見るならば、三行目は人の住む地上界であります。一行目の神を強調する[themselves]を注目するならば、それを受けた[their (神々の)country]と解されます。斉藤氏は日本と云ふ国家に神国・日本の意味を持たせて英訳したのであらうと考へられます。皆様は如何思はれますか。

四行目に進みます。

[With such fidelity !] [fidelity]は「その100」に既出＝「忠節」の意。四行目の訳は「それ程の忠節を尽して」となります。

「頭韻(alliteration)について」

「国家のために戦ふ」を英語で言へば[fight their country's battles]と通常は表現するところではありますが[fight their country's fight]と[fight(動詞)]の同族目的語[fight]を用いて表現されてゐます。何故でせうか。[fight]の[f音]の重なりが激しい戦ひを連想させその勢ひを四行目の行尾の[fidelity(フィデリティ)]まで貫通させてゐるのでせう。

[such fidelity(それ程の忠節)]は何を引き起こしてゐたか。[The gods can not but to see]=「鬼神をして泣かざるを得ない」程の感動を与へてゐたと言ふのであります。「至誠通天」と言ふ漢語がありますが、この御製で明治天皇は、大和言葉で「わが国民の至誠が鬼神にも通じて慟哭させた」旨をお詠みになられてゐたのであります。

『肉弾——旅順実戦記——』より

この書は、櫻井忠温中尉が旅順攻略戦に参戦しての体験記であります。出版後直ぐに英訳され大隈重信伯爵はアメリカの大統領セオドル・ルーズベルトに寄贈してゐました。ルーズベルトからの返書には「(前略) I have already read portions of the book to my two elder sons, for I feel that the knowledge of the deeds of wonderful heroism so graphically (生き生きと表現された) told by you should be an inspiration to every young man who may ever have to serve is (原文のまま) country in battle.」予は此の書の数章を我が二長児に読み聞かせるが、貴下の実情目睹するかの如くに描写せる驚絶すべき英雄的行為を学ぶは、一朝有事の時に際して、我国家の為に奉公すべき義務ある一般青年の精神を鼓舞すべきものたるを感ず。(後略) ルーズベルト大統領が自分の二人の息子に『肉弾』の英訳の数章を読んで聞かせてやったのは、生き生きと表現された英雄的行為を学ばせんが為であったやうです。(但し、ルーズベルト氏は大統領職と言ふ多忙な中で此の返書を書いたのでせう。[every young man who may ever have to serve is country in battle.][serve(動詞) is(動詞)]とありますが、英文の構造上動詞が、この場合二つ並ぶことがあり得ません。[serve](奉仕する)の目的語として[country in battle]が働いてゐるやうです。ならば[every young man]の所有格の[his]を付け[his country in battle](戦闘中の我が国)とするべきでせう。拗って[is]は[his]の綴りミスであると思へられます。)

『肉弾』は全篇が、たとへ鬼神でさへも涙せずには読めないところばかりであります。「第二十六 肉弾又肉弾」を読んで見ませう。

[The bodies of the brave dead built hill upon hill, their blood made streams in the valleys.](勇士の死屍は山上更に山を築き、戦士の碧血は凹処に川を流す。)

[A correspondent of the London "Standard" has said truly : "The war-cry of the Japanese Army pierced the hearts of the Russian." But, however much our glittering bayonets (銃剣) and shouting voices intimidated (おびえさせる) the enemy, I cannot help weeping at the recollection of that assault (攻撃).] (実)にやスタンダードの一記者は「日本軍の喊声は露兵の心臓を貫けり、其の腸を剔れり」と言った。さり乍ら此の剣先の閃きと喊声の響きとが、那計り敵胆を寒からしめたにもせよ、予は彼時を追憶して泣かざるを得ない。)

白人に対する黄色人種の世界では、16世紀以来最初の戦ひである日露戦争は、全世界が注目するところでありました。「百年かかっても203高地の堅城は抜けないであらう」と予期して観戦してゐる従軍記者達に、日

本軍は「八ヶ月で落として見せた」のであります。日本側では「八ヶ月も要して」でありましたが、西洋人の目からは「僅か八ヶ月であった」のです。[Mr. George Kennan, the war-correspondent of the "Outlook", described this siege as representing the shriek of the lowest hell on this earthly abode of ours. ([Outlook]の従軍記者ケナン氏は、この攻撃戦を評して阿鼻叫喚の地獄をこの世に現出したものだと云った。)平常心では見てゐられないような大悲劇を演じたのが我等が先達であったのでせう。[I cannot help weeping at the recollection of that assault(攻撃).] [I]は私だけではなくて鬼神でさえも泣かざるを得なかった、と云ふことになるのではないでせうか。

「先に重傷を負ひたる松岡大尉は、切断せられたる大腿より、血は滝の如くに迸り出で、その内呼吸次第次第に細り、大尉も自ら命の至れるを知って、懐にせる機密地図を裂き、鉄条網に罹つたままに、天晴れとは云ひながらも、無惨なる最期を遂げた。而して大尉を収容せんとし、往きし者も往きし者も皆帰らず、共に大尉の傍らに寄り添ひて、永遠とこしえに眠った。」(207頁)(日本語版)

砲弾に中たり大腿が吹き飛ばされたのでせう。出血が激しく呼吸が次第に細り意識が朦朧として来たに違ひありません。[With such fidelity!](それ程の忠節を尽して)松岡大尉がしたことは「懐にせる機密地図を裂き、」味方に不利となるやうな死に方はしなかった。

[fidelity]には[duty(義務感)]だけでなく[pride(誇り)]がありそこに、「無惨なる最期を遂げた」けれども日本男児としての[aesthetics(美学)]があったのであります。英文で読んで見ませう。

[All who went to fetch him were also killed and went to their eternal sleep side by side with the brave captain.] 大尉を救い出しに往けば敵の機関銃の銃弾に中たり死ぬと分つてゐても次から次に彼らは往き、勇敢な大尉と並んで永遠の眠りについた。このやうな光景を[the shriek of the lowest hell(阿鼻叫喚)]とは云はないのではありませんか。上官の救出に往く一人一人の兵隊さんは、自分の意思と責任感で動いてゐるのですから[the shriek](地獄の底の悲鳴)ではなくて「雄叫び」=[the war cry][the courageous shout]であります。耳を澄まし心の目を開けば凄まじいその情景は見え、その雄叫びも聞こえるではありませんか。

[This captain's glorious death was later reported to the Emperor through His Majesty's military chamberlain.](この大尉の壮烈なる最期は、その後、侍従武官を経て奏上せらるるの光栄を荷つた。)

明治天皇はお聞きになられてゐたのであります。

最後に日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○『明治天皇御集 巻下』

○『HUMAN BULLETS A SOLDIER'S STORY OF PORT ARTHUR』

「國たみはひとつ心に」 [My folk at call of duty have]

神祇(明治三十七年)
 國たみは
 ひとつ心に
 まもりけり
 遠つみおやの
 神のをしへを

My folk at call of duty have
 Obey'd with one accord
 Of my divine ancestor great
 The sage and hallow'd word

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「わが國民が、皇祖皇宗の御遺訓を守りて、忠孝の心ふかきを嘉みし給へるなり」

一行目から入ります。

[My folk at call of duty have] [folk]は「その1, 39, 86」に既出。=「國たみ」の意。[call]=[a request or command to come or assemble]=「来たり集まったりさせる要請または命令」の意で熟語として[at call]=「請求次第」、[at one's call]=「人が召集すれば」と使われます。[duty]=「(人たるものの)為すべき事、(道徳、法律上の)義務」の意。例へば「國への忠節」は英語では[duty to one's sovereign or country]であります。音節から見るとこの行は、[My(弱) folk(強)/ at(弱) call(強)/ of(弱) du(強)/ ty(弱) have(強)] 弱強調(iambic)の4詩脚(Tetra-meter)でありますから行尾に[have]が置いてあります。

一行目の訳は「義務の呼びかけにより國たみは」となります。

二行目に進みます。

[Obey'd with one accord] [obey]=[to follow the commands or guidance of]=「～の命令または指導に従ふ」の意。[have obeyed]で「Perfect Tense」(完了形)となつてゐます。[accord]=[agreement, harmony]=「同意、一致」の意。

二行目の訳は「心を一つにして従つて来た」となります。

三、四行目に進みます。

[Of my divine ancestor great] [divine]は「神聖な」の意。[ancestor]は「その3」に既出、=[forefather]=「祖先」の意。[great]=[eminent, important]=「卓越した、重要な」の意。一語一語の意味を調べてもこの行の訳は取れませんから意識して平易な英文に書き直しませう。[The people have their faith that the emperor is divine and great]となります。

三、四行目の訳は「神聖にして且つ偉大なわが父祖の教へに」となります。

「遠つみおやの神のをしへ」について

音韻からみれば、二行目の[with one accord]と四行目の行尾 [The sage and hallowed word]は脚韻(rhyme)となつてゐます。加へて意味上からも、「賢く神聖なる言葉」に「心を合はせて」國民は[have obeyed at call of duty](=忠節を尽して従つて来ました。)となつてゐることを読みとることが出来ます。

[The sage and hallowed word]これは、遠い昔に私達を回帰させる神話的な言葉であると想像されるでせ

う。

國の土台を示す礎石(the foundation stone)に当る言葉とはどんな言葉なのでせうか。明治の先達の心には響き合ふやうに[Indeed, just so](成程さうだ)と言へたのでせう。[with one accord]にはそのやうなニュアンスがあります。

さて、皆様は「日本最初の天皇は何方であったか?」「凡そいつ頃のことであったか?」ご存知ですか。ここで『The Story of Japan』の[5. The Age of the Gods I](5. 神代)を読んでみませう。

詳しく註を附してありますから訳は各自で行って下さい。

- ①[It was about two thousand and some decades (数十年) ago when Emperor Jinmu founded (建設された) the Japanese nation.]
- ②[At that time the Japanese people united under him (神武天皇を中心として団結した), and moved towards higher ideals (高い理想に向かって踏み出した).]
- ③[The Japanese people existed before that.]
- ④[The house of Emperor Jinmu, which became the imperial house, (つまり皇室のご先祖) must have had the most splendid power (最も光輝ある権威) and genealogy (家柄).]

皇室には、何故最も光輝ある権威があるのでせうか? 次を読んで見ませう。

- ①[The Japanese myth starts as follows (次の通り). In the beginning of heaven and earth, which was the time of creation of the universe, (即ち世界の創造の時に) the Gods who appeared first was :
- ②[Ame no Minakanushi no Kami (Heavenly Center Lord Deity (主神) according to Record of Ancient Matters(Kojiki) ;
- ③[Kuni no Tokotachi no Mikoto (Earth Eternal Standing Deity) according to Chronicles of Japan (Nihon Shoki) ;
- ④[Same, according to One Book (A)]
- ⑤[Umashi Ashikabi Hikoji no Mikoto (Excellent Reed Shoots Male Deity うましあしかびひこじのみこと 可美葦牙彦舅尊) according to One Book (B)
Same, according to One book (C)
- ⑥[Kuni no Tokotachi no Mikoto (くにのとこたちのみこと 國常立尊) according to One Book (D)
Same, according to one Book (E)
- ⑦[Ama no Tokotachi no Mikoto (Heaven Eternal Standing Diety[天常立尊]) according to One Book (F)
- ⑧[The name (御名前) and the order of appearance (出現の順序) are different, but they are all Gods.] (此处が一番重要なポイントであると思はれる) (註・小野)
- ⑨[This point is extremely important, (何故かと言へば) involving the question of whether we evolved from lower forms of animals, or primitive men. (動物から人間が進化したと言ふ論)
- ⑩[Or perhaps we did not develop, but degenerated (墮落した、アダムとイヴの神話)
- ⑪[Or did we descend from the Gods? Such views of origins (そのやうな出発点の相違) bear heavily on (～に重大な相違を与へる) the religion, morals, and politics of a people.](P19～P20)

私達の國には数種類の神話に関する書物がありますが、私達の祖先の初めは「神」であったと言ふ共通点がある。この事が一番重要なポイントであると言ふ指摘に注目すべきでせう。

あなたは、先祖が何だと思ひますか?

- ①猿である。
- ②原始人である。ネアンデルタールか北京原人か。
- ③アダムとイヴである。

上のどれかであると思はされてみませんか。

辿れるところまで記入して見て下さい。自分→父母

→祖父母

→曾祖父母

→曾曾祖父母

→曾曾曾祖父母

江戸時代→戦国時代→…奈良時代…大和朝廷の時代…遙か遠くこの先のあなたの先祖様は①猿である。②原始人である。ネアンデルタールか北京原人か。③アダムとイヴである。の何れかであると仰ぎ見る事が出来ますか。宗教的(religion)道徳的(moral)に上の三つよりも日本の神話の神々につながる自分をアイデンティティ(Identity)として捉へる方が心にも身にもしっくり来るのではないでせうか。此が日本人としての縦糸であると私には思はれます。あなたの縦糸が、神々の時代から[Eternal Line](永久の糸)として一度ナリとも切れてみたら、今のあなたの存在はあり得ますか。あなたの生命の尊さを痛感すると同時に子から孫へつなく責任も自覚すべきではありませんか。自問してください。

「遠つみおやの神のをしへ」を聞きそして守って来た自分たちの祖先がゐたから今日の私が、確かに生きてゐる。その有り難さを御製からしみじみと私は感じました。

最後に二度日英の御製を拝誦ませう。

〈参考文献〉

○『明治天皇御集 巻中』

○『The Story of Japan』Vol.I SEISEIKIKAKU in Japan

「しきしまの大和心の」 [Yamato's manhood grand that]

心(明治三十七年)
しきしまの
大和心の
ををしさは
ことある時ぞ
あらはれにける

Yamato's manhood grand that dwells
In Shikishima's land
Hath burst upon the wond'ring view,
When troublous times demand.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「平和の時には、穏やかに静かなること春の海のごときも、いざとなれば、その本来の雄々しき性を現はし来る、これぞやまと心との御意。」(225頁)

一行目から入ります。

[Yamato's manhood grand that dwells] [Yamato's]はそのまま英語にしてあります。=[Japanese]=「日本の、大和の」の意、例へば「大和心(魂)」を英語で言へば[the Japanese spirit, the soul of Japan]であります。[manhood]=[manly qualities : courage]=「男らしい特質: 勇気」の意。女性の場合は[ladyhood, ladyship]であります。[grand]=[impressive, stately]=「印象的な、荘厳な」の意。[that]は関係代名詞で[Yamato's manhood]を先行詞に取ります。[dwells]は音節の関係で一行目に置いてあります。

一行目の訳は「しきしまの大地に根を下した、偉大な大和心のおおしさは」となります。

二行目に進みます。

[In Shikishima's land] 意味上からは[dwells in]=「～に根を下ろす」の意。[Shikishima](=日本国の別名)は翻訳せずにそのまま使っております。例へば、「敷島の道」を強いて英語で言ふならば[the art of Japanese poetry]であります。[land]は「その58, 99」に既出「國」の意。

二行目の訳は「敷島の國・日本に根を下した」となります。

三行目に進みます。

[Hath burst upon the wond'ring view] [Hath]は「古体、詩文で[have]の第三人称単数現在直説法」=[has]。[burst upon]=[to break open (as by an explosion from within)]=「(内部からの爆発などによって)破れて開く、に変ずる」の意。[wond'ring]は[wondering]が縮約されたもので=「(見て)驚くべき、感服する」の意。主部は一・二行目に当たります。

三行目の訳は「感服すべき光景となって現はれる」となります。

四行目に進みます。

[When troublous times demand.] [troublous]は古語で=[troubled]=「波立つ」の意。[troublous times]は熟語で=「乱世」の意。[demand]=[to call for, require]=「要求する、急(究)迫する」の意。

四行目の訳は「乱れた時代の求めに応じて時代が急迫すれば」となります。

「状況と時代を受け止める力について」

戦後、「個人主義(individualism)」と言ふ思想(宗教的なバックボーンが存在しない國では利己主義となる)が、私達の生活に行き渡り自分や恋人同士が快適で楽しければ他人の不幸など顧みる必要はない。そんなことは要らぬお節介だと言った病んだ(sentimental)空気が充満してゐます。

昭和四十年代の末のこと、私の兄は東京で大学院に行つてゐました。あの頃友達の自動車に同乗して交通事故に遭ひました。あの時の体験談を聞いたことが今日でも忘れられず、私の生き方に問題提起をして来ます。衝突した車の助手席で血だらけで蹲^{つずくま}つて、今か今かと救急車の来るのを待ってゐたさうです。公衆浴場からの帰りの人達が何人も通りかかりました。中には車をのぞきこんで「この人は動いてないから死んでるんじゃない。」などと平気で話しながらクールに立ち去る婦人達が何人もゐたさうです。耳にした兄は、時間が止まってゐるやうであり、救急車が来ないのではないかと不安にかられたさうです。自分が立ち上がつて公衆電話に連絡に行かうか、と言ふ衝動に何度も駆られてゐたさうです。一人中年らしい声の男性が近寄り兄の肩にそつと手をかけてくれました。それから彼は、自分のタオルを血だらけの額に巻き付けて瀕死の兄の不安をうち消すべく「救急車を呼んだぞ。頑張れ!」と言つてくれたさうです。そのしぐさから恐らく戦場の体験者だつたと思はれます。

この人は、日頃は優しく親切な方であり教育勅語に謳はれてゐる「一旦緩急あれば義勇公に奉ずる」大和心の持ち主であつたのでせう。後に、看護婦さんの話によれば救急車を待ってゐることが出来ないで動き出す人はほとんど出血多量で取り返しがつかなく死んでしまふ人が多いさうであります。

私達の思春期には、口舌は普通の人であるが行動において何かしら威厳のある軍隊経験者が数多くをられました。明日の命を天に任せて生死の間にあつて、忠節を尽した元兵隊さんは、私達後輩に取り「人としてのあるべき道」を口先ではなく後ろ姿で教へてくれた先覚者でありました。兄は一人の軍隊経験者が通りかかった幸運を、頭から顔半分まで包帯をぐるぐる巻にして眼は見えず口と鼻だけを空けた状態で静かに病室のベッドで語りました。あの夕べ個人主義に潜む利己主義と言ふ魔物(Satan)に取り憑かれてゐる人達ばかりであつたならば、兄は出血多量で死んでゐたに違ひありません。

以前女の生徒(A)がセーラー服に血を付けて遅刻してきました。「何故遅れたのか」と問ひかけると「一緒に自転車に来てゐましたB子ちゃんがダンプと接触事故にあつたので、警察に連絡し、自分のハンカチで血を拭いてあげました。それでも血が止まらないので、弁当のハンカチを使って血が吹き出す傷口を救急車が来るまで抑えてゐました。」と報告しました。

私が教室で話してゐた上記の兄の話を、彼女は自分なりの受け止めて躊躇せず^くに実行して繰れたことが、嬉しいことに後で分りました。クラスの生徒には「A子は皆勤賞を逃したが、それ以上に人助けのために遅刻をした。一概に遅刻は悪いばかりではない良い遅刻もあるのだ。」と話したことでした。

「誰が先覚者になるのか?」

教育とは「先知をして後知を覚さしめ、先覚をして後覚を覚さしむ。」尊い事業であります。教壇に立つ者は勿論のこと親が子に、先輩が後輩に上司が部下を「覚さしむ」べきが国家百年のための教育なのであります。

「松陰先生は次の一節を「反復誦読」せよと言はれます。

「天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覚さしめ、先覚をして後覚を覚さしむ。予は天民の先覚者なり。予將に斯の民を覚さんとするなり。予之を覚すに非ずして誰ぞや。」『講孟節記上』(457頁)

天と我との関係を孟子が喝破してゐるのであります。知識や技術の切り売りをするソフィストではだめだ。「諭す(admonish)」ことをして頭で知識として「理解(understand)」させるだけでは、実行へと弾みがつかず、一文の価値もない。凡そ教育とは言へないものなのであります。「自覚(self-awakening)」して、「実行(practice)」へと上の御製にありますやうに「ほとばしる(Hath burst upon)」べきであると言はれてゐるのです。

松陰先生の言葉を読んでみませう。

「此の一節、反復誦読、以て志を励すべし。」読書百遍意自ずから通ず、とよく云はれますが、孟子のこの一節を、松陰先生は、声に出して何度も読み、いつの間にか記憶して血肉と成されてゐたのであります。

「余が愚劣、事に於て一も知覚する所なし。何ぞ『天民の先覚者』を以て自ら居るべけんや。」(私は愚劣なものであって、少しも目覚めることがない。とても天から命じられた先覚者を以て任ずることはできない。)さう言ふ内面を凝視すれば、謙虚であるつもりであるが、内実は決してさうではない。これは、私達の日常生活を顧りみますと良くあることであります。このやうな姿勢に対して、松陰先生は厳しい叱声を浴びせられます。他人に言はれてゐるのでなく私に言はれてゐるやうに聞くべきでせう。

次を読んでみませう。「其の狂妄自ら揣らざるも亦甚し。然れども茲に説あり。知ると云ふも亦唯志のみ。苟も能く伊尹の志を以て自ら信ぜば、知覚に於て亦自ら得る所あらん。然らずして無知・無覚を以て徒に自ら退避する者は、自棄の甚しきなり。」(458頁)

「狂妄」とは「気持ちばかり大きくて実行が伴はず無遠慮であること」。「狂妄」になってゐないか「自ら揣らざるも」自分自身に向かって推し量ることがないことが甚だしい、と言はれる。

「然れども茲に説あり。」しかしながら、この点に関して私なりの見解がある。「知ると云ふも亦唯志のみ。」ここに「先知・後知」と言ふ「知」とは、他ならぬ「志」のことを云つてゐるのである。「苟も能く伊尹の志を以て自ら信ぜば、」もしも伊尹の志こそ自己の志であると信ずるならば、「知覚に於て亦自ら得る所あらん。」知覚、即ち目覚めると言ふ上に於ても、自づから自得するところがあるだらう。

「志」とは鋭敏に研ぎ澄ませてゐないと鈍るものであります。志を奮い立たせる古典の一節を松陰先生は「反復」し「拝誦読」してをられました。私は加へて御製の拝誦をお薦めします。

再度英訳御製を味はつてみませう。

「堂々たる大和の丈夫たることは」

「敷島の國・日本に留まる」

「感服すべき光景に変わる」

「波立つ時代が急迫すれば」

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○『講孟箴記』(上) 講談社学術文庫

○『明治天皇御集 巻中』

○『日本史から見た日本人 古代編 「日本らしさ」の源流』渡部昇一 祥伝社 平成元年

平成十九年三月三十日(金) 退職辞令を受けし日に

「つはものとともに勇みて」 [The chargers like their riders]

つはもの
 とともに勇みて
 すすむてふ
 駒のこころも
 人におくれじ

The chargers like their riders nerv'd
 Dash forward at the foe ;
 The brute, too, hath a genial heart
 That can with ardour glow !

この御製は私が持ってをりますどの御製集にも掲載されてゐませんが、明治三十六年の御製に「愛馬」を詠まれたものがあります。(『明治天皇御集 巻上』130頁) 参考のために引用します。

をりにふれて

つはものと共に野山をわけてみむ手馴の駒にくらをおかせて

(つはものは剛者の義にして、ここに軍人をのたまへり、手馴の駒は御料の乗馬)

明治天皇は幼い頃より、心身のご鍛錬を兼ねて乗馬に親しんでをられたことは人口に膾炙してゐますが、実際はもっと深いご配慮があったことは意外と皆に知られてゐないやうです。『明治大帝』の中に「牧畜の御奨励」の章があります。日本で牧畜事業を盛んにするための人材養成は、実に明治十八年から始められてゐたのです。宮中顧問官の新山莊輔の文章を読んで見ますせう。

「私は、明治十八年、宮内省からヨーロッパに於ける牧畜の視察研究を命ぜられ、明治二十一年帰朝以来、大正十一年に至るまで、実に三十有余年の間、下総の三里塚・岩手県の外山・北海道の馬匹^{ほひつ}奨励は勿論、一般牧畜について、明治大帝が、いかに御宸念^{ごしんねん}あらせられたかといふことは、略ぼ窺ひ知る所である。」(395頁)

巷間では、日本の天皇は、革新の対極に位置付けられ保守の権化であるかのやうな誤ったイメージがあります。それはコインで言ふならば、その片面しか見てゐないことになります。実は日本を改革し革新する先頭に立たれ、産業の又、あらゆる分野の人材育成に「いかに御宸念^{ごしんねん}あらせられたかといふこと」が見落とされてゐるのであります。

一行目から入ります。

[The chargers like their riders nerv' d] [charger]=[a cavalry horse]=[騎兵の馬、軍馬]の意。[like their riders]=[騎手と同じやうに]の意。[nerv' d]=[nerved], [nerve]=[to give strength or courage to]=[～に力または勇気を与へる]の意。[nerv' d]は主語である[The chargers]を修飾してゐます。

一行目の訳は「騎手とおなじやうに勇む軍馬は」となります。

二行目に進みます。

[Dash forward at the foe ;] [dash]=[to move with sudden speed]=[急に早く動く、突進する]の意。一行目の[charge(進撃する)]が[dash]に変化したところに詩的な醍醐味があります。[forward]=[前方へ]。[foe]は雅語であり=[enemy]=[敵]の意。

二行目の訳は「敵に向かって突進する」となります。

三行目に進みます。

[The brute, too, hath a genial heart] [brute]=[beast]=[けだもの]である。[hath]=[has]。[genial]=[mild, friendly, kind, gracious]=[柔和で、敵意が無く、心の優しい、上品な]性質を持つ。[The brute](=荒々しい)は外面的に見た姿であり、その内面が[a genial heart](=優しい)であります。そのコントラストが見事に表現されてゐます。馬は怖がって怖ず怖ず近づくと歯を剥いて噛みつき後ろから近づくと後ろ足で蹴飛ばします。ところが、優しい心を念波で出せるやうになると馬は人の気持ちをも読み取り近づいても大丈夫です。三行目の訳は「その獣は、亦、上品な心を有す」となります。

四行目に進みます。

[That can with ardour glow !] [ardour]=[warm feeling, energy, intensity, loyalty, passion]=[温かい、精力的、強烈な、忠誠心があり、熱誠]を有する。二行目に行尾の[foe]と脚韻を踏むやうに[glow]が行尾に来てゐます。散文的には[That can glow with ardour !]となります。[glow with ardour]は「白熱して輝く」の意。

四行目の訳は「忠誠心に輝く」となります。

ここでは軍馬が詠まれてゐますが、日本人は、牛や馬に対しては、家族の一員であると言った特別な感情を抱いてゐたやうです。昭和三十年代の前半までこの農家にも牛や馬が飼はれてゐまして、農作業の主役として活躍してゐました。現代の人は犬や猫を家庭で飼って、癒しを受けてゐますが、国民感情の底流には同じやうなもの——[genial heart (優しい心)]の通ひ合ひ——が流れてゐるに違ひありません。私は、若い頃から失敗ばかりしてゐますから偉さうなことは言へませんが、動物の調教は人の教育とも通じ合ふ——中庸を得た間合ひ[the golden tempo]——がありさうです。皆様は如何思はれますか。

「伯楽と千里の名馬」

韓愈の『雑説』にあります有名な「千里の名馬はあれども一人の伯楽はなし」が思ひ出されます。「世に伯楽有り、然る後に千里の馬有り。(世有伯楽、然後有千里馬。)

千里の馬は常に有れど、伯楽は常に有らず。(千里馬常有、而伯楽不常有。)

これは馬の話だけに留まらず有能な人材はいつの時代にもまた何処の世界にも隠れてゐるのにも拘はらず、その人材を用ゐて腕を存分に振はせるだけの眼力を備へた人物が少ないと言ふ喩へてありませう。

若い頃、上司が「人材がゐないから仕事が巧く行かない。」と愚痴を零すのを酒の座で何度も聞きました。心の中でこの方は、一級の人物ではないなと思つたものです。教師になると担任を持ちますが、「生徒の質が低下した。」と職員室で嘆く先生達の談話の中には加はりませんでした。生まれたときから千里の馬なんてゐる筈がない。「彼は昨日馬に蹴られて怪我をした。」を英語で言へば[He was kicked by a horse yesterday and got hurt.]となります。この文章の「馬」を「生徒」に置き換へることも教育現場では、覚悟すべきでせう。「癖有る馬にも乗り手有り」とか「蹴る馬も乗り手次第」と言ふ昔からの格言が私の内面から囁きかけるから「あの生徒は手が付けられない」などと云ふ茶飲み話に乗って行けなかつたので有ります。

「千里の名馬となるか塀の中に墜ちるか——教育の醍醐味」

嘗て、中学校の時から名うての悪ガキで頭も良いし所謂使ひ物になると言ふことで、近くの暴力団(gangs)からスカウトされてゐた生徒が入学し私のクラスに入って来たことがありました。こんな話は秘して置くべきかもしれませんが、目まぐるしく時代が変化してゐるやうで思春期の子供の内実は、今も昔も本質的には変らない事実談として聞いて頂きたい。

私は独身時代であつたから母に頼んで、我が家に一年間預かって指導することにしました。特別なことをしてゐると言ふ気持ちはなく教育者として当然のことだと言ふ思ひのほうが強かつたと思ひます。この生徒は三年後には、立派に成長して警察官となりました。現在は「警視正」として後身の警察官の指導に勤めてゐます。何もこれは自慢話ではなく当時はその生徒とは気が合ひ楽しく過ごしたものです。

世にはマスメディアを通して悲惨な事件があれてもかこれでもかとニュースを賑はしてゐます。所がこの種

の体験談が、世に余りにも少ないから披露したところです。教育は「家庭の教育力が下がった」とか「あの生徒は乱暴で手が付けられない」とか外野から云々するやうな一般論では駄目であると、私は思ひます。家庭でまた学校でまた職場で、自分に出来る精一杯のことに勤めればそれで良いのではないかと私は思ふ次第です。皆様も自分の持ち場で精一杯やってゐれば、教育評論家になる暇は無いでせう。本当の教育者は国民の耳目に触れないところで「縁の下の力持ち(to do thankless work)」として、人に感謝されることもなく黙々と自分の役割を勤めてゐるのです。此処に視点を定めると、上の御製もより一層、深く味はへるに違ひありません。最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

- 韓愈『雑説』
- 『明治大帝』

「たたかひのいとまある日は」 [Whene'er he rests from]

たたかひの
いとまある日は
いくさ人
手馴れの駒を
いつくしむらむ

Whene'er he rests from battle's toil,
The man of war will feed
And tend with tender care and soft
His favorite war steed.

この御製は私の所有してゐますとの御製集にも掲載されてゐません。前回に引き続いて「牧畜の御奨励」の先の方を読んで見ます。

「馬匹の御奨励について申せば一御在世中数千円、或は数万円を投じて、外国の名馬をご購入になつたことも屢々あった。又、フランス大統領、ドイツ及びトルコの帝室から名馬を贈呈されたこともある。殊にトルコは、同国の汽船ノルマントル号が沈没したとき、非常に我が国の世話になつたといふので、帝室から名馬二頭を明治大帝に献上されたのであった。」

此処を読みますと嘸や宮城内には世界の名馬が沢山ゐただらうなと想像されますが、

「名馬といふ名馬は、悉く牧場に御下げになり、良種の繁殖に資せられた。」とありますから「軍馬育成の御奨励」に勤められたことが窺はれます。歴史上どの國の皇帝がこのやうな施策を実施したでせうか？ ご存知の方は教へて戴きたいものです。(『明治大帝』大日本雄弁会講談社 昭和2年版404～405頁)

この御製は、多分日露戦争が戦はれてゐました明治三十七年の御作であると思はれます。例へば一作戦が遂行されてゐるならば、座って食事を取る暇もなかつたでしょう。だが、次の作戦へ移行する間などは、暫時息を付く間があつたこととせう。其処の時点を明治天皇は思ひ遣られてゐるのであります。「弾の雨降る下を馬と共に越えた」後は「いくさ人と愛馬」は如何に過ぎしてゐるだらうか？ 生死を共にする「手馴れの駒」の手入れをしてゐることだらう。泥水と汗で汚れた愛馬にブラシをかけて毛並みを整へてやり「いつくしん」であるに違ひないと御目にありありと思ひ描いてをられるのでせう。

一行目から入ります。

[Whene'er he rests from battle's toil,] [Whene'er]は音節の縮約であり=[Whenever]=[at whatever time]=「どんなときでも」の意。[rest]=[to refrain from work or activity]=「仕事又は活動を止める」の意。[battle]=[fighting]=「交戦」。[toil]=「(古)たたかひ」の意。

一行目の訳は「交戦の労苦をやすめる時はいつも」となります。

二行目に進みます。

[The man of war will feed] [The man of war]=「いくさ人」の意。[will]=「～する習性がある」。[feed]=[to give food]=「餌(飼葉)を与へる」の意。

二行目の訳は「いくさ人は飼葉を与へてゐることだらう」となります。

三行目に進みます。

[And tend with tender care and soft] [tend]=[to take care of]=「～の世話をする」の意。[with

care]=[carefully]=「注意深く」、[with soft]=[softly]=「優しく」の意。[tender]=[loving]=「情愛深い」の意。三行目の訳は「優しい愛情を込め注意深く世話をする」となります。

四行目に進みます。

[His favourite war steed.] [favourite]は「その76」に既出＝「お気に入りの」。[war steed]は前回の[The chargers](軍馬)と同意です。四行目の訳は「彼のお気に入りの軍馬を」となります。

「頭韻(alliteration)の効果」

一行目の[battle's toil(交戦の労苦)]の[t]音は三行目の[tend with tender care]の[t]音と響き合ひます。意味上からも[toil(=労苦)][tend(=世話)][tender(=優しさ)]が調和して人生の真実を美しく織りなす表現となっていることが分ります。

また[soft]と[steed]が頭韻を成してゐます。御製の「たたかひ」の「た」と「手馴れ」の「た」、また「いとま」の「い」、「いくさ人」の「い」そして「いつくしむ」の「い」が頭韻であることを英詩の上に反映されたのだと思はれます。

「乗馬と明治天皇」

明治時代には、馬が皇居内に二百頭ぐらゐる御馬車用にまたは御乗馬用に使用されてゐたやうです。五、六年御使用になると、民間の馬匹組合、又は県庁に御下賜になり、其の種の馬の繁殖方は地方地方に依じて御奨励になつてゐた様です。補ひは博覧会に出品された中で一等賞・二等賞になつたものをその都度お買ひあげになるだけでなく、更に「その他に各県のを一頭づつ買ひ上げよ」と御沙汰してをられたやうです。『明治天皇紀 卷六』に拠れば、明治十六年には年間で「内庭及び馬場に於て乗馬あらせらるること五十一回」とあります。明治十七年には「御乗馬の概況」として「乗馬あらせらるること総じて八十八回、前年より多きこと三十六回なり」とあります。御乗馬の時間は「午後三・四時に始まり、六・七時に終る。」(158頁)と書いてありますから一度に三・四時間ほど御乗りになられたのです。ご乗馬の時間の長さからして、唯単に趣味と云ふことでは説明できない鍛錬的な面があるやうです。

明治十七年の八月には「乗馬飼養令」が制定されてゐました。

「一日 乗馬飼養令を制定し、戦時若しくは事変に際し、軍用に供給するの義務を負はしむ、月俸百円より三百円に至る者一頭とし、以上百円毎に一頭を増加するを以て定則とす」(271頁)

ここから将来の「戦時若しくは事変」に対する布石として「乗馬飼養令」が制定されてゐたことが分ります。「千里の道も足下から」の格言の通りに、布石が打たれてゐたやうです。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

○『明治天皇紀 卷六』

○『明治大帝』大日本雄弁会講談社 昭和2年版

「駒に乗るわざはいくばく」 [Although the rider be as apt]

駒にのる
 わざはいくばく
 進むとも
 つまづくことを
 かへりみよかし

Although the rider be as apt
 And skilful as he may,
 Let him beware ! No steed but will
 Stumble once in a way.

「駒にのるわざ」とは乗馬の技術のことです。その技術が「いくばく」どれほど進歩していても相手である「ものを言はない馬」の気持ちや馬および自らの体調や地形を計り損ねて事故を招くことが無いとは決して言へない。翼翼注意を払って欲しいものである、とお詠みにいられてゐます。何か計画を立て一歩を踏み出すことが私達には良くありますが、そのやうな際にこの御製を思ひ浮かべると慎重な上にも慎重になるべく、心にゆとりを生み出すことが可能になるのではないでせうか。

さて、動物の気持ちや心を知ることが成長して多くの人に接する際に、相手の心を細やかに知ることの素養となつてと言ふ観点から、或いは責任感と優しい心を育むために西欧の家庭教育では子供に何か動物の世話をさせたり、特に英国の貴族達は、馬術の習得を子供の時から家庭教育の一環としてさせてゐることはご存知の通りです。

三井甲之著『明治天皇御集研究』(國文研叢書 18)の十八「自然観賞と表現技巧——その三——」があります。その中に「馬」について詠まれた御製の解説があります。読んで見ませう。

「馬

のる人の心をはやくする駒はものいふよりもあはれなりけり(明治三十五年)

論理的整頓に堪へぬものは『人の心』である。動物すらもこの人の心を知るのである。しかもそのころを、分析的言語によっていひあらはし得ぬのであるから、感情さながらの身振的表出は、そこに芸術的純真と自然とをもつて人の心にうつたふるのである。」(158頁)

「論理的整頓に堪へぬものは『人の心』である。動物すらもこの人の心を知るのである。」ものが言へない動物の方が主人の心を知つてゐる場合があると言はれるのです。動物の気持ちが分り、心がお互ひに通ひ合ふ。ものが言へない動物であるが故に一層、対象に「あはれなりけり」と皆様も感じられたご体験はあるでせう。その一瞬の感動を見逃さずに明治天皇は三十一文字に詩的に表現されてゐるのです。

「論理的」に「整頓」された表現こそが価値があると一般には理解されてゐますが、それは一面の真理でしかないのです。例へば、登校拒否症に陥る前に何度もその子供は、訴へかけてゐたに違ひないのです。或いは又、少年が非行に走り犯罪へと手を染める前に、その『人の心』をしる大人が近くにゐなくて犯罪者へととなつてしまつた少年が何人もゐるでせう。「それは現代日本社会が悪いからだ」と、他者を攻めるだけで思考をストップさせて仕舞へば終りではないでせうか。私達一人一人が『人の心』に手をさしのべて上げられる人でありたいと思ひます。私はそのやうに『人の心』を知る人が一人でも増えればと言ふ願ひを込め生きて来ました。

ところで、一挙に全体を救ふ妙策などは、一体あるのでせうか。あればよいと思ひます。だがそんな妙案な

どあるはづはなく、疑って掛かった方が良いでせう。ベストセラーが最高に良い本と思ひ込まされ何度購入したことか。視聴率の高さとテレビの番組の内容とは、あまりにも相関関係がないのが現実ではありませんか。総理大臣の支持率が大きくクローズアップされると、実際に会ったこともないのにあの人は良いとか駄目だとか、国民の心に強い呪縛力を与へてゐます。高が二千人程から取ったアンケートにどれ程の信憑性があるのか、その程度のデータに振り回されてゐはしないか。

ところが、「一人出家すれば魔宮皆同ず」と言ふ諺があります。私達の足下から、世の流行に流されないで不易にして清新な一波を送り出す。そんな一人になりたい。私達一人一人がなれると自覚すべきであり、他人にばかり求めてはならないでせう。志を立てたならば挫けることなくどこまでも信じて行ける自己を確立し保持したいものではありませんか。

一行目から入ります。

[Although the rider be as apt][Although]=[Even though]=[たとへ〜であっても]の意。[the rider]=[騎手]。[as]=[to the same degree]=[同じ程度に]の意。[apt]=[suitable for the occasion, quick to learn]=[適切なる、物覚えが早い]の意。格調(Metre)を[Iambic](弱強調)で[Tetrameter](四詩脚)に整へるために
[Al- though / the rid -/ er be / as apt /]

弱 強 / 弱 強 / 弱 強 / 弱 強 /

と工夫がなされてゐます。意味を取りやすいやうに散文的に書き直すと[Even though the rider may be apt]で良いでせう。

一行目の訳は「たとへ騎手が相応に才を身につけたと雖ども」となります。

二行目に進みます。

[And skilful as he may,] [skilful]は英語では[skilful] 米語では[1]が二つで[skillful]であります、=[expert]=[熟練した]の意。散文的に平易に書き直しますと[And he may be as skilful (as an expert),]となるでせう。二行目の訳は「(たとへ)その道の達人と同じ程度に熟練したにせよ」となります。

三行目に進みます。

[Let him beware ! No steed but will] [No〜but]=[いかなる〜も〜しないことはない]の意。[him]=[the rider]。[beware]=[be on one's guard]=[用心する]の意。[steed]=[軍馬]。

三行目の訳は「騎手をして用心させよう! 如何なる軍馬もしないことはない」となります。

四行目に進みます。

[Stumble once in a way.] [Stumble]=①to trip in walking or running

②blunder morally=[①歩いてみてまたは走ってみてつまづく ②道徳上のことでつまづく]の意。[once]=[one time only]=[一度だけ]の意。[a]=[any]=[どんな]の意。[way]=[path]=[道]の意。四行目の訳は「どんな道に於いても一度だけはつまづく」となります。

戦場に於ける「つまづき」が何をもたらすか少しでも考へるならば、自分一人の死では済まない大惨事を招くことになる。そこで、計画を立てる(plan)→実施する(do)→点検する(see)場合に於て、念には念を入れ、慎重には慎重に成らざるを得ない。そのことを御製にお詠みになられてゐるのでせう。

さて、「かし」が付かない「つまづくことをかへりみよ」。これでは月並みな年寄りや上役から命令調でよく聞かれる表現でありませう。だが「かへりみよかし」となつてゐます。立ち止まって考へて見ませう。祖国を離れ遠い異国の地で戦ふ兵士達に対して「かし」は「念には念を入れて欲しい」と言ふ御叡慮が働いてゐることが伺へます。この様に「かし」が付けられたことで全く異なるイメージが湧くでせう。

単なる命令調ではない。教訓的でもない。実はお祈りの歌ではありませんか。静かに瞑目して思ひ浮かべて見てください。私達の眼前に、明治天皇が、ご神前に跪かれ、ご頭を深々しく垂れ給ひ、神々へ一心に兵士だけでなく軍馬の平安・健勝を祈り給ふお姿が浮かんで来るのではないでせうか。

【馬に寄せて】

一般に軍歌は、日本人の好戦的な傾向を煽った歌だと一方的に断罪され、公正に評価されることなく、社会的に葬り去られた感が支配的であります。しかしそれは木を見て山を見ざる排他的な思想が成せるが故であると私は考へます。色眼鏡をかけずに、文学的に正しく内容を吟味し鑑賞されるならば、誰もが違った見解を持たざるを得なくなるでせう。

明治三十七年頃の作品として「日本陸軍」があります。一番から十番まで有ります。大和田 建樹の作詞で一番(出陣)二番(斥候)三番(工兵)四番(砲兵)五番(歩兵)と詩的にそれぞれの勤めが叙情的(lyrical)に謳はれてゐます。

『思い出の軍歌集』野ばら社 昭和四十年(1965)版] 六番(騎兵)と一緒に歌ひませう。

6 撃たれて逃げ行く八方の 敵を追い伏せ追い散らし

全軍残らず打ち破る 騎兵の任の重ければ
わが乗る馬を子の如く 労人もあるぞかし

騎兵の任務を明確に示し歌を通して徹底されるやうに歌詞が作られてゐます。「わが乗る馬を子の如く 労人もあるぞかし」御製に通じる優しい思ひ遣りが余韻を残すやうに謳はれてゐます。

七番(輜重兵)も共に歌ひませう。

7 砲工歩騎の兵強く 連戦連勝せしことは
百難侵して輸送する 兵糧輜重のたまものぞ
忘るな一日おくれなば 一日たゆとう兵力を

私達戦争を知らない世代は、戦争のことを映像を通して見る場合、前線にのみ目が向けられがちです。だが、この歌を歌へばそれでは駄目だと分ります。裏方としての輜重兵が「百難侵して輸送する 兵糧輜重のたまものぞ」死地に身を曝しながら輸送の任に当るからであることを忘れてはならない。兵士達が一日なりとも歯ざりしながら前線で「たゆとう」(揺蕩ふ)ことがないやうにと、輜重兵が軍馬と心を合はせて輸送に勤めた歴史の裏舞台をこの歌から偲びたいものです。

大東亜戦争の敗戦の原因に大きくは、①情報戦において遅れを取ったこと 今ひとつに②兵員や物資の補給路を確保せずに作戦を机上で、作り上げたことが挙げられます。日露戦争ではこの二つの点で、前線に於ても銃後に於ても細心の配慮が払はれてゐたことが、随所に見受けられます。

明治三十八年頃の歌「輜重輸卒」(佐々木信綱作詞)からも偲ぶことが出来ます。

「輜重輸卒」

1 押せども押せども車は行かず 進まぬ荷馬いたはりて
険しき坂道 深き谷 道なき道を進み行く
2 梅雨時の沼なす道も 日陰もえつつ砂原も
吹雪烈しき山かげも 車を押して馬ひきつ
3 靴は破れつ草鞋は切れつ 足は傷つき血は流る
雨の夕暮れ風の朝 十里十二里十三里
4 暗き内より夜更くるまで 苦しき勤をつづけつつ
疲れに疲れ つかれても 安く眠らんひまもなし

敵は前線の兵士が十分に力が発揮できなくなるやうにあらゆる手段を使って攻撃を輜重輸兵団へと仕掛けて来たに違ひ有りません。前線と変らない危険が待ち受けてゐたでせう。輜重輸卒は「わき目もふらずに一筋に糧食弾薬を運んだ」のであります。

5番・6番・7番は歌詞を省略します。

8 輜重輸卒のかくれし勲 かくれし力人知れず

國に捧ぐるつとめには 優り劣りのあるべしや
9 輜重輸卒のくるしみ思へ かくれし辛苦思へ人
かくれし勲 思へ人 涙ある人 血ある人

前線で命がけで戦ふ方にスポットライトが当たるのに比例して、輜重輸卒の勤めは「はなやか」ではないが「國に捧ぐるつとめには 優り劣りのあるべしや」。優劣を決して付けてはならない、と厳しい語調で歌はれます。明治天皇の大御心を受け止め詩人・佐々木信綱が心を込めて作詞したのでは・・・と私には思はれてなりません。皆様は如何感想を持たれましたか。ご意見を聞かせて下さい。
最後に日英の御製を二度拝誦して終了。

《参考文献》

- 『思い出の軍歌集』野ばら社 昭和四十年(1965)版
- 三井甲之著『明治天皇御集研究』(國文研叢書 18)

「久しくもわがかふ馬の」 [To see the steed, my mate of years]

馬(明治四十年)
久しくも
わがかふ馬の
老いゆくを
をしむは人に
かはらざりけり

To see the steed, my mate of years,
Grow aged and infirm
Makes sad my heart, much as to view
A once straight, now bent form.

参考のために『明治天皇御集 巻下』を引用します。二首の連作であり一首目が上の御製です。「御料の御馬の老い衰へたるを、惜しませ給へるなり。」と解説があります。

二首目とその解説を引用します。

「 人ならばほまれのしるし授けまし軍のにはにたちし荒駒^{いくさ}

ほまれのしるしは、名譽を表示する勲章をいふ。三句は授けたきものを、人にあらねば授け得ざることよ、となり。軍のには、は戦場なり。荒駒は、ここにては勇武なる馬の義。」(401頁)

「馬」が詞書きの御製は「その104」から今回まででありました。翻訳者・齊藤氏は欧米の人にも「馬」に寄せられる大御心を鑑賞して欲しいと言ふ願ひを込め、英詩に翻訳したのでせう。一首一首は独立した作品であり、それら四首を一つの作品として纏め磨きが掛けられてゐます。これら御製を拝誦する人は、人間に対するのと同じやうに馬を愛しまれる明治天皇の温かいお気持ちに、触れることが出来ますから日本人だけではなく英詩を通し、多くの外国の人も、讃辞を呈したに違ひありません。

一行目から入ります。

[To see the steed, my mate of years,] [To see]は不定詞の副詞用法の「とき」であり=[When I see]=[私が見るときに]の意でありまた一・二行目は三行目の[Makes]の主語ともなつてをります。[the steed]は「その105」「その106」に既出=「軍馬」。[mate]=[companion]=[仲間]。[of years]=[of many years]=[長年の]の意。[the steed]と[my mate]は同格を成してゐます。一行目の訳は「私の長年の仲間である軍馬を見るに付け」となります。

二行目に進みます。

[Grow aged and infirm] [Grow]=[年を取る]の意。[aged]=[very old]=[大変年取った]。[infirm]=[physically weak and frail, feeble from age]=[老衰してゐる]の意。文法的には二行目は[see] (知覚動詞)の目的格補語となつてゐます。二行目の訳は「年を取り老い衰へた」となります。

三行目に進みます。

[Makes sad my heart, much as to view] 散文的には[It makes my heart sad]であります。[much as]=[just as]=[～するに付け全く]の意。[view]=[to survey mentally]=[心で観察する]の意。三行目の訳は「心で観察するにつけ多く私の心を悲しくさせる」となります。

四行目に進みます。

[A once straight, now bent form.] [once](嘗て)と[now](今や)が対照的に配置され[A once form](昔の姿)は[straight](背筋がぴんと張り)、[A now form](現在の姿)は[bent]=[changed by bending](曲がってしまった)姿になつてしまつてゐる。この行は[view]の目的語として置かれてゐます。四行目の訳は「嘗ては背筋がぴんと張り今や曲がってしまった姿を」となります。

「駒」に関する四首の御製を振り返って見ませう。

「その104」

つはものと ともに勇みて すすむてふ 駒のこころも 人におくれじ

「その105」

たたかひの いとまある日は いくさ人 手馴の駒を いくしむらむ

「その106」

駒にのる わざはいくばく 進むとも つまづくことを かへりみよかし

「その107」

ひさしくも わがかふ馬の 老いゆくを をしむは人に かはらざりけり

英訳者・齊藤氏は、このやうに並べて見ますと、起・承・転・結を考へて配列をしてゐたやうに受け取れます。「その104」は、人馬心を一にして戦ふ「起」、「その105」は、砲声^{いとも}が一時途絶えた暇ある日として「承」、「その106」は、人馬に対する平安の祈りが籠もる「転」そして「その107」は、[my mate of years](久しき仲間)の老いて行く[the steed](軍馬)と[the rider](騎手)への愛惜の念が「結」であると思はれます。異論もあるでせう。皆様は如何思はれますか。

「気高さを求むる心」

これらの御製に共通して流れてゐる情念は、如何なるものでありませうか。御製が生まれた時代と現代は、凡そ百年程を隔ててゐますが、大御歌の調べには、人の心を打つものがあります。それは「気高さを求むる心」が底意に流れてゐるからではないでせうか。

ところで、明治天皇は、百年後の人の心を打つことをご念頭にお詠みになられたのでせうか。それは違ふのではないでせうか。

世界文学の第一人者ゲーテを例に挙げて考へて見たいと思ひます。ゲーテは世界の人に向かつて作品を書いたのですか。さうではなかつた筈です。例へば「若きウエルテルがわづらひ」を回想してエッカーマンに次のやうに語つてゐます。「あれも、ペリカンのやうに私自身の心臓の血で育てたものだ。あの中には、小冊子十冊分の小説に出来るほど多くの私自身の胸の内から出た内的なもの、多くの感情と思想とが含まれてゐる。」(『欧米名著邦訳(明治)集』國文研叢書 十 206頁)(…は筆者小野)自分の心に正直に胸の内から絞り出すやうに書いたのがゲーテの文学でありました。世界文学だからと言って世界語で書いたのだらうと言つた空想をしては成りません。当然のことながら、ゲーテが生まれ育つた國の言語ドイツ語で書いたのです。それが色々な國の言語に翻訳され、その翻訳を通して私達日本人も目にすることが出来、結果として世界文学に列せられるのであります。世界文学に列せられたからゲーテの文学が優れてゐることにはなりません。問はれるべきは内容即ち「私自身の胸の内から出た内的なもの」でせう。

一つゲーテの詩をここで一緒に読んで見ませう。

真理は久しい前に見いだされた。

気高い精神はみなそれによって結ばれた。

古く伝はるその精神をつかめ!

大地の子よ、大地やその姉妹たちに

太陽をめぐる軌道をさし示した

あの賢人に感謝せよ。

いつの時代も自分の生きてる時代は、現代であり目新しいものに幻惑されそうになりながら生きてゐるに違ひありません。「真理」は誰によって見出しされたか。彼は「久しい前に見出された。気高い精神はみなそれによって結ばれた。」と言ふ。このフレイズから私はキリストや孔子の言葉を思ひだします。分裂から統一へその繰り返しの中で「古く伝はるその精神をつかめ!」とゲーテは言ひ温故知新と孔子は喝破する。「真理」を見失はないで生きるにはどうすべきか。自分の内面に「気高い精神」を目覚めさせれば、千々に乱れる心も統一され一つの真理に結ばれる。結ばれるとは懐かしくそこへ回帰することでありませう。

「真理」とは何か。ゲーテの『箴言と省察』を読んで見ませう。

「真理はわれわれの本性に逆らい、誤謬は逆らはない。しかもそれはしごく単純な理由からである。つまり、真理は、われわれがみずからを制限されたものとして認識すべきことを要求するのにたいし、誤謬は、われわれは、いづれにせよ制限されてゐないといつてわれわれに阿るからである。」

われわれの本性に逆らわずに耳障りの良い、または一時的にいい気分させるものは「誤謬」だと言ひます。

私の生きてきた時代で「真実」なのか「誤謬」なのか国民精神を分裂させたことを、思ひだすままに列挙して見ます。

昭和三十年代

- 道徳教育反対運動!戦前の修身教育の復活につながるからだ!
- 日米安保反対闘争。戦争勢力と手を結ぶな!子供を再び戦場へ送るな!
- 理想の國——スイスやデンマークに学べ

昭和四十年代

- 建国記念日論争 昭和二十年八月十五日以後が良くて二月十一日は歴史的に誤謬
- 再び日米安保反対闘争
- 理想の國——中華人民共和国(文化大革命)に学べ『毛語録』をかざす紅衛兵の活躍

昭和五十年代

- 国歌「君が代」論争 日本も大統領制(共和制)に移行すべき
- 基本的人権・平等・平和の重視とその中身

昭和六十年代

- 天皇の戦争責任と責任をとり続けられた昭和天皇
- 南京大虐殺説とその徹底的検証

平成に入って

- 専業主婦は蔑まれ男女共同参画時代へ

そのほか色々国民精神を分裂させるものがあるでせう。自分の心と智恵を総動員して耳障りの良い「誤謬」を一つ一つ正した上で、「真実」を「気高い精神」で取り戻しつつ、何とか国民精神が持ち堪えられて来た、そんな感懐を持つものであります。

旧約聖書の「伝道の手紙」一章九節に [There is no new thing under the sun.](太陽のもとに新しきものはなし)があります。ゲーテが「太陽をめぐる軌道をさし示した」

あの賢人に感謝せよ。」「あの賢人」とはキリストであり釈迦であり仏陀でありませう。孔子は「克己復禮」ことの大切さを説かれました。だが当時は君臣の間の礼儀も衰えてゐたのでせう。「君に事へて礼を尽せば、人にて諂へりと為す。」昔ながらの丁寧な礼を尽すと、人々が私のことを主君に「諂へりと為す。」おべっかを使つてゐると非難した。だが非難されるのは無礼作法になつてゐる世間の人々であつたのであります。真理は時代に流されるものであつてはならない。ゲーテが言ったやうに「気高い精神が込められた 古く伝はるその精神」を孔子が失つてゐないからこそ、今日も古典的な光を放ち続けてゐるのでせう。社会は目まぐるしく変転してゐます。基軸を失つたかのやうです。だからこそ古典をひもとき、そして御製を拝誦する必要があるのでせう。最後に日英の御製を二度拝誦して終ります。

《参考文献》

- 『箴言しんげんと省察』ゲーテ
- 『ゲーテ詩集』
- 『欧米名著邦訳(明治)集』國文研叢書 十
- 『明治天皇御集 卷下』

「國たみのひとつところに」 [Well do my people serve]

折にふれて(明治三十七年)
 國たみの
 ひとつところに
 つかふるも
 みおやの神の
 みめぐみにして

Well do my people serve their land
 In need with one accord ;
 I thank for this my great divine
 Forefather's holy word.

神祇(明治三十七年)
 神垣に朝まゐりしていのるかな
 國と民とのやすからむ世を
 (日露戦争時の御製であり宮中の三殿に
 早朝のお参りをなされ「祈り」給ふので
 あります。一心に何を祈られるのであり
 ませうか。下の句で「國と民とのやすか
 らむ世を」と言はれます。遠く満洲の地
 で戦ふ兵士達のこととも国内で銃後をま
 もる国民のこととも深く祈り給ふのであ
 ります。)

「その102」で学びましたのは次の御製
 でした。
 國民はひとつところにまもりけり
 遠つみおやの神のをしへ
 (天皇は国民の平安を祈念し給ふ。国民
 は「ひとつところに」(with one accord)「
 守りけり」と歴史を偲ばれてゐます。
 國民は何を守つて来たのであるか。「遠つ
 みおやの神のをしへ」であります。
 私たち平成の国民も謙虚に歴史に思
 ひを致し守るべきは何か、内心に問ひ歴
 史的日本の縦糸を恢復したいものです。

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。

「國民の忠良なるを喜び給ふにつけて、祖宗の御恵を感謝し給へるなり。結句の下に詠嘆の意こもれり。」(239頁) 明治天皇は神々にそして日本国民に感謝してをられます。

一行目から入ります。

[Well do my people serve their land] [well]=[in a pleasing or desirable manner, loyally]=「喜ばしいまたは願はしい風に、忠実に」の意。[serve]=[to give the service and respect due]=「当然の事として敬意を込めて奉仕する」の意。[serve]には「尊敬心」が籠ってゐるのです。だから[serve]は対象により日本語のニュアンスが異なって来ます。例を挙げますと

- ①「日本人は一旦緩急あらば国家に事へる(貢献する)。」は[The Japanese serve their country in case of emergency.]となります。
- ②また[They serve gods every morning and evening.]ならば「彼らは毎朝夕、神に礼拝奉仕する。」の意となります。

「國たみ」は[my people]。「その19」、「その86」、「その102」では「國たみ」は「my folk」であり、「その100」では「わが國たみ」は[my patriot band]でありました。いづれも[people]、[folk]、[patriot band]の前に[my]が付いてゐます。「私の息子」、「私の娘」、「私の家族」などに付ける[my]が明治天皇の場合には「国民」全体が家族の一員のやうな思いで大御心を注いでをられるから[my son],[my

daughter][my family]の[my]と同じく[my people]と英訳されてゐたのでせう。「その48」の

罪あらば^{ちん}朕を罪せよ あまつ神 民はわが身の 生みし子なれば

が思ひ起されます。国民が幸福のさいも不幸の際にも一身に於て天皇が、無限に責任を負ひ給ふが故の[my]と受け止めることができます。この行は副詞[well]を強調するために語順転倒がなされてゐます。散文的には[My people serve their land very well]と書き換へられます。

一行目の訳は「我が国民は極めて忠実に國に貢献する」となります。

二行目に進みます。

[In need with one accord :] [need]=[a time of difficulty, straits(sがついて苦境) ,or trouble; emergency]=[困った事態、難渋してゐる時、危急の際；非常時]の意。例へば、イギリスの詩人Browning の(1864) [Fas, Lee's Wife | |, iii.]に[God help you, sailors, at your need!](神が君等水夫を緊急時には助け給ひますやうに)があります。又人口に膾炙してゐる諺に

[A friend in need is a friend indeed.](まさかのときの友こそ真の友。)危急のときに友情を忘れないで友誼を守るべきを論じた格言であります。[In need)=(ここでは個々人のことではなく)「國の危急の際に」の意であります。[with one accord]=[心を合はせて]の意で「その102」に既出。二行目の訳は「国家危急の際に心を合はせて」となります。

日本民族は「平和時には個々バラバラで弱々しく見えますが、国家存亡の時には、団結し心を合はせて一つに結び合ふ」ところの[Core personality](中核性格)があると文化人類学者が云ふところであります。

「気高い日本人であるために」

作家の曾野綾子が平成十九年五月六日(日)の正論欄に「『醜い日本人』にならないために」と言ふタイトルで一文を草してゐます。自分がこのごろ目にする若者を評して「個性のない若者たち」と断じてゐます。其の理由は「『魂の高貴さ』を大人たちから若者が学んでゐないからだと言つてゐます。

「日本以外の國では、その人に対する尊敬はすべて強烈な個性の有る無しが基礎になっている。もちろんお金や権力のあるなしもその一つの尺度になり得るだろうが、日本では、最近全く若者に教えていない分野があることがわかった。」あなた方に何が教へられてゐないと言ふのでせうか。今頃気づいても遅い感じがしないでもありませんが次を読んでみませう。

「つまり魂の高貴さということに関して教師も親も知らない上、当人も読書をしないから、損得勘定、自己愛などというものの以外に、人間を動かす情熱の存在やそれに対する畏敬の念というものがこの世にあるのだと考へたこともないのである。」

此処まで読まれて皆様は、「損得勘定、自己愛などというものの以外に」考へたことのない部類に自分も入れられて何だと、憤慨されますか、それともやはり自分も其の域を出ない若者に過ぎないと何となく思はれますか。ご意見を聞きたいものです。少なくとも私たちが共に研鑽を続けてゐるのは「気高く生きる日本人」が一人でも多く出て欲しいと願ふが故ではないでせうか。

三行目に進みます。

[I thank for this my great divine] [thank]=[to express gratitude to]=[〜に対して感謝の意を表す]。[divine]=[「神聖な」]の意(「その102」に既出)。四行目の[Forefather]=[ancestor](先祖)を修飾してゐます。弱強四詩脚(iambic Tetrameter)の行にするために[divine]で改行がされてゐます。散文的には[I thank my great divine forefather for this]と書き換へると意味が取りやすく成るでせう。

三行目の意味は「私はこの事に対して御親の神に感謝する」となります。

四行目に進みます。

[Forefather's holy word.] [this]の内容が此処に示されてゐます。[holy word]=[sacred speech]=[「神聖なる

言葉」の意。四行目の訳は「これぞ神聖なる御言葉」となります。

【御神勅(Forefather's holy word)について】

日本國創業の天皇が神武天皇であることはご存知のところでありませう。天皇の正統性(legitimacy)の根拠を示す言葉が御神勅と言ふことになるでせう。W. G. Aston の「Nihongi I.P. 77」を引用して「Holy Speech(神聖なる言葉)」を味はつて見ませう。

[“This Reed-Plain-1500-Autumns-Fair-Rice-Ear Land (葦原の千五百秋の瑞穂の國は) is the region which my descendants shall be lords of. (是れ吾子孫の王たるべき地なり。)]

Do thou, my August (神聖なる) Grandchild(皇孫), proceed thither and govern(治める) it. (宜しく爾皇孫、就いて治せ。)

Go! And may prosperity attend thy dynasty, and may it, like Heaven and Earth, endure forever.” (行矣。寶祚の隆まさんこと、當に天壤とともに 窮無かるべし。)

【『君が代』に込められた重大性に気付いてゐますか?】

瑞穂の国日本は、葦原の長い歴史を持つてゐる。そして稲が毎年秋になると豊かに実る、今年も今上陛下が稲の種まきをなされ、六月には田植を御自らなされます。この国は神の子孫である天皇が「王たるべき地なり」。つまり王であらせられる国である。神聖なる皇孫が永代この国を治められる。天皇の子孫がいつまでも続き、「就いて治せ」。この国が「行矣」幸あれと祈る。「寶祚の隆まさんこと」全てが栄えますことを祈る。「當に天壤とともに 窮無かるべし」天地自然の営みと共に、人も動物も自然も共に無限に栄えますやうにと祈る、と御神勅は解されます。

天武天皇の御代に編まれました古事記(和銅五年・712)にこれは記載されてゐます。気の遠くなる程古き昔に言ひ伝えられてゐた御神勅は一条の縦糸となつて現代に生きてゐるのが、世界史上類例のない日本でありませう。誤謬の歴史に振り回されてゐるならば「そんなことがあるだらうか?」と思ふでせう。眞実は日本国国歌に込められてゐるのです。

君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりてこけのむすまで

これは外でもありません。「御神勅(Forefather's holy word)」が国歌となつて、今日に歌ひ継がれてゐるところであります。私たちは儀式の折に斉唱してゐます。深い意味合ひを念頭に留めずには唯歌ふだけでは、余りにも勿体ないことです。「君が代」を歌ふとは一考へてみますと、

千三百年前に回帰するだけでは決してない。更に深い歴史の根源まで私達が立ち返つてゐることになるのです。神話の時代と超科学的に進歩した現代とが脈々と一筋につながり息づく。それが日本なのではないでせうか。皆様は如何思はれますか。

今回は気高く日本人が生きることの出来るレーゾン・デートル(存在理由)が何処にあるかを偲びました。誇りの源泉もここにありませうし、敗戦で占領軍が狙いを付けて破壊してきたところも此処でありました。最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

- 『明治天皇御集 巻中』 ○W. G. Aston の『Nihongi』
- 平成十九年五月六日(日) 正論欄『醜い日本人』曾野綾子

「子らはみな軍のにはに」 [The sons are, one and all, away]

国家翁（明治三十七年）

子らはみな
軍のにはに
いではてて
翁やひとり
山田もるらむ

The sons are, one and all, away
To guard their father land ;
The gray-hair'd sire alone is left
The woodland farm to tend.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。

「こは、この年の九月二十五日の御製なりと承る。当時、一人子の召集せられて遠く満洲の野に出征せしかば、殆ど自失せりし田舎の老翁が、この御製を拝し、聖徳に感激して再び業に勤むるにいたりしといふことを聞きたりき。御製の徳は、田野の老翁を感泣せしめしなりけり。」(200～201頁)

一行目から入ります。

[The sons are, one and all, away] [son]=[a male offspring or descendent]=男性の子または子孫の意で、翁からみてその家の後継者を指すと考へられます。[one and all]は[all]の強調形で「みんな」の意。田畑を耕す息子が兵隊となって[away from home(留守)]であり、家には翁だけが残されてゐる。又、[away]は[far away ~ miles away]=「幾哩も幾哩も遠方に」の意がこもります。

一行目の訳は「跡取り(heir)の息子は、皆 幾哩も幾哩も遠方にゐる」となります。

二行目に進みます。

[To guard their father land ;] [guard]は「その93」「その100」に既出。=[defend]=「守る、防衛する」の意。何を守るために「幾哩も幾哩も遠方に」行ったのか。次に示されてゐます。[father land]=[one's native land]=「祖国」を防衛するために、出征してゐるのであります。

二行目の訳は「祖国を守るために(出征してゐる)」となります。[To guard]は不定詞の副詞的用法で「目的」を表はします。即ち日露戦争の戦争目的が此处で示されてゐると考へられます。[guard](防衛する)の目的語は[their father land](祖国・日本)であります。帝国主義全盛の時代でありまして大ロシアは侵略の刃を満洲から朝鮮へと伸ばして来てゐたのです。小国日本の喉元に刃が突きつけられてゐると言ふ時代認識は当時の日本国民の共通認識であつたでせう。世界的には、白色ロシアによる日本侵略も時間の問題と見られてゐたのです。新聞は時代を写す鏡であると言はれます。当時の外国の新聞を此处で見つめてみませう。

【アジアの諸国民と日露戦争】

①フィリッピン人の観察 (パシフィック・コンマシャル。アドヴァタイザー 米領フィリッピン ホノルル一九一二年七月三〇日) (明治四十五年陛下崩御に際して)

「(前略)当時陛下は勇敢なる陸海軍人の慰安と陸海各地の戦闘に御憂慮を与へさせられたるのみならず、数ヶ月に亘りて殆ど軍營又は戦場に在る其の臣民と相等しき質素なる御生活を営み給ひたり。

ロシアの熊の集団が日本を挑発して戦はしめ、而して近代史上に初めて西欧の一強国がアジアの一強国の攻撃の下に倒れたる時、日本の兵士等が其の勝利に於て元首を歓呼し奉り、其御名を口にして死し、戦ひて

遂に克ちたるは、実に其の天皇陛下の御為に為せるものなり。」(攻略)(884頁)『世界に於ける明治天皇』

日露戦争に対して傍観する諸外国の第一印象は、ロシアに挑発されて戦端を開いた一小国日本は、熊の集団対人間の戦ひのイメージであったのでせう。フィリッピン¹の新聞は「ロシアの熊の集団」と表現してゐます。「熊の集団」から日本が殺されて仕舞へば、全世界が白人による帝国主義の支配から永遠に抜け出せない、と最初は悲観的に見てゐたに違ひありません。戦ふ前はアジアの一小国であったでせう。ところが勝利を手中に収めた後は「近代史上に初めて西欧の一強国がアジアの一強国の攻撃の下に倒れた」と記事に書いてありますやうに「アジアの一強国」と成り得たのであります。アジアの白人の支配下にあった諸国民に立ち上がり自前の独立国を生み出す勇気を与へたことは、史実が示すところであります。フィリッピンでは独立運動に挺身したホセ・リサルがゐます。トルコではケマル・パッシャが立ち上がりました。[China]では、孫文が一九〇五年(明治三十八年)に日本に来てをりまして「中国革命同盟会」結成したのであります。玄洋社の頭山満翁や宮崎滔天をはじめとする日本の志士が物心両面の援助を与へたことは、有名な話してあります。孫文が清朝打倒の挙兵を数回してをりますが、日本人も参加してゐたのであります。心ある[Chinese]は、密かに感謝してゐるのです。

②豪州人の観察 (レジスター アデレード 一九一二年七月三十一日)

「(前略)千九百二年(明治三十五年)には日本は英国と防御同盟を締結し、爾後二年にして韓国に於けるロシアの侵略に対し強硬なる抵抗をなせり。日本はロシアに宣戦し光彩陸離たる連勝を以てロシア軍隊を撃攘し、ロシア海軍を海上より掃討せり。」(974頁)

オーストラリアの新聞「レジスター アデレード」も明治天皇の崩御に対して哀悼の意を表はした後に日露戦争の日本の勝利を讃へた記事を載せてゐました。

③ペルシャ人の観察 (ハブラル、マタン 千九百十二年八月十五日)

「(前略)日本天皇陛下の統治以前に在ては日本人及び日本帝国の状態は羸弱なりしを以て、如何なる邦國も日本を攻撃し暴力を以て有利なる条件を獲取することを得たりと雖ども、日本先帝陛下の登極あるや短時日の間に於て日本は勃然として泰西の最大強國たるロシアをして大敗せしめ、且泰西の倨傲なる君主は日本との同盟及び交誼を懇請するに至りたり。」

「波斯国人」とはペルシャ(イラン)人のことでありまして現在のイラン辺りのイスラム系の国民であります。日本の歴史と現状を正確に捉へてゐます。鎖国してゐた徳川幕府のままの日本は「如何なる邦國も日本を攻撃し暴力を以て有利なる条件を獲取することを得たり」と記事にはあります。アジアを競争のやうにして侵略してゐた西洋のどんな國でも日本を武力攻撃すれば彼等にとって有利な条件で支配下に置いたであらう、と観察してゐたのです。皆様は如何思はれますか。フランスに支配されたベトナムやアメリカに支配されたフィリッピンのやうに簡単に西洋人による植民地となつてゐた、と云ふのです。明治天皇が統治される日本となつてゐたからこそ「日本先帝陛下の登極あるや短時日の間に於て日本は勃然として泰西の最大強國たるロシアをして大敗せしめ」ることが可能になった。この事実を仮初めに読み過ごしてはなりません。

三行目に進みます。

[The gray-haired sire alone is left] [gray-hair]=[灰色の髪、白髪].[sire]=[father]=[父]の古語、[gray-beard]=[「(鬚髭が白くなって)老人」].[alone]=[solely : without companion or help]=[「単独で:仲間も助けもなく」]の意。[left]([leave]の過去分詞)[leave]=[cause to remain behind]=[「後に残らせる」]の意。

三行目の訳は「白髪になった老人だけが残されてゐる」

四行目に進みます。

[The woodland farm to tend.] [woodland]=[land covered with trees and shrubs, forest]=[「喬木及び灌木に被はれた土地、森」]の意。[farm]=[a piece of land used for crops]=[「作物を作るための田畑」]の意。[tend]=[to take care of]=[「世話をする」]の意。山の上の方まで開墾され畦が築かれた棚田を映像でご覧にな

られた方があるでせう。もし一年間休耕して[tend(世話をする)]ことを怠るとどうなるでせうか。夏にはススキ類は、一日に一寸延びるから一週間で七寸、一ヶ月が四週間だとすると一ヶ月で7×4=28寸程(二尺八寸)になる計算です。竹類ならば一年で山となります。二・三年もすれば元の森に戻って行くでせう。先祖の方々がご苦労されて開墾された水田が日本各地で荒れてゐるのが余りにも目に付く。[tend(世話する)]には暑さ寒さを厭ふならば出来ないことです。

四行目の訳は「山田を世話するべく」となります。

英詩を一行目から通して味はつて見ませう。

「跡取り(heir)の息子は、皆 幾哩も幾哩も遠方にゐる」

「故郷を守るために(出征してゐる)」

「白髪になった老人だけが残されてゐる」

「山田を世話するべく」

息子を戦地に送り出した父親の心境を明治天皇は、思ひ遣つてをられるのです。村中の者で日の丸の旗を振り歓呼の声を上げて働き盛りの息子を送り出した。一人になった時に、どうしたでせうか。夕闇迫れば、悄然とした気分が襲はれたに違ひありません。生きて息子よ、帰って来てくれ、と神に祈る老父の姿が目には浮かびます。当時は殆ど家が農家であります。野良仕事は、重労働だけど息子とともにしてゐたときは張り合ひもあつたでせう。今日から自分一人でやるには体力も気力も衰へてゐる老人には、荷が重すぎる、と私には思はれます。

『改心した老農夫』を読んで見ませう。』

「日露戦争当時、岐阜県下の某村に一人の老農夫があつたが、その子が招集されて出征してしまふと後には力と頼む者もなく、我身も老ひ衰へて、思ふ様に働けぬところから、世の中を悲観して、『こんな思ひで生きてゐるより死んだ方がよい。』と遂には自暴を起し、田畑なども荒れるに任せて一向働かうともせず、随分ずさんだ行為をするやうになって来た。

そこで村役人等も心配し、同人を呼出して、その不心得を懇々諭すとは云へ、一向聞き入れやうともせず、彼の行為は日に日に不良性を加へて来たから、後には村民一同持てあまし、誰一人として相手にする者はなくなつてしまつた。」この時代の村役人と村人との関係が余程親身であり行き届いてゐたことが次で伺へます。現代とは時代が違ふと心に壁を作って読んでなりません。戦時中といふ緊張感が漂ふ中にもほのぼのとした時代性を見て取るべきではないでせうか。この老人の生き甲斐を如何にして取り戻すかに村役人は真剣であることに心が惹かれます。次を読みます。

「すると或る日の新聞紙に、

こらは皆いくさのにはに出ではてて

翁やひとり山田もるらん

との御製が掲げられてゐたから、村役人は、『これこそ、あの老爺を諭すのに、何よりの好材料である』と大いに喜んで、早速前の老農夫を呼出し、御製を読み聞かせて、

『畏れ多くも、陛下には、かく迄吾々国民のことを御軫念あらせられるのに、何でお前はなまけるのだ。そんな事では日本国民とは言へないし、戦場に居る子息さんが聞いたならば、定めし泣くことだらう』と懇々諷めると、今までは、誰が何と言つても、頑として聞き入れなかつた老農夫も、目に一杯の涙をため、

『さうで御座いますかい、天子様は、それ程までに、私どものことを御心配下さるのか、勿体ないことじゃ』と翻然悔悟し、宮城の方に向かって伏し拝み、泣く泣く立ち去つた(443~444頁)

それより後は打って変つて模範的の農夫となり、朝早く起き霜を踏んで働き、夕べは星を仰ぐまで、勤勉に働く自分を取り戻したといはれます。二点から本来の自分を取り戻したと考へられます。

①「天子様は、それ程までに、私どものことを御心配下さるのか、勿体ない」と言ふ日本国民としての情意を回復したこと。

②「戦場に居る子息さんが聞いたならば、定めし泣くことだらう」老農夫は異国で命を懸けて戦つてゐる息子へ

の共感が電撃にあったやうに芽生えたこと。

これらが相乗効果を及ぼし奮起せしめたと思はれます。このやうな佳話が伝えられて居る分けであります。暗い
独りぼっちの寂しい部家に明るい電気がパッと灯った良い話であると思ひませんか。

時代を隔てても大和言葉の調べが私達の心を打つか否かは、私達自身の心が無私になり広く心を開いてあ
るかどうかに掛かってゐるでせう。

今回は、平和時には息子とともに行ってゐた農作業を、戦時中なので息子の手を借りずに父親である老農
夫が一人で田を守ってゐることに御心を注いでられる御製を拝誦しました。戦いで日本を守ることと後に残
って田を守ることを同等に価値あるものと高く評価してお詠みになられてゐるのでせう。

《参考文献》

- 『仰ぎまつる明治天皇の御聖徳』昭和十年版 明治神宮・皇徳奉賛会出版部
- 『世界に於ける明治天皇』

平成十九年五月二十日(日) 14:~ 於て梅鶯塾

「いかならむ薬すすめて」 [Where shall I seek the salve]

薬(明治三十七年)
 いかならむ
 薬すすめて
 (あたへて)
 國のため
 いたでおひたる
 人をすくはむ

Where shall I seek the salve
 To ease the faithful men
 Who in their country's cause have bled
 And lie abed in pain ?

参考のため『明治天皇御集』巻中 を引用します。「負傷者の上をおぼしやりて、かくまで叡慮をなやまし給へること、畏しともかしこし。この御製を伝誦するもの、誰か感奮せざらむ。」この御製を伝へ聞いた軍医や看護兵は、傷病兵を救うべく励みとしたでせう。痛手を負った兵たちは癒しの力を行間から感じ取ったでせう。御製と英語の相違に留意。日本と外国の発想の違いがあります。

一行目から入ります。

[Where shall I seek the salve] [Where]=[At what place]=[どこで]の意。[shall I seek]=[shall I try to find]=[私は見つけようとするばよいのか]の意。[salve]=[a healing or soothing ointment]=[痛みなどを癒やす又は鎮静させる薬]の意。

一行目の訳は「何処で私は薬を見つつけようとするばよいのか」となります。

二行目に進みます。

[To ease the faithful men] [ease]=[to free from discomfort or worry, relieve]=[不快や不安がないやうにする、安心させる]の意。[faithful]=[loyal]=[忠誠な]の意。意味が取りやすいやうに書き換へますと[In order to ease the pain of the faithful soldiers]となります。

二行目の訳は「忠誠な兵士たちの苦痛を和らげるために」となります。

三行目に進みます。

[Who in their country's cause have bled] [Who]は関係代名詞であり先行詞は二行目の[the faithful men (忠誠な兵士たち)]であります。[cause]は「その89」に既出=「大義」の意。[bled]は[bleed]の過去分詞で=[to lose or shed blood]=[血を失ふまたは流す]の意。

三行目の訳は「彼等は国家の大義のために血を流し」となります。

四行目に進みます。

[And lie abed in pain ?] [lie]=[to stretch out as on a bed or the ground]=[ベッドや地面の上に長々と寝る]の意。[abed]=[in bed]=[寝床に]の意。[pain]=[suffering from disease or injury]=[苦痛]の意。

四行目の訳は「痛手負ひ苦しみ臥す」となります。

「昭憲皇太后と戦傷者」

戦争で負傷してゐる兵士への思ひ遣りは、明治天皇だけではなくて昭憲皇太后も同じやうに厚いものがあつ

たことが、御歌集から伺ふことができます。

写真(明治三十七年)

國のため いたでおふ身の うつし糸は みるに涙ぞ もよほされける

皇后は、國のために命懸けで戦ってゐる兵士が健勝であることを祈られてゐたのであります。ところが勇敢に戦ふ兵士が敵の弾にあたり負傷することが避けられない。それこそが戦場と云ふものでせう。負傷兵の写真が送られて来たのをご覧になられたのでせう。「みるに涙ぞもよほされける」「ぞ・・・ける」は係り結びとなっております。「みるに涙ぞ」とありますから何度もご覧になられたのでせう。「涙ぞもよほされける」見るに付け涙無しに見ることが出来なかった、と回想されてゐるのです。我が子が恰も負傷したかのやうに涙を流してご覧になられたことが拝察されるのであります。明治天皇も皇后(昭憲皇太后)も、戦争で痛手を負った国民に心を重ね合ふやうに労りの心を注いでられたのであります。国民は国民の方で御製や御歌を伝へ聞き、そこに込められた大御心を受け止め感動し一層の奮起を促したのでありませう。

〔皇后陛下と慰霊〕

人知れず異国の地で戦死することほど悲しい命はないのではないでせうか。後に残された家族のものたちに言ひ残したいことも言へずに、また親族や友人から葬式を挙げてもらひ見送りを受けることなく、死んでいくのが戦死であります。平和な平成の時代に生きてゐる私達には、想像がつかないほど悲しい人生でありませう。今際の際に何を求めて亡くなられたか戦死者の心を具体的に皆様は偲んでみたことがありますか。

皇后陛下の御歌をここに引用して、戦死する人の心を具体的にその人の身になって偲んでみたいと思ひます。併せて、日本国の君主による慰霊の持つ意味を考察したいと思ひます。

硫黄島(平成六年)

1. 銀ネムの 木木茂りゐる この島に ^{いそとせ}五十年眠る み魂かなしき

(戦闘の激しかった当時は禿げ山であつたでせう。今は合歓の木が交差し合ふやうに葉を銀色に輝かせて茂つてゐる。思へばこの一滴の地下水も出ない硫黄島に五十年もの長き間、戦死者は家族や親族に祀られることなく人知れず眠つてゐたのである。かうしてこの地で果て誰からも弔つてもらへなかつた命が「この島に五十年眠るみ魂かなしき」とお偲びになられてゐます。皇后様が「かなしき」と詠み留められたところに余韻があり深く胸に迫り来るところであります。)

2. 慰霊地は 今安らかに 水をたたふ 如何ばかり君ら ^は水を欲りけむ

(慰霊地は掃き清められました。み祀りが行はれたのであります。今日はいつもとは格別異なつてゐました。天皇皇后両陛下が最高位の祭司としてみ祀りが行はれたのです。内閣の長である総理大臣では達し得ない、最大の信者を持つ宗教団体の長でも行き届かない歴史的日本を体現されての天皇皇后両陛下が慰霊を成し給ふたのであります。)

皇后陛下は、この地に眠る兵士の魂と心の交流を成されたのであります。戦死者の魂が慰められたことが「今安らかに水をたたふ」、から現に見えるやうな感想を私は持ちます。)

お國のために戦ひ命が尽きざるを得なかつた戦死者の無念は如何ほどであつたでせう。その気持ちに御歌を通して私達も迫ることが出来ます。「如何ばかり君ら水を欲りけむ」——どれほど喉が渇き最期の一滴を求めてをられたことでせうね——と、皇后様は優しく語りかけられたのでありませう。一首目の「この島に五十年眠るみ魂かなしき」が胸を突くやうに迫つて来ます。戦死者の悲しみを御胸に懐き込まれたのであります。

戦死者の悲しき命の上に現代の私達は存在するのであることを決して忘れては成らない。そして慰霊とは、このやうにして皇后陛下が御心を戦死者に寄せられ御歌の中で吸い上げられ優しく御心に包み込まれるやう

であります。悲しき霊との霊的な交流の末に慰霊が完全なものとなり御霊も安らかに眠り給ふのではないでせうか。

「政治的行為でなく宗教的祭祀について」

外国の新聞からこの件について考へて見ませう。英国の代表的な保守系高級紙としての性格を持つ[[The Times ,London]をここに引用します。

タイムズのハーグローブ記者がコロンビア大学のアイヴァン・モリス教授【古代日本の宮廷生活を描いた[The World of the Shining Prince](輝ける皇子の世界)の著者】に日本の天皇制の特徴について質問をしたものです。

Q—If the emperor was not divine, in the English sense, am I not right in thinking that, like the members of many ancient dynasties, his office (皇室)had a marked religious character (宗教的性格), and he was endowed with a priestly function?

(仮に天皇が、英国で意味するところの神ではなかったとしても、古代の幾多の君主と同じやうに、皇室は著しく宗教的性格を持ってゐて、天皇は祭祀(priestly function)の機能を賦与されてゐたと考へてよろしいですか?)

質問する方のハーグローブ記者も相当に日本のことに造詣が深いやうです。アイヴァン・モリス教授は次のやうに答へます。

The very essence of the imperial institution in Japan is religious—not political.(日本の天皇の本質は宗教的なものであって政治ではありません)

The raison d'etre of the emperors was their magic religious function as the high priests of Shinto, the national Japanese religion.

(天皇の存在理由は、民族的宗教であった神道の高位の聖職者としての彼の呪術的機能にあったのです。)

Their political and administrative functions(政治的行政的機能) were secondary(二次的) or even irrelevant(〜と無関係) to this main function(主たる機能) of the worship(礼拝) of the ancestral gods, Amaterasu and other members of the Shinto pantheon. (集散的に一国のすべての神々)

(天皇の政治的行政的機能は、この主たる機能である祖先神、天照大御神をはじめ八百万の神々の礼拝に比べると、二義的もしくは本筋から外れるものでさへあったのです。)

From ancient times, from the foundation of the dynasty, in fact, the imperial authority in Japan was symbolized by the possession of the three items of the imperial regalia—the mirror, the jewel, and the sword.(上代より、王朝の成立当初から、事実、日本の天皇の権威は、三種の神器——鏡、玉、剣——の所有に象徴されたのです。)

The mirror stood for uprightness; the jewel for compassion; the sword for resolve.(鏡は高潔、玉は思ひ遣り、剣は不撓不屈を表はします。)

These three items of the regalia(即位の寶器) were handed down from emperor to emperor over the past 1,500 years, and constituted invaluable tokens of their spiritual authority.(精神的権威)

(これら皇位をしるす三種の神器は過去千五百年に亘って代々天皇に受け継がれ、天皇の精神的権威の計り知れない重要な証拠であったのです。) The Times October 5, 1971(昭和四十六年)

外国人による日本論は、殆どが表層的で他愛のないものばかりであります。アイヴァン・モリス教授のこの見解は日本民族の宗教観や行動様式を深層に迫るものであり、私達の耳目を聳たせるものであります。日本の本質を再確認する上で三点に渡り重要な指摘があります。

- ①天皇は、外国の大統領や王とは違ひ、一時的な例外の時代をのぞいて政治的・行政的な長ではなかったこと。
- ②日本の天皇は本質的には宗教的な性格が強く天皇を[Priest King](祭司王)として歴史上から発見したこと。故・村松剛先生の見解とも一致してゐる。
- ③天皇の霊的権威を印すものえある[These three items of the regalia](即位の三つの寶器)が[invaluable

tokens](計量しがたい貴重な象徴)として捉へてゐること。

天皇皇后両陛下が、天照大御神を初め八百万の神々の礼拝を何故欠かされないのか、又、和歌の道を踏まれることの意味合ひが、如何なるものか上記三点を念頭に置きますと、より深く靈的な意味合ひが伴って理解されるのではないでせうか。皆様は如何思はれますか。ご見解を聞かせて下さい。

今回は戦争で痛手を負った兵士に対する明治天皇と照憲皇太后(皇后陛下)のお優しい心根と今上の皇后陛下の慰霊の御歌を拝誦することができました。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

- [The Times ,London] October 5, 1971(昭和四十六年)
- 『明治天皇御集』巻中
- 『瀨音 皇后陛下御歌集』大東出版社 平成九年版

平成十九年六月十日(日)十四時から 於て 梅鶯塾

「いさみたつこころのこまををひきとめて」 [Curbing their vainly bounding hearts]

いさみたつ
こころのこまを
ひきとめて
いたでおふ身や
わびしかるらむ

Curbing their vainly bounding hearts
That at the lash do strain,
The men who bleed and lie abed,
How must they grieve amain!

戦場で身に痛手を負ふた兵士の気持ちになってこの御製は詠まれてゐます。例へば、スポーツの団体競技の決勝戦で負傷してしまった選手の気持ちも、無念さやるせなさそして十分に活躍できないで引込んでゐる「侘びしさ」などに於て、此に比し得るものがあるのではないでせうか。監督に「これ位の傷は大したことありません。戦はせて下さい。」と言へば監督は諫めて「お前の気持ちはよく分る。だが休まねば大事に至るから休んで置くのだ。」と言はれ涙を流した経験のある人もゐるでせう。そこは弾丸飛び交ふ戦場であります。前線から少し下がったところに医療用のテントが設営されてゐます。誰が入るのであらうかと他人事ではなく自分自身が担架で運ばれベッドの上に寝かされたのであると頭に描いて見て下さい。傷口を止血して包帯を巻いてもらへば、今すぐにも前線復帰するぞ!と言ふモラルは最高潮の自分であったが、思ひの外、傷が深く思った通りには戦場に立つことが叶はない。そんな折に上の御製を上官から伝へ聞いたならばどんな感慨を懐くでせうか。我身を「いたでおふ身」に置き換へて御製を味はつて見ませんか。

一行目から入ります。

[Curbing their vainly bounding hearts] [curb]=[to control by a curb]=[轡くつわであやつる]の意。[vainly]=[in vain]=[むなしく]の意。[bound]=[leap, spring]=[跳ぶ、撥ねる]の意。御製の「いさみたつこころのこま」は愛馬の「心の駒」でもあるし飼主の「心の駒」でもあるのです。自動車ならばブレーキ(coaster brake)を踏んで止めることとなりますが、馬だから口に咬ませた轡(curb)を引いて止めることとなります。一行目の訳は「空しくも弾む心を抑へつつ」として見ませう。

二行目に進みます。

[That at the lash do strain,] [That]は関係代名詞であり一行目の[vainly bounding hearts]を受けてゐます。[lash]=[a strap to hold an animal]=[動物を繋ぐむち]の意。強意の[do]は次の[strain]を強調してゐます。[strain]=[to make a lash taut]=[綱をぴんと張る]の意。[strain at the lash]は馬が前に進まうと「あせって革紐を引っ張る」の意が込められます。二行目の訳は「前に進まむと焦り手綱は切れんばかりだ」となります。

三行目に進みます。

[The men who bleed and lie abed,] [the men]=[the faithful men]=[忠節なる兵士たち]の意。[who]は関係代名詞。[bleed]は「その110」に既出=「血を流す」。[lie abed]は「その110」に既出=「病床に伏す」の意。三行目の訳は「血を流し病床に伏す忠良なる兵士たちよ」となります。

四行目に進みます。

[How must they grieve again !] この行は感嘆文となっておりますが、音節を整へるために語順が変へてあります。散文的に書き換へますと[How again they must grieve !] となります。[must]は「嘸(何々)であらう、さうにちがひない」の意。[again]=[with all one's might]=「極めて、大いに」の意。[grieve]=[feel grief]=「悲しむ」

四行目の訳は「彼等は嘸や大いに悲しんでゐるだらう!」となります。

『山桜集』に見る君臣の心の交流

「いたでおふ身」の兵士は、野營の床に伏してをりますがそこは砲弾の音が聞こえるでせう。ともに命を懸けて戦ふ戦友や上官に申し訳ないと言ふ気持ちで一杯だったでせう。誰にも知ってもらへない「わびしい」その気持ちが、戦地に送られて来たこの御製により、天皇陛下が自分の気持ち察してをられて詠はれてゐる。「いたでおふ身」の兵士たちにとり最高の励ましであつたでせう。これ以上のお見舞ひはあり得ないのではなかつたらうと私には思はれます。皆様は如何思はれますか。日本軍の強さの秘密がこのやうな君臣の精神の交流より生まれてゐたのであると伺はれるところであります。

日露戦役の従軍将士および遺族、銃後の詩歌を岩崎秀重といふ人が日露戦争の最中(明治三十八年——1905——)に集録・編纂した詩歌集に『山桜集』があります。その中に陸軍少将 中村覚の二首の歌があります。君臣の心の交流が偲ばれるところであります。引用させよう。

進軍の途すから

① 道すからあたの屍に野の花を一もと折りて手向けつるかな

② 病院にて手術を受けし折、恩賜の包帯なりと承りて恐懼にたへざりければ
御手のふるる心地せられて掛巻くもあやに畏きみ恵みの布

(① 「あたの屍」とは敵国ロシアの戦死した兵士の屍のことです。

彼も國のために戦つた兵士であると敬意と慰霊の心を込めて「野の花を一もと折りて手向けつるかな」荒野に咲く一本の花を折り取つて「あたの屍」に手向けて冥福を祈つたことだなあ! と詠んでゐるのであります。私は胸打たれる情景だなあと思はれてなりません。日本兵は敵の屍を蹴飛ばしたり踏み越えたりしなかつたことがここから伺へます。戦場での一般的な予備知識を一掃する麗しい場面です。

この戦士の歌は明治天皇の次の御製と呼応してゐるでせう。

仁(明治三十七年)

國のため あたなす仇は くだくとも いくしむべき ことな忘れそ

明治天皇は「敵となつてゐる相手をうち砕くことがあつても、降服してきた敵兵に対して慈悲の心を決して忘れてはならない」と前年にお詠みになられてゐたのであります。戦場とは無慈悲な修羅場と良く言はれますが、日露戦争では、少なくとも日本側は明治天皇のお諭しが響き合ふやうに兵士の心に伝はつてゐたのでせう。

② 中村覚陸軍少将は、敵の弾に当り戦地の病院に入院したのでせうか。怪我の手当を受けて包帯を巻いて貰ふときに「恩賜の包帯」天皇陛下に戴いた包帯だと聞いてこの上なく感動したのでせう。天皇陛下の「御手のふるる心地」がして「掛巻くも」お守りを巻き付けてもらつてゐるやうに有難い、と詠んでゐるのです。心が貧しくなると「何だ高がこんなもの」と感謝することが出来なくなりますが、「されど恩賜の包帯」として心豊かに受け止めることが出来てゐたのでせう。「あやに畏きみ恵みの布」と最高に価値あるものとして戴くことが出

来てゐるのであります。物質的に豊かになった反面、心貧しくなりがちな現代日本人が学ぶべき心の姿勢ではないでせうか。

「巡問について」

明治三十八年一月には「旅順攻略の功」を賞し第三軍司令長官乃木希典及び連合艦隊司令長官東郷平八郎に勅語を賜つてをられます。難攻不落と云はれてゐた旅順要塞を攻略し、また当時世界最強と云はれてゐたバルチック艦隊を殲滅した偉功を賞してをられたのです。この件は世間に広く知られてゐるところでありますから勅語と乃木・東郷に司令官の奉答文は割愛します。これ以上に私の心を引くのは現地の兵士に対し「巡問」せしめてをられたことであります。

「侍従武官長男爵 岡沢 精を戦地に遣はし、満洲軍・遼東半島軍・韓国駐劄軍^{ちゅうさつ}及び連合艦隊を巡問し、且 天皇・皇后より将校下士卒一同に菓子・煙草等を、傷病兵に菓子料を頒賜して之を犒勞^{かうろう}(勞をねぎらふこと)せしめたまふ、精、二十日東京を發し、宇品港より舟に駕して之に赴く、其の各軍を巡問するや、懇切聖旨を伝へ、且 聖徳の一端並びに御製及び皇后御歌の時事に係はるもの数首を漏らし、以て天皇・皇后の如何に御心を出征将卒の上に注がせたまへるかを知らしむ、皆感泣す、」(『明治天皇紀 第十』9頁)

ここで特に三点に渡り注目を引くところがあります。

①「傷病兵に菓子料を頒賜して之を犒勞^{かうろう}(勞をねぎらふこと)せしめたまふ、」の所であります。傷病兵は医学的見地からでせうか「恩賜の煙草」はありません。菓子料の内容は分りませんが「恩賜の包帯」も含まれてゐたのでせう。

②「聖徳の一端並びに御製及び皇后御歌の時事に係はるもの数首を漏らし、」から上の御製が傷病兵たちに伝はつた経緯が窺ひ知られるところであります。「数首を漏らす」とは政治家でも一般の詩人ならば披露するであります。が、「御製及び皇后御歌」の場合は「数首を漏らす」なのであります。日本文化の奥床しさの粋とも云ふべきところでせう。

③「以て天皇・皇后の如何に御心を出征将卒の上に注がせたまへるかを知らしむ、皆感泣す、」天皇・皇后の御心が侍従武官長を通して出征将卒の上に注がれると「皆感泣す」とあります。この表現に誇張があるでせうか。私は「皆が感動して泣いた」と言ふあるがままの觀察に誇張は一切無い、と思ひます。皆様の感想をお聞かせ下さい。

[bleed(負傷する)]=[physical pain(肉体の苦痛)]よりも[grieve(侘びしい)]=[emotional pain(心の苦痛)]の方が兵士にとって重い意味があると共感を持ってお詠みになられてゐるのです。今回は明治に君臣の豊かな精神の交流を味はふことが出来ました。

〈参考文献〉

○『山桜集』

○『明治天皇紀 第十』

山の諸堡壘を陥れることが出来ました。明治三十八年一月一日、一挙にH砲台・盤龍山新砲台及び望台を占領。ここに於て敵の司令官ステッセル陸軍中將は防戦の策が尽きて第三軍司令官乃木希典陸軍大将に開城の意を告げてきたのであります。その間我が日本の死傷者数は五万九千四百人を数へ、その内で死者は一万五千四百人に上ってゐたのであります。あなた方の祖父母方に尋ねて見れば分るのですが、あなた方の曾祖父または遠近の親類でこの戦ひで戦死された方がきっとをられるのです。

さて、参謀本部次長である長岡外史は一月二日、明治天皇に旅順陥落の報を天皇陛下に伏奏するべき光栄の任を負ふたのであります。報告を奏上したときの状況を『明治天皇紀』から、ここに引用します。

「冒頭の辞終り、將に報告を奏せんとして龍顔を仰げば、神色自若として毫も平常と異なるなし、既にして天皇、報告を聴きたまふこと凡そ十五六分時、時々僅かに顔に赤み、九時四十五分報告終るや、直に式場に臨みたまふ、外史以為らく、天皇天賦沈着、喜怒容易に色に見はしたまはず、」（『明治天皇紀 第十』4～5頁）外史はこの報に天皇が接せられたならば喜びを顔に出されるだらうと思つてゐましたが

「天威隆崇、宸容聊かも動かず、外史、深く自ら其の浅慮を愧ぢ、背に汗して退くと云ふ、」外史が報告する間ご表情に変化が表れるのを何度も期待しながら詳しく報告申し上げたでせう。だが、「宸容聊かも動かず」であつたことに感銘を覚えただけでなく自分の思慮の浅かつたことを恥じ入つてゐるのであります。淡々とした思ひの御製があります。

をりにふれて（明治三十八年）

あたらしき年のたよりにあたのしろ

ひらきにけりつつたへきにけり

（新年の報告で「あたのしろ」当時世界最強を誇つた敵の城を開城したことを伝へ聞いたものだ。）

天皇は、外史の報告に耳を傾けられながらも、敵將のことに思ひを同時に寄せられたからであります。次を引用します。

「天皇、敵將ステッセルが祖国のために尽しし苦節を嘉し、武士の名誉を保たしめんことを欲し、」その旨を山県有朋に下し賜ふたのであります。敵の心にこれほど相手の立場に立つて思ふ、と云ふこのやうな歴史的事例は他に見られない。知つてゐる方があれば教へて戴きたいものです。

天皇が「よろこびの盃をあげ」られるときはまだ来てゐないのであります。砲声が途絶へて静寂が取り戻されるにはまだ戦ひの山を越えねばならない。「しずかにも 世はをさまる」時を戦ふ將軍・兵士達だけでなく全国民が心を一つにして艱難を乗り越へ平和の将来を待たねばならなかつたのであります。歴史を知るに留まらずこの時代の人々に心を寄せ息づかひが感じられねば歴史の眞実に迫る事は出来ないでせう。

最後に日英の御製を拝誦して終ります。

〈参考文献〉

○『明治天皇紀 第十』

○『明治天皇御集 巻中』

岸本 弘氏からの短歌紹介

竹取の翁と聞きし君が住む宮田の里に今日来つるかも
君ならではと思ふ学びの家なりき若きらの並ぶ机見るにも
母君の心づくしの畑つ物もカレーライスに煮込まれてあるらし
新しき才を好まぬ君なれば継ぎて生れくるいのち待たる

述懐(明治二十五年)
 ちはやぶる
 神ぞ知るらむ
 民のため
 世をやすかれと
 祈る心は

The gods omniscient well must know,
 For peace beneath the sky,
 For peace throughout my broad domain
 My heart doth ever sigh.

参考のため『明治天皇御集 卷上』を引用します。「述懐とは心に思ふことをうちいづる義なり。ちはやぶるは神の枕詞にして、語義に諸説あれど、神の威力ある方面をいひ表はせる語なるべし。この御製、民の為に世を安かれとわが祈る心は神ぞしるらむと、上に返して心得べし。」(56頁)

国民のために世界の平和を祈る「わが心を」神は知って下さるだらう、と言ふ明治天皇が“神様への絶対の信”を表白なされた祈りの御製であります。日本的信の世界を図式するならば次のやうになるでせう。

○大円を神とするならば中円に天皇がありその中に国民が存在すると言ふ図式が描かれます。祈りの本質は「清・明・直」で表はされます。「清」の中には清澄(clear)、純潔(pure)、潔白(innocent)、高潔(noble)の意味が含まれるでせう。私達の心はよく怒りや疑念で心が濁ります。しかし神への祈りの回路が通じると不思議にも心が澄んでくる。すると思はずはっとするほど物が美しく見えることを皆様もきっと体験されたことがあるでせう。

例へば、「心が清い者には見る物すべて清く見える」

を英語に直せば[To the pure all things are pure.]となります。

「明」には、光(light, glitter)、視力(eyesight)、眼識(insight, wisdom)の意味があります。

「直」は正しいこと(uprightness)、姿勢が正しい(straight)、曲直と言へば(right or wrong)であります。心がひねくると曲がりがでます。それが無いやうに心の姿勢を正さねばなりません。形容詞で「直な」は、率直な(open-hearted)ともなります。例へば、英語で「彼は何事をするにも公明正大である。」を

英語に直せば[He is perfectly straight in all his dealings.]となります。神の前に一心に祈ることから「清・明・直」は生まれて来るのでせう。

一行目から入ります。

[The gods omniscient well must know,] [The gods]は「その100」に既出=「神々」の意。[omniscient]=[knowing all things]=「あらゆることを知ってゐる、全知の」の意。[must]は「その111」に既出=「～なるに相違なし」の意。音韻面から見ますと

[The - gods / om - ni / scient - well / must - know /]

(弱 — 強 弱—強 弱 — 強 弱 — 強)

弱強調(iambic)であり 四詩脚(Tetrameter)の行となつてゐることが分ります。[well]は格調(Metre)を整へるために入れられたと考へられます。

一行目の訳は「全知なる神々だけは知り給ふに相違なし」となります。

二行目に進みます。

[For peace beneath the sky,] [For]=[toward the goal of]=「希望、期待の目的」つまり、心の活動が向けられる対照を示します。[peace]=[freedom from public disturbance or war]=「社会の騒乱や戦争のないこと」の意。例へば「我々はすべての隣人との平和を望むなり」を

英語に直せば[We hope to be at peace with all our neighbors—with the world.]となります。

明治天皇が希望されてみたところでありませう。[beneath]=[under]=「の下で」の意。[sky]=[heaven]=「天界」の意。

二行目の訳は「世界の平和を求むるを」となります。

三行目に進みます。

[For peace throughout my broad domain] [peace]は二行目の[peace]とは聊かニュアンスが異なるでせう。=[agreement and harmony among persons]=「人々間の和合と調和、平安」の意。[throughout]=[everywhere]=「あらゆる場所で」の意。[broad]=[not narrow ,wide]=「狭くない、広い」の意。[domain]は「その17」に既出=「國」の意。[broad]が付いたことで国内だけでなく遠く全世界にも及ぶと考へられます。天皇が御祈願される「平和」が二行に渡って表現されたことで如何にその御思ひが強く切実な物であるかが伺はれるところでせう。

三行目の訳は「広い國中あらゆる場所に平安が訪れるを」となります。

四行目に進みます。

[My heart doth ever sigh.] [doth]は、「その42」「その83」「その89」に既出、[does]の古形であり[ever]と共に動詞[sigh]を強調してゐます。[sigh]=[long for]=「希求する」の意。詩形を整へるために大幅に語順が換へてあります。散文的に書き直しますと[My heart doth ever sigh for peace beneath the sky, for peace throughout my broad domain.]となります。

四行目の訳は「私の心は、何時も強く希求する」となります。神々の前に額づかれ何処までも清く、直く、明になされ世界の平和をそして日本国民の安寧をお祈りなされてゐるお姿が御製を通して私達の心の目に見へて来るでせう。

【亀山上皇と明治天皇御製に通ふもの】

英国の大歴史家——『歴史の研究』十二巻、や『Civilization on Trial』——で名高いアーノルド・トインビー (Arnold Joseph Toynbee)は「歴史は千年単位で見ないと分らない」と言ひました。その史観に立つならば、日清・日露の戦ひを経験した明治時代と中世に於て元寇の襲来に直面なされた亀山上皇の時代に合ひ通ひ合ふものを感じます。世界制覇を目指して元軍は欧州アジアの両大陸つまり当時の全世界を征服してゐました。日本に対しては文永11年(1274年)と弘安4年(1281年)二度に渡り攻め込んで来たことは皆様ご存知の通りです。北条時宗の毅然たる態度そして勇戦奮闘し撃滅した我が日本の将士の活躍は歴史上に輝きを放ってゐます。その根本のところには朝廷があつたことを見落としてはなりません。亀山上皇は御身を以て国難に代はりたいと、伊勢神宮にお祈りになられました。

春(弘安御百首)

よもの海浪をさまりて長閑なる我が日のもとに春は来にけり
世のため風をさまれと思ふかな花のみやこの春のあけぼの
(都は桜の花咲く春である、弘暎、神前に額づき、國のために、私は祈る。風よ収まれ、平和が来るやうにと。)

雑

世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照らし見る(ゆ)らむ
(私の心は定つてゐる。世のために私の身を捧げること。威力ある神よ、我が心を見そなはし給へ、慈悲の光を照らし給へ、と祈る)

祝(嘉元仙洞御百首)

祈りおくことは違はず神もきけわがすべらぎの千代の行末

(祈り申し上げることは違ふことなく聞いて下さい。我が治める国の千代の幾末までも祈りを聞き留めて下さい。)

夜燈

この世には 消ゆべき法の ともし火を 身にかへてこそ 我は照らさめ

(この世の正義の火はまさに消えなんとしてゐるが、私はその火を我が命に代えて照らし続ける意志である)

嘉元百首の歌よませ給うけるに

命にも かへばやとおもふ 心をば 知らでや花の やすく散るらむ

(桜の花は易々と散って仕舞ふ。あたかも私が命を喜んで捧げることを知らないかのやうに。)

(『歴代天皇の御歌』139~140頁)

龜山上皇が國の平安を祈られるその御姿勢に心が打たれます。あの時代に戦ふ意志無く元の勢力に戦はずして屈してゐたならば、今の日本はあり得たか。元に服属した国々の一つに成り下がってゐたことは間違ひなく、元に支配された國は、極めて酷い支配を受け文化と歴史は根刮ぎとなり、今日に至るも文明に取り残されてゐます。

龜山上皇は我身に換へてでも國を守るのだと御祈願をなされたのであります。御製からその真剣さ、激しい気迫が切々と伝はります。時の幕府に適切な人物——北条時宗——がゐたことは、日露戦争時に乃木大将・東郷元帥がゐたことに比し得る日本国の幸運だったのではないでせうか。

第二次世界大戦で日本が敗北したのでよく「神風が吹かなかった。日本は神国ではない。」と言ふ俗論がまかり通ってゐますが、ニーチェが「神は死せり」と言ったことに符丁を併せて、厳密な検証が成されないままに思想界を空気のやうに支配してゐます。このままでは日本人に本物の自信は燻り続けるだけでせう。神通力を英語では[*supernatural power*]、または[*divine power*]と言ひます。決して死語ではありません。又、[*Sincerity moves heaven.*]とも云はれます。日本語に訳すと「至誠天に通じる」でせう。

龜山上皇も明治天皇も神に通じる力=[*divine power*]をマスターされてゐたと私は思ひます。皆様は如何思はれますか。

真心を込めて祈ることの大切さを今回は学びました。

《参考文献》

- 『歴代天皇の御歌』
- 『Civilization on Trial』
- 『明治天皇御集 卷上』

「ことしあらば火にも」 [Through fire and water]

述懐(明治四十年)
 ことしあらば
 火にも水にも
 入らばやと
 (りなむと)
 思ふがやがて
 大和だましひ

Through fire and water he will go,
 If woe the land assail,
 Who hath that soul sublime and grand
That loves Yamato's soil. 大和魂

参考のために『明治天皇御集 巻下』を引用します。「ことしの「し」は意を強むる辞、やがては即ちなり。一旦緩急あらば、水火の中にも入らむと思ふが、即ち日本魂ぞとなり。吉田松陰が、^{さん}斬に処せられんとする時歌ひて曰く、

斯くすればすれば斯くなるものと知りながらやむにやまれぬ日本だましひ

と。日本魂はまことにこれなりけり。」(408頁) 私達、凡人は悩みに囚はれて判断を誤り人を罵ることがあります。また臆病風が心を支配して勇氣ある行動が取れなくてあの時あすれば良かったのにと反省し忸怩たる思ひになることが度々あるものです。しかしその次元に留まる分けには行かない再度立ち上がらう、と次のステップを何とか踏み出す経験の繰り返しであります。心に曇りが無く千々に乱れる心が晴れた心境を「明鏡止水」と言ひます。前回祈りの本質は「清・明・直」である、と言ひました。心を曇らせてみた邪念が払はれますと、水面にさざ波立って写されてゐなかつた月が静かに澄んだ水面にはクッキリと写つてゐる、そのやうな心境に共感したいものであります。そのやうな心境を英語では[priceless]=（お金では買へない価値）と云ひます。お金では換算できない無私の心境を大事にしたいものであります。

一行目から入ります。

[Through fire and water he will go,] [Through]=[into at one side and out at the other side of]=[～を通り抜けて]の意。[fire]=[the discharge of firearms]=[火器の発射]の意であり、[under fire]=[敵の銃撃に曝されて]の意となります。[water]=[a moat]=[（城を囲む）濠]の意。[go through fire and water]=[水火をも辞さない、あらゆる危険を冒して立ち向かふ]の意。例へば、「日本兵は激しい砲火に曝された。」を英語に直せば[The Japanese soldiers were exposed to heavy fire.]となります。二百三高地の塹壕の前方には濠が掘られてゐる上に、鉄條網(wire entanglements)が張り廻らされてゐました。

一行目の訳は「日本兵は砲火に曝されながらもあらゆる危険を冒して立ち向かふ」となります。

二行目に進みます。

[If woe the land assail,] [woe]=[great sorrow, distress]=[悲しい思ひ、災禍]の意。[assail]=[to attack violently]=[激しく襲ふ]の意。[land](その108, その109に既出)=[fatherland, mother land]=[「母国」]の意。格調(Metre)から見ますと弱強4詩脚(Iambic Tetrameter)の行と弱強3詩脚(Iambic Trimeter)の行が組み合わされballad調の作品となつてゐます。この行を分析して見ます。

[If woe / the land / as---sail]

(弱・強 弱・強 弱・強) となります。掘って散文的には

[If woe assail the land,]

(If+主語+動詞+目的語)であります。

二行目の訳は「もし災禍が母国を激しく襲ったならば」となります。

三行目に進みます。

[Who hath that soul sublime and grand] [Who]は一行目の[he]を受ける。[hath]=[has]の古形。[soul]は「その69」に既出=「魂、精神」の意。[sublime]=[noble]=「高貴な」の意。[grand]は「その103」に既出=「崇高な」の意。

三行目の訳は「彼は光貴にして崇高なるあの精神を有する」となります。

四行目に進みます。

[That loves Yamato's soil.] [That]は[he]を先行詞に取る関係代名詞。[loves]には三人称単数現在形の[s]が付いてゐます。概括的に[they]としないで一人一人の精神を見つめた上での[he]が主語になってゐることにこの詩の素晴らしさがあるのです。[Yamato's soil]=[Shikishima's land]=「日本の國」の意。

四行目の訳は「日本の國を愛する故。」となります。

三、四行を合はせて大和魂が表現されてゐます。

「愛国心論議」

思想界には、家族愛、隣人愛、郷土愛までは良いが、祖国愛は戦争に繋がるから持つべきでないと云ふ論があります。日本国民は祖国愛は持つことを許すべきではない。それに代はって「人類愛」と云ふ思想を持ち出し賛美するのであります。祖国愛抜きの人類愛に一体どれ程の意味があると云ふのか厳密に考へてみる必要があります。

[Commentary on the Mencius Lectures (Ko Mo Sakki)(講孟筭記)を読んで見ませう。

[The greatest virtue in reading the Classics is that it is necessary not to fawn over (阿る) the sages (賢人) and saints. (聖人) (經書を読むの第一義は、聖賢に阿らぬこと要なり。)]

[If there is even the slightest flattery, the Way is unclear, and studying is profitless and harmful. (若し少しにても阿る所あれば、道明らかならず。学ぶとも益なくして害あり。)]

[It is not good that Confucius left his country of birth and found employment in another land. (孔子生国を離れて他国に事へ給ふこと、よからぬことなり。)]

[As a rule, the virtue owed toward the lord and the father are same. (凡そ君と父とは、其の義、一なり。)]

[If one's lord is foolish and dark, and leaves one's land of birth and goes to another to look for another lord, it would be the same as if one's father were stupid and obstinate, and one left one's own house to make the old man next door one's new father. (我が君を愚なり昏(道理に暗い)なりとして、生国を去って他に往き、君を求むるは、我が父を頑愚として家を出で、隣家の翁を父とするに齊し。)]

日本人は謙虚に学ぶ民族的習性を有してゐるが、縦令、聖賢に学ぶ場合であっても自分の信念を曲げて媚び諂ふやうなことがあってはならない、と厳しく諭されてゐるのです。孔子孟子の一番是認できない点はどこにあるのか。生国を捨てた—祖国を捨て亡命したことにあるのです。祖国は親と同じで悪いからと云って換へることが許されない運命的なものであると云ふのであります。現代的に言ふならば、日本の治世が悪いからと云って別の國に亡命するやうなものであります。グローバル化の時代風潮があるから厳密な線が引きにくい感がありませうが、魂まで他国に売ってはならないと言ふことでありませう。

[Furthermore, he said; "I hear that in recent days all the barbarian countries are adopting (採用する) wisdom (知恵) and talent (才能) and changing their way of governing and that there is a naturally

rapidly growing tendency to overwhelm(転覆させる) and scorn(蔑む) our country(日本). (聞く、近世海外の諸蛮、各々其の賢智を推挙し、其の政治を革新し、駭々然として上國を凌侮するの勢あり。)

[What do we have to counter this (これに反撃するために)? (我何を以てか是を制せん。)]

[Only one thing, that is difference discussed before. I will clarify the righteousness that is the difference between our national polity and of foreign countries : (他なし、前に論ずる所の、我が国体の外国と異なる所以の大義を明らかにし)]

[it is the willingness of the people of all provinces (シナの何省) die for their province, the people of all domain(領地) to die for their domains, (閩国の人は閩国の為に死し、閩藩の人は閩藩の為に死し、)]

[the subjects to die for their lords, and the sons to die for their fathers. If all are like this, then what have we to fear from the foreign barbarians? (臣は君の為に死し、子は親の為に死するの志、確乎たらば、何ぞ諸蛮を恐れんや。)]

[It is my hope that we can work together toward this." (願はくば諸君と茲に従事せん。)] (『The story of Japan vol. III』P. 107~108)

茲には日本が幕末から明治維新にかけて西洋列強に呑み込まれずに独立を保持し得た愛國心の原点が示されてゐます。私は、明治の国民が具体的に発露した祖国愛を感歎しないではをれません。家族愛・隣人愛に厚く、祖国日本をこよなく愛するが故に、祖国が一旦緩急あれば、自己の一個の命を省みずに勇敢に戦ふ日本人の特性を御製に詠まれたのであります。

《参考文献》

○「The story of Japan vol. III」

○『明治天皇御集 卷下』 平成十九年七月八日(日)14:~於て、梅鶯塾

「いかならむ事にあひても」 [In all emergencies that rise,]

折にふれて(明治三十七年)
 いかならむ
 事にあひても
 たわまぬは
 わがしきしまの
 大和だましひ

In all emergencies that rise,
 'T will rise to aught that's grand,
 Yamato's spirit stout and brave
 Of Shikishima's land !

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「わが国粹の精華たる大和魂をうたひ給へるなり。」(233頁) 明治三十七年の「折にふれて」の御製は四十七首あります。この御製の前は次の御製でありました。

をりにふれたる(明治三十七年)
 うつせみの
 世のためすすむ
 軍には
 神も力を
 そへざらめやは

If in the cause of wrong'd mankind
 My avenging sword I bare,
 Why need I doubt but that the gods
 Will fight my righteous war ?

思ひ出されましたか。日露戦争に於ける日本の兵士達が我身を省みず世界の平和のために戦ひ進むその様子を御詠嘆され御製に詠んでをられるのです。戦ふ兵士達に対しては「神も力を」添へて下さってゐるのでありませう。

「いかならむ事にあひてもたわまぬ」とありますが、「たわまぬ」とは『古語辞典』に拠れば、①押されて曲がる②心弱くなる、飽きて疲れる であります。芯が硬いと激しい力を加へるとポッキリ折れてしまひます。柔軟であるならば復元力で元に戻ることが出来ます。「大和魂」と言へば何となく硬くて曲がらないイメージがありますが、この御製で使はれてゐる「たわまぬ」はどうでせうか。皆様は「大和魂」と云へばどんなイメージを描きますか。硬くて曲がらない榎の木ではなく、風が吹けば柔らかく撓る竹や楊柳をイメージされて詠まれてゐるのではなからうか、と私は思ひます。もし榎の木であったならば

「いかならむ事にあひてもたわまぬ」ではなく

「いかならむ事にあひても折れざる」と詠まれてゐるところでせう。如何に強い風が吹いてもそれに逆らわずに柔らかく撓る。だがすぐに復元力で元に戻って少しも「たわんで」ゐない。それが「大和魂」ではないでせうか。

一行目から入ります。

[In all emergencies that rise,] [emergency]=[an unexpected state of affairs calling for prompt

action]=「緊急の事態」の意。[in an emergency]=「一朝事あるときは」であり、例へば「我々は万一に備へなければならぬ。」を英語に直せば[We must provide against (all) emergencies.]となります。[that]は関係代名詞。[rise]=[to come about, happen]=「生ずる」の意。一行目の訳は「生ずるあらゆる緊急事態に於て」となります。

二行目に進みます。

['T will rise to aught that's grand,] ['T]=[It]のことであり、語頭音省略[Aphaerisis](アフィリス)であります。ここでは、格調を引き締めるために余剰音節を縮約(contraction)してゐるのです。[will]は「傾向、習性」を表はします。[rise to]=「立つ」の意。[aught]=[anything]の古体であり=「何でも」の意。[that]は関係代名詞。[that's]=[that is]。[grand]=[stately]=「偉大な」の意。二行目の訳は「偉大なことなら何事にも立ち上がるものだ」となります。

三行目に進みます。

[Yamato's spirit stout and brave] 前行の['T](それ)はここで具体的に示されます=[Yamato's spirit](大和だましひ)のことであります。[stout]=[sturdy, strong of character or purpose]=「逞しい、性格又は決意が強固な」の意。[brave]=[courageous]=「勇敢な」の意。[stout][brave]は後ろから前にある[Yamato's spirit]を修飾してゐます。三行目の訳は「逞しく勇敢なる大和だましひよ」となります。

四行目に進みます。

[Of Shikishima's land !] [Of]=[proceeding from, belonging to]=「～から出た、～に属する」の意。[Shikishima]は「大和」に係る枕詞であり日本の別の呼び方です。「大和だましひ」がどこから生まれるかの起源が書かれてゐますし切っても切れない不即不離の関係がこの行で示されてゐます。四行目の訳は「敷島の國より出づる!」となります。

「大和だましひは兵隊だけが持つものであるのか？」

明治神宮編に掛かる『新抄 明治天皇御集 昭憲皇太后御集』角川文庫版を見れば「大和だましひは戦場の兵隊だけが發揮してゐるのではない」と言ふこれまでとは違った見解を懐かざるを得ない気持ちになります。「折にふれて 明治三十七年」の御製には五十四首の数にも上ってをり、次の御製が加はつてゐます。読んでみませう。

戦の にはにもたて 仇波に(註) 沈みし人の 惜しくもあるかな
(註) 明治三十七年六月、常陸丸がロシア艦に撃沈された。

註にあります常陸丸は軍艦ではないのです。輸送船として日本海を通航してゐたところをロシアの軍艦によって撃沈されてゐたのであります。ロシアのこの所行は人道的に許されない行為であることを見逃すと問題の本質は掴めません。『明治天皇紀 卷十』には詳しく述べてありますから読んでみませう。

「ロシア艦我が輸送船を襲撃す」

「敵のウラジオストック艦隊玄界灘に現はるるの報至り、続いて陸軍輸送船 和泉丸・常陸丸・佐渡丸等遭難の報至る、是より先、露国巡洋艦ロシーヤ、グロモボイ、リューリクの三隻は、去る十二日海軍中將ベソブラーゾフ指揮の下にウラジオストック軍港を發し、海上に於ける我が軍交通の妨害運動を行ふ、是の日和泉丸は塩大澳より宇品に帰港せんとし、午前九時頃烟霧冥蒙たる間に筑前沖に抵りしが、突如グロモボイより砲撃を受けたるを以て、全速逃走を図れりと雖も、敵は益々近接して頻りに砲火を注ぎ、死傷三十二人を出したるを以て、其の遁るべからざるを覚り、船長以下総員端艇四隻に乗りて以て敵に投ず、」このやうにして和泉丸は死傷者

三十二名を出し、敵に投降したのであります。

「常陸丸の殉難」

常陸丸は危険を冒しながらも輸送の任務を継続してゐました。十六日午前十時頃玄界灘を航行してゐると口シーヤ以下三隻で砲撃を仕掛けてきました。監督官海軍中佐山村弥四郎は「一意逃走を図ると共に、信号助手たる水兵三人に命じて秘密図書を消却せしめ、飛弾の間に在りて諸般の指揮に任せしが、遂に敵弾に斃る、」敵に知られてはならない公用図書及び郵便物は悉く焼き捨てて、その末に敵弾に斃れたと言ふ箇所に、目が止まります。

「船長英国人ジョン・ガンベルは猶前進を続けて逃れんことを図る、」とありますから

日本人だけではなかつたのです。「ガンベル及び機関長ジェームス・エッチ・グラス、運転士エス・ジェー・ピッシュヨップの三人亦皆難に殉ず、共に英国人なり、」日英同盟下の友邦であるイギリスの人たちの姿がここに見え哀悼の意を捧げたく思ひます。彼等の士気^{モラル}も高かつたことが伺はれます。

撃ち沈められた常陸丸には補充の兵隊乗ってゐました。また、「公用図書及び郵便物」があつたようです。ここは、心を留めて読むところであります。郵便物とは、戦地の兵士にあてて国元から送られた便りなのです。国元からの便りを待ってゐる兵隊さん達の気持ちが偲ばれてなりません。今度の輸送船で来るに違ひないと待ってゐる手紙が焼却されて仕舞つたのですから、遠い満洲の地で戦ふ兵士との心の絆が切られたことになり残念であります。

明治三十八年頃の「戦友」と言ふ余情に富む歌が心に浮かびます。

戦友

1. ここはお国の何百里 はなれて遠き満洲の
赤い夕日に照らされて 友は野末の石の下
2. 思えば悲し昨日まで まっさき駆けて突進し
敵をさんざん懲らしたる 勇士はここに眠れるか
3. ああ戦いの最中に 隣に居つたこの友の
にわかにはたと倒れしを われは思わず駆け寄つて
4. 軍律厳しい中なれど これが見捨てて置かりようか
「しっかりせよ」と抱き起こし 仮包帯も弾の中
5. 折から起る突貫に 友はようよう顔あげて
「お国のためだかまわずに 遅れてくれな」と目に涙

この「涙」の意味には公の為には、致し方ない私情を殺して先に行つてくれ、と言ふ深い意味合ひが籠つてゐます。平時ならば応急手当を受け救急車で病院に運べば助かるかもしれませんが、戦場の非情さがあります。

人間が置かれてゐる状況が厳しくなるほどそれに比例して友情が厚くなる、とよく言はれます。本当に厚い友情が歌に歌はれてゐることがお分かりになるでせう。満洲の荒野で悲しくも命に關はる重傷を負つた友を、庇ひ「しっかりせよ」と抱き起こし仮包帯をする。弾雨の下で介護する姿が目には浮かんで来ます。友を残して進撃せねばならないのですから後ろ髪を引かれる思ひであつたでせう。

6. あとに心は残れども 残しぢやならぬこの身体
「それじゃ行くよ」と別れたが 永の別れとなつたのか
7. 戦いすんで日が暮れて さがしにもどる心では
どうぞ生きていてくれよ ものなといえと願うたに

一日の戦闘行為が終り日が暮れて倒れた戦友を「どうぞ生きてみてくれよ、一言でも良いからものを言つてくれよ」と願ひながら探しに戻るのであります。願ひは叶はず友は空しく冷えて死んでゐたのであります。そこでしばらく号泣したに違ひありません。友との出会ひが回想され次に歌はれます。

10. それより後は一本の 煙草も二人わけてのみ

ついた手紙を見せ合うて 身の上ばなしくりかえし

寮に入れられて厳しい練習をさせられてゐる部活動生は、兄弟以上の仲となるものであります、それも生死

を懸け、運命を共にする戦友の仲には及びがたいものがあるでせう。お互ひに胸襟を開き「一本の煙草を二人で分け合つてのむ」つき合ひが思ひ出され歌はれます。また「ついた手紙を見せ合ふ」のでありました。慰めの少ない戦場では最大の心の慰めは国元から来た手紙を読むことであつた。その手紙が、ロシアの軍艦が輸送船への砲撃を繰り返したので、焼き捨てられたのであります。御製にあります「いかならむ事」とは、予想も付かない魔が事であり、小さくて見逃しがちであります。日本の輸送船の兵士と家族の心を繋ぐ手紙が消却されねばならなかつたことが、この範疇に入るでせう。手紙が兵士の所に届けられなくなつたことで心が「たわむ」ことがないやうにと、明治天皇は祈りを込めてをられるに違ひありません。

今回は御製を通して、大和魂の本質を偲ぶことができました。

《参考文献》

- 『思いでの軍歌集』野ばら社（昭和四十年）
- 『新抄 明治天皇御集 昭憲皇太后御集』角川文庫版
- 『明治天皇御集 巻中』

「山をぬく人のちからも」 [The mountain-hurling power of]

心(明治三十七年)
山をぬく
人のちからも
敷島の
大和ごころぞ
もとゐなるべき

The mountain-hurling power of
The mighty man of war
Flows from Yamato's genial heart
Of Shikishima's shore.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「心（明治三十七年）」には次の四首が掲載されてゐます。

「心

ちかひたる おのが心を しをりにて 誠の道を わけつくしてむ

（しをりは山中などにて路に迷はざらなむが為、樹の枝を折りかけて道じるしとなすをいふ。ちかひたるおのが心は、みずから誓ひて志を立つるをいふ。わけ尽してむは、必究め尽さむと、決意を示して将来に期待したまふ辞。）

私達は、年の初めに今年の誓ひを立てます。しかし、その誓ひもいつの間にか瑞々しさを失ひ忘れ去られる傾向があります。三日坊主を防ぐために色々な方法があるでせうが、この御製を、折々思ひ出し朗々と拝誦することにより「誠の道」を「わけつくす」べき力を戴きたいと思はれませんか。

しきしまの 大和心の ををしさは ことある時ぞ あらはれにける

（平和の時には、穏やかに静かなること春の海のごときも、いざとなれば、その本来の性を現はし来る、これぞやまと心との御意。）

百戦錬磨の武勇の人は、「ことある時」に現はれるものだ、と御詠嘆なされてゐます。平時ではそのやうな人は、花を愛し、管弦をたしなむ文化的な人なのでせう。『徒然草』の八十段が思ひ出されるところです。「百たび戦ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定め難し。その故は運に乗じて、仇をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。」たとへ百戦して百勝したとしても、まだそれだけでは武勇の人といふ名誉を定めることができかねる。そのわけは、良い運に乗じて、敵をうち破るときは誰でも勇者でないものはない、と兼好法師は言ひます。次に「兵尽き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死をやすくして（註・迷はず乱れず従容として死んで）後、はじめて名をあらはすべき道なり。」生きてゐるうちに他人に向かって武勇を誇る人間は、家庭で子供に語るのは別としても、二流の人間である、と言ふことになるでせう。

「生けらむ程は、武を誇るべからず。」生きてゐるであらう間は決して武勇を誇ることがあつてはならない。この伝統が乃木将軍、東郷元帥が戦はれた日露戦争の時代に生きてゐたことが、偲ばれるのであります。

山をぬく 人のちからも 敷島の 大和心ぞ もとゐなるべき

（山をぬくは、山をひきぬくほどの強く雄々しき力の義。項王が「力拔山兮氣蓋世」の句より出づ。）

かざらむと 思はざりせば なかなかに うるはしからむ 人のこころは

（中々には却つての義。うるはしはここは美しくの意に用ゐ給へり。虚飾が人心の天真を失ふを誡め給へる

「うるはしき心こそ」

言葉を飾り、巧みに人を惹き付け如何に惑はすかが、マスメディアの世界を支配してゐるかのやうです。昨年(平成十九年)の世相を表す恒例の「今年の漢字」が「偽」に決まりました。京都の清水寺で森清範貫首が揮毫してゐる姿が印象に残ってゐます。「かざらむと 思へ」ばどこかしら「偽り」を伴ふ、自分の気持ちを偽らずに「かざらむと 思はざりせば」却って、虚飾のないうるはしい「人のこころ」が生まれる、と明治天皇がお詠みになられてゐます。先づは、私自身のこころに「うるはしい人のこころ」を取り戻すことから始めたいと念ずるところです。皆様もこのやうに人の心の姿勢を見つめ直させる御製は、是非とも暗唱して下さい。その上で折にふれ、自然な気持ちで朗唱されては如何でせう。その際、修養とか努力とか言った堅苦しいものではなく、清らかな空気を深呼吸するやうに又は、お茶一杯、お酒を一杯と同じやうに、ごく自然になされることをお勧めします。

一行目から入ります。

[The mountain-hurling power of] [hurl]=[throw or cast forcefully]=「強く投げる、たたきつける」の意。[power]=[physical or mental might]=「肉体的なまたは心の力」、[powers]は「神的な存在・力」を表はします。[of]=「所有関係」。

一行目の訳は「山をも引っっこ抜いて投げる力を所有する」となります。

二行目に進みます。

[The mighty man of war] [mighty]=[powerful]=「力の強い」の意。[man of war]=「戦士」の意。

二行目の訳は「力の強い戦士の」となります。

三行目に進みます。

[Flows from Yamato's genial heart] [flow]=[to move in a stream]=「小川となって流れる」の意。[from]=[used to indicate a starting place, source]=「出発するところ、源」の意。[genial]=[mild,warm]=「温和な」の意。[Yamato's genial heart]=「大和心」の英訳であります。その内容は堅ぐるしいところがなく温情があり気持ちのいい心映えとして表現されてゐます。

三行目の訳は「温和な、大和ごころに源を発する」となります。

四行目に進みます。

[Of Shikishima's shore.] [Shikishima]は「その85」「その103」に既出。「その103」では[In Shikishima's land]でありました。ここでは二行目の行尾の[war]と脚韻(Rhyme)を踏むやうに[shore]=[^{そか}陸、國]が使用されてゐます。

四行目の訳は「敷島の國の」となります。

[[Personification](擬人化)について]

一行目の行頭にある[The mountain]は[hurling power]と続くことから[Personification](擬人化)されてゐることを見抜く必要があります。すると、二行目の行頭にある[Flows from]から何を連想することが出来ますか。[river]であります。山の奥深いところでは、きらきらと光を放ちながら湧き出している[spring](泉)があります。それが、[stream](小川)となって流れ出すのであります。

これを単なる情景描写として頭だけで解釈するならば、心は貧しく干からびて仕舞ひます。私達の内面に豊かに受け止めて見て下さい。さすれば、[spring][river]とは何であるか?あなたの体の中にも存在する貴重な何かではないか?それは大自然の生命の本源を意味してゐるだけではなく、私達人間一人一人を生き活きと生命

化する[the great Circle of Life]を[Personification](擬人化)してゐると私達の[heart]に受け止めることができるでせう。擬人化された[stream](流れ)は、次第に大きくなり[river]となります。[river]はどこまで広がるのでせうか?最終行の[Shikishima's shore]敷島の國の海辺までの広がりがあります。日本全国津々浦々に及んでゐると鑑賞されます。スケールの大きい詩であることがお分かりになつたでせうか。

[The mountain hurling power](山を抜く力)も [river]も [Shikishima's shore]も[Personification](擬人化)されてゐると私は申しましたが、山を抜く力や川や海岸が一体何故に擬人化されてゐるのかお分かりになりましたか?御製にある「山をぬく人のちから」は確かに日露戦争を勝利に導いた[The mighty man of war](力の強い戦士)にあることを讃へて詠まれてゐます。だがよく味はい直してみませう。その力が生み出される「もとゐ」には「敷島のやまごころ」がある。逆に言へば「敷島のやまごころ」がその人達に無いならば決して「山をぬく力」は生まれなかつたと言へるでせう。日本文化の幸運とでも云ふべき「山をぬく力」が、生まれたことを日本民族最大の喜びとして受け止め感謝の念が湧くならば、私の心の中に「敷島のやまごころ」が脈々と甦り自己の内面の[river]が日本文化の[river]と結び付くのではないでせうか。

[[The Lion King]が教へるものとの共通点]

ライオン・キングである[Mufasa]王は熱いアフリカの太陽が照りつける國を平和に統治してゐますがある日、王位継承者となるべき[Simba]をつれて[the Pride Lands]に行きます。全ての動物が集まり見守る中で[Pride Rock]に二人が立ちました。[Mufasa]王は[Prince Simba]に対して越えてはならない[that shadowy place]のことを厳しく言ひます。そこでの交はされた王様と王子との会話の部分を読んで見ます。

[“But I thought a king can do whatever he wants, said Simba.]

[Mufasa explained. “There’s more to be king than getting your way all the time .]

[You need to respect all creatures.]

[We are all connected in the great Circle of Life.”]([Adapted by Liza Baker, The Lion King : A Read-aloud Storybook ,Disney Enterprises ,Inc. 1999 (H. 11)])

[Mufasa]王は、あらゆる生き物の生命は、みな大きな生命の環の中でお互ひに結びついてゐることが実感できてゐたのでせう。素晴らしい王様です。だが王位継承者には、その実感が[hand down]されなかつたやうです。日本では、明治天皇により三十一文字の詩に詠み込まれ、私達が今も感得することができるのであります。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

○([Adapted by Liza Baker, The Lion King : A Read-aloud Storybook ,Disney Enterprises ,Inc. 1999 (H. 11)])

○『明治天皇御集 巻中』

○『徒然草』

「國といふくにのかがみと」 [To all the nations of the world]

鏡(明治三十七年)
 國といふ
 くにのかがみと
 なるばかり
 みがけますらを
 大和だましひ

To all the nations of the world
 Make it a mirror clear,
 And polish splendent to the full
 Yamato's spirit rare !

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「國といふ國は、世界万国の義、かがみ、ここは手本といふ義に近し。大和だましひは、前にあるやまと心に同じ。武士道の精神を發揮せさせ給へる御製。」(221頁)「ばかり」は動作・状態の程度を表はす「全世界の鑑となるほど磨け」の意であり気宇広大なる御製です。

一行目から入ります。

[To all the nations of the world] [the nations of the world]は「世界の諸国家」の意であり[all the nations of the world]は「世界の全ての国々」の意となります。[To]は「(対照)・・・に対して」の意。

一行目の訳は「世界の全ての国々に対して」となります。日露戦争は、黄色人種が白人に対して戦いを挑んだ世界史上最初の戦ひでありました。明治天皇は日本の全ての兵士が国際法に則り正々堂々と戦ふことを求めてをられました。我が日本軍の兵士はご期待に添ふべく全世界が注目してゐる檜舞台に立ってゐると云ふ矜持を漲らせ、何恥じる事なき戦ひをしたのでありました。

二行目に進みます。

[Make it a mirror clear,] [Make]に始まる命令文となってをります。[it]=[In archaic ballad style, to mean "the subject of my song."] =「古代のバラード調では『私の歌の主題』を意味する」ここでは四行目の[Yamato's spirit]を指すでせう。[a mirror]は三種の神器の一つであります。[the Three Sacred Treasures in Japan(三種の神器は ①mirror =exemplary ,model=「鏡、手本」② sword =「劍」③ a common shaped beat of agate kind=「瑪瑙の曲玉」)であります。] [clear]=[free from clouds, haze, or mist, innocent]=「雲や霞や霧が掛かってゐない、潔白な」の意。明治天皇は敷島の道を厳しく行じ給ふことにより率先して鏡を磨いてをられるのです。一番忙しい明治三十七年に、最大数の御製を残してをられることから伺へます。

二行目の訳は「くもりなき鏡となし」となります。

三行目に進みます。

[And polish splendent to the full] [polish]=「つやの出るまで磨く」の意。[splendent]=[splendor]の古語であり=「光輝」の意。[to the full]=[to the highest state or degree]=「最高に、心ゆくまで」の意。

三行目の訳は「その上で心ゆくまで磨け」となります。

四行目に進みます。

[Yamato's spirit rare !] [rare]=[excellent, not common]=「優れた、貴重な」の意。

四行目の訳は「貴重なる大和魂を」となります。

「一般論としての兵士の品格とは」

人類の歴史を振り返ってみるとき、兵士の品格が、通弊として一番乱れるときは何時なのでせうか。考へてみませう。

- ①目標に向かって戦ってゐるとき
- ②勝ち鬨を挙げてゐるとき
- ③勝利が決定した後に、束の間の自由を得、戦勝気分が街に繰り出すとき

と②では軍規の下にあるから、それほど乱れることがないでせう。勝利を自分のものにした後の③が兵士に一番獸性が抑へ難い程出て来るときであると言はれてゐます。その点で、乃木將軍は、人間性を良く見抜いてをられたに違ひありません。占領した市街の要所要所には憲兵隊を張付けて、略奪や強姦が起らないやうに見張らせてゐたと言はれてゐます。洋の東西を問はず、世界史上、戦利品としての強奪は、文書による通達だけでは防止することが出来ない、と言ふ歴史的事実を冷徹に直視しなければなりません。さすれば、乃木將軍の執られた具体策は、必要にして不可欠な軍政であつたのでせう。明治の將軍は、皇軍兵士だからと言って、口先だけで軍規が守れるなんて甘い見通しを立てはしなかつたのであります。

「劣勢に立たされる思想・宣伝戦」

ところで、第二次大戦後になって、中共軍が「南京大虐殺」があつたなどと大々的にプロパガンダを流してゐますが、それは事実に反する政治宣伝なのであります。その学問的な反照は『南京虐殺の徹底的検証』で東中野修道先生がしてをられます。正しく事実を認識せずに一方の論だけでイメージとして結論を抱き、日本軍性悪説に乗せられてゐる憂慮すべき現状がありますが一刻も早く抜け出さないと我が日本は日中の思想戦で劣勢に立たされ続けることになります。

私達は、思想界にも国民心理のなかにも「問ひを發するより前に、答えが定まらぬ」動かし難い時代の空気と云ふべきものが厳として存在することに気付くでせう。そこから一步を踏み出すことはなかなか勇氣の要ることでありますが、自分の頭と心を働かせて「問ひを發する」そこから生き生きとした学問が始まるのです。皆様は「問を發する」ことをなされて本当の学問をしてをられると思ひます。私も何歳になつてもそれを怠らぬ誠実な生き方をしたいものであると念じてをります。

さて、反省すべき点は反省する。反省すべき必要もないことを外圧や世間の空気でも反省させられ「日本軍性悪説」で全てを概括して仕舞ひ、其処に思考が停止してゐては我々の精神は停滞するし本来あるべき精神の自由も失はれるのではないでせうか。

第五十二回合宿教室で防衛大学校 安全保障・危機管理センター長の太田文雄先生が「世界情勢をどう見るか」と題してお話をなされました。「戦争史に於ける武力戦の比重の変遷」では第一次大戦末期から心理戦、思想戦の比重が高まる(英国のノースクリップ卿——心理戦——、ロシア革命によるイデオロギー輸出戦等)第二次大戦から、これまで軍が行つていた戦争から一般市民が巻き込まれる戦争へ。最早「銃後」という考えはなくなる」と話されました。さう云へば、米軍による東京大空襲は一般市民が焼き殺された。(このときの死者は十万人を越えると云はれる) 広島・長崎への原爆投下でも一般市民が多数殺された。(二十万人と云はれる。計 三十万人の一般市民の大虐殺の目を逸らすために南京事件が利用されたやうである。) [Remember Pearl Harbor]と勝者・アメリカは、日本軍の作戦を非難するが——考へて欲しい——真珠湾に集結した戦艦を宣戦布告(英米の指導者は既に攻撃が仕掛けられるのをハワイの指揮官に故意に知らせなかつたが) 宣戦布告をして堂々と然も正当に攻撃したのであり、ハワイの一般市民を攻撃したのではない。日本側の弁明は、悲しくも、葬り去られたままであります。勝者の論理である「勝てば官軍[Might is right.]」の一方的な裁きが、それ故に今日でも私達日本人心理を呪縛し続けてゐる。

太田氏は「冷戦後の世界」情勢にふれ「文化、思想、道徳も戦い的手段に」なつて来たから「国民一人一人が最前線の戦士」の自覚がないならば国家の安全保障は保てない。英国や米国では大学でトップレベルの学生が[National Security Office]に志願する傾向があると話された。果たしてこのままで日本は、情報戦で戦ふことも生き残ることも出来ないのでは?と憂ひが深まるのであります。皆様は如何思はれますか?ご意見を聞か

せて下さい。

「結論を出す前に」

私達の思考が一方的な情報だけで結論を出し、それ以上問ふことを止めてある場合が意外と多いものであります。もし私が裁判官であるならば、一つのある問題に対して誤った裁きを下したことになります。例へば、英語で「Judges should have two ears, both alike.」と言はれることがあります。その意味は「判決は両方の言ひ分をよく聞いて下せ。」であります。シェークスピアに『ヴェニスの商人』があります通り一方だけの言ひ分を聞いて判断すれば悪徳商人である強欲な金貸し[Shylock]の思ふがままになり借金をしてゐる船主は心臓の横の肉を一ポンド切り取られてしまったでせう。私達は国際社会で生き抜くためには名裁判官[Portia]の機知を持って置くべきなのであります。

ところで私達が歴史を見ると、相対立する両方の言ひ分を公平に聞かされずに裁かれた判決を持たされてしまつてゐる向きはないか。考へて見なければなりません。例へば、中共軍の言ひ分がマスメディアを通じて一方的に流されその渦の中に巻き込まれ、日本軍の弁明は聞かされないで思想形成を強いられてゐる。裁判官だけでなく人間として公平な判断をせよと言ふ観点から英語で「A man should hear all parts ere(=before) he judge any.」と言はれます。この意味は「人は誰でも裁く前に全ての側の言ひ分を聞くべきである。」であります。中共軍が云ふやうに「南京に大虐殺」があったのか無かったのか結論を出す前に、少なくとも東中野修道先生の『南京虐殺の徹底検証』位は読んで欲しいものであります。

「みがく ——切磋琢磨——について」

「みがく」に大きくは二つの意味があります。

- ① 琢磨する = [to polish, apply oneself to] 「あなたは切磋琢磨の功を積め」= [You must apply yourself diligently to the task.]
- ② (学業、人格など) 磨く = improve, cultivate 「あなたは品性を磨かねばならない」= [You must cultivate your character.] 何れにしても黙々と身を修めて行く事になるべきで他人を云々するより先に自分に向けられる成句であります。

「國といふくにのかがみとなるばかりみがけますらを大和だましひ」

明治天皇は「ますらを」に呼びかけられてゐます。「ますらを」は誰ですか。他を見てはなりません。時代を超えて己への呼びかけとして受け止めるべきであり、[cultivate](耕し)[polish](磨く)のは私自身の心でなければ何の意味も持たないのではないでせうか。

幕末から明治に掛けての歴史や伝記を読みますとき、切磋し琢磨し合ふ国民的な気風は余程強いものがあつたやうです。山県有朋あり山本権兵衛あり。東郷平八郎元帥も児玉源太郎・乃木希典の諸将帥を生み出してゐた。このやうな戦時の指揮官・将帥は「國といふくにのかがみとなるばかり」の仰ぐべき人物であつたと思はれますが、どのやうな資質を持つてゐたのか考へてみたことがありますか。ドゴールの言葉を借りてせまつて見ませう。

「民衆の精神的誓いや情熱的共感、言行一致・苦難を使命とし、一身を擲つ指導者だけに与えられるものである。かような人士からは、人を安堵させ、希望を抱かせる磁気が発散されているのである。そして、従う者たちは、指導者の存在を目的そのもの、希望そのものと見て、ひたすら献身する。もはや、事の成否などは問題ではなくなるのである。」『現代軍事論の盲点』参照。

思ふに山県有朋・山本権兵衛・東郷平八郎元・児玉源太郎・乃木希典の諸将帥にとっては明治天皇が「人を安堵させ、希望を抱かせる磁気が発散されている」希望の輝く星の如き御存在であつたでせう。命を懸けて戦ふ兵士たちにとっては山県有朋・山本権兵衛・東郷平八郎元・児玉源太郎・乃木希典の諸将帥は「言行一致・苦難を使命とし、一身を擲つ指導者」であるが故にやはり「人を安堵させ、希望を抱かせる磁気が発散されている」中核的存在であつたに違ひありません。

最後に二度日英の御製を拜誦して終ります。

《参考文献》

- 『「南京虐殺」の徹底検証』亜細亜大学教授 東中野修道 展転社平成十年八月十五日出版
- 『現代軍事論の盲点』重松正彦 昭和五十九年五月 福岡国民文化懇話会
- 『剣の刃』小野繁訳

平成十九年九月九日(日) 10:00～ ソーメン流しの後に熊本大学香川君も参加

「石だたみかたきとりでもいくさ人」 [The fastness call' d impregnable,]

折にふれて(明治三十七年)
 石だたみ
 かたきとりでも
 いくさ人
 みをすててこそ
 うち砕きけれ

The fastness call'd impregnable,
 Compact of adamant,
 Now yields to men who self transcend
 And force the dire event.

参考のために『明治天皇御集 巻中』を引用します。「難攻不落といはれたる旅順陥落の報をきこしめしたる折の御製ならむと拝察せらる。」(236頁)旅順の要塞は守るのに易く、攻め込む方は一望の下に曝されてみて、これほど攻めにくい要塞は無かったと云はれてゐます。戦人とは、私達とどのやうな関係にあるのでせうか。冷たい関係の赤の他人と思つては、この詩は鑑賞できたことにはなりません。「みをすててこそうち砕きけれ」身を捨てた人は自分の肉親であるし直接の先祖であるとの思ひを込めてじっくりと味はって見て下さい。尊い命を捧げた方々であることが分つて来るでせう。

一行目から入ります。

[The fastness call' d impregnable,] [The fastness]=[The fortress]=[要塞]の意。[call' d]は語中音省略(Syncope)でありまして=[called]のこと、[call]=[to announce with authority]=[權威を以て告げる]の意。[impregnable]=[unconquerable]=[征服できない]の意。

一行目の訳は「難攻不落と宣言された要塞」となります。

二行目に進みます。

[Compact of adamant,] [compact of]=[composed of]=[・・・で出来た]の意。[adamant]=[diamond]=[a very hard mineral that consists of crystallized carbon]=[結晶した炭素からなる非常に硬い鉱物(ベトン)]の意。

二行目の訳は「金剛石から出来てをり」となります。一・二行目が主部の働きをしてゐます。

三行目に進みます。[Now yields to men who self transcend] [yield]=[surrender]=[屈服する]の意。[men]=[Japanese soldiers]=[日本兵たち]の意。[self]=[oneself]=[自身、己]の意。[transcend]=[to rise above the limits of]=[の限界を越える]の意。

三行目の訳は「己の限界を越えて戦ふ日本兵たちに今や屈服する」となります。

四行目に進みます。

[And force the dire event.] [force]=[to break open by force]=[力づくで突破する、かちぬく]の意。[dire]=[very dreadful or terrible]=[非常に恐ろしい]の意。[event]=古語。「たたかい」の意。逐語訳をすると「そして恐ろしい出来事を力尽くでこじ開けた」となります。過去の出来事を恰も現在起つてゐることと[review the events](出来事を振り返つてゐる)表現です。[the dire events]は何処で起つたかを考へるとき、一行目の[The fastness](要塞)のことを言及してゐることがお分かりになるでせう。

己の限界を越える日本兵たちに今や降服した。

日本兵がその要塞に飛び込むことが出来たのである」

「橋中佐のこと」

皆様は「軍神・橋中佐」のことをご存知ですか。戦後、歴史から葬り去られてしまっているから、恐らくご存知ないでせう。戦後六十余年を経てみますが、勇敢に國のために戦った先人に触れる機会が奪はれたままなのであります。

歴史を掘り起こさねばなりません。『日本思想の系譜』(695～696頁)から、彼を偲んでみませう。

「橋中佐の名は周太。慶応元年(1865)生れ、明治十四年(1881)陸軍士官学校幼年生徒。しばしば世田谷区若林にある吉田松陰の墓に詣で、その遺徳を敬仰した。明治二十年(1887)七月、陸軍士官学校歩兵科卒業、少尉任官。のち、青森・東京の隊付となる。この頃から死に至るまでのあひだ、彼は軍人、とくに将校たるべきものの徳義心を強調し、毎日「軍人勅諭」を捧読すべきこと、出勤は早く退庁は遅くして部下の進歩向上に努力すべきことを教へ、かつ実行した。

明治二十四年(1891)一月から二十八年十一月まで東宮武官を拝命、皇太子殿下(後の大正天皇)に奉仕した。ついで、近衛歩兵の中隊長・陸軍戸山学校の教官を歴任、明治三十五年(1902)四月、少佐に進級と同時に名古屋陸軍地方幼年学校長となる。

明治三十七年(1904)八月九日、歩兵第三十四連隊(静岡)大隊長として出征。戦陣にあっても敬礼を極めて厳正、毎朝食前には第一線を巡視し、命令を出すときは、その命令を受ける人の立場・都合をよく調べた上、必ず呼び出して直接に命令を本人に下すなど、上に立つ者としての純忠の精神に篤く、また、部下を思ふ至情に溢れ、自己の大隊を良く掌握してゐた。

八月三十一日一時半頃、軍隊手帳をひらいて「軍人勅諭」を捧読中、攻撃命令を受け、直ちに大隊を指揮して戦闘に参加、わづか数時間後の五時四十分頃、^{しゅざんぼ}首山堡南方高地(奉天——現在は瀋陽といふ——南方にある遼陽の西南約八キロ)を一旦占領したが、全身に七カ所の重傷を受け、十八時三十分頃につひに戦死した。」(関正臣)

彼を記念する銅像は^{ちじわまち}長崎県千々石町に大正六年に建てられて今も残されてゐます。私達は雲仙で合宿教室が開催されてゐましたころは度度も参拝したものでした。

英国でも米国でも子供が読む伝記の何割かは軍人が描かれてゐます。子供たちはそれを読むことによって、自分の國への忠誠心やあこがれを抱き勇気や誇りを養成するのであります。日本では戦後軍人は伝記の中から削除されてゐますから、殆どの人が國のために命を捧げた方たちの伝記にふれることが出来ないまま大人になる次第であり人格形成が諸外国の子供たちと比べて^{いびつ}歪な内面的な成長をしてゐることになります。日本人は金儲けばかりで卑怯なことを平気でやると外国の人から云はれますが、一つには幼少時に勇敢な軍人の伝記を読んで成長しないことにあると私は思ひます。

私の小さかった頃までは、酒を飲むと親類の人達と父親たちは軍歌を良く歌ってゐたものでした。今は右翼の宣伝カーからしか流れず、いやな感じのする何となく不愉快なジャンルの歌に追い込まれてゐますが、詩の一節一節を良く味はってみますと、叙情詩としては素晴らしいものが、意外にもあるものであります。「橋中佐」には、その壮絶な戦死のさまが見事に描写されてゐて、歌へば情景がありありと甦って来ます。

「橋中佐(上)」明治37年頃

- 遼陽城頭夜は闌けて 有明の月影すごく 霧立ちこむる高梁の 中なる塹壕声絶えて 目醒めがちなる敵兵の 胆おどろかす秋の風
(敵の陣地のある遼陽城の空は、夜は更けて灯一つ無い戦場の不気味さが漂ふ。薄明かりの有明の月でさへ、一層煌々と照り輝いて見える。
陣地の中声一つしない。決戦を前の緊迫した敵兵の心理が詠はれる。戦場とは、人っ子一人見あたらないところである。一般には「南京虐殺」などが喧伝されてゐるから、観客が五万人ほどもゐる野球場を心に描いてゐる向きもあるますが、姿をちらっとでも見せれば撃ち殺されるのが戦場なのです。)
- わが精鋭の三軍を 邀撃^{ようげき}せんと健気^{けんげき}にも 思ひ定めし敵将が あつめし兵は二十万 防御^{ぼうえい}至らぬ隈もなく 決

- 戦するとぞ聞えたる（攻め込んでくる日本兵を迎え撃つために敵将は二十万の兵隊を集めてゐる。）
3. 時は八月末方 わが籌略は定まりて 総攻撃の命くだり 三軍の意気天を衝く 敗残の将いかでかは 正義に敵する勇あらん（総攻撃の命令が下された。我等三軍の意気は天を衝く。敗残の将はいかでかあらん。我等の胸の内にある勇氣に敵するほどの勇氣は彼等に無いに違ひない。）
4. 「敵の陣地の中堅ぞ 先づ首山堡を乗っ取れ」と 三十日の夜ふかく 前進命令たちまちに 下る三十四連隊 橋大隊一戦に（橋大隊千名に敵の中堅を衝く前進命令が下され、一線に並び立った。この千人の中の一人の兵隊に自分が選ばれた気持ちになり、現実には戦場に立ってゐる思ひにならないと歌の意味は、私達の心に波動として伝はって来ません。決死の覚悟とは如何なるものか思んで見ることが出来ますか。）
5. 漲る水を千尋の 谷に決する勢いか 巖をくだく狂瀾の躍るに似たる大隊は 東雲はる明けの空 敵壘近く 攻め寄せぬ（「漲る水を千尋の谷に決する」とは非常に深い谷を勢いよく水が下るそのやうな凄まじい勢ひを表はしてをり、どんな困難をも、ものともしないで立ち向かふ。「巖を砕く狂瀾」が躍々として迫るごとく歌はれる。）
6. 斯と覚りし敵壘の 射注ぐ弾の烈しくて 先鋒数多たおるれば 隊長怒髪天を衝き 予備隊続けと太刀を振り 獅子奮迅と馳せ登る（敵壘から激しく撃って来る弾丸に数多くの先鋒が倒れた。橋隊長は、決して怯まなかった。「怒髪天を衝き」怒りで髪が総立ちした。激しい形相で太刀を振り「予備隊続け」と敵陣に真っ先に切り込んだ。）
7. 剣戟摩して鉄火散り 敵の一線先づ敗る 隊長咆吼 躍進し 率先 塹壕飛び越えて 閃電敵に切り込めば つづく決死の数百名（倒れた日本の兵隊は数多く出た。倒れた兵隊を乗り越えて突撃を繰り返した。その末で「敵の一線先づ敗る」。隊長は率先して前進する。塹壕を飛び越える。電光石火の如く敵に切り込んだ。間髪を入れずに数多くの兵士が続く。）
8. 敵頑強に防ぎしも 遂にとりてを奪い取り 万歳声裡日の御旗 朝日に高くひるがへし 刃を拭ふ暇もなし かれ逆襲の関の声（敵は頑強に防戦した。それ以上に日本側には決死の勢いがあった。「万歳」を唱えながら日の丸の旗が高く掲げられた。敵が早々と退却したのではない。関の声を上げて逆襲してきたのである。）
9. (略)
10. 折しも咽を打ち貫かれかれ 倒れし少尉川村を 隊長自ら提げて 堀の小陰に縋帯し 再び向ふ修羅の道 ああ神なるか鬼なるか（どの連隊がどの地点でどのやうな戦ひをしたのか、それぞれの細かな点に及ぶ具体的な報告は記録に取られ、毎日お待ちになってをられる天皇陛下に報告をされてゐたのです。川村少尉が咽を打ち貫かれた。橋中佐が堀の小陰に「自ら提げて」縋帯を巻いて差し上げた。慈愛に満ちた神の如きであった。再び心を鬼にして敵に向かって橋隊長は修羅の道を進んで行った。）
- 11~14(略)
15. 「隊長傷は浅からず 暫しここに」と軍曹の 壕に運びていたはるを「否 みよ内田浅きぞ」と 戎衣を脱げば 紅の 血潮りなりとほとばしる（橋隊長に銃弾が当たった。内田軍曹は「傷は深い、暫くここで休んで下さい」と言って看護する。橋隊長は「いや、傷は浅い」と言って軍服を脱げば鮮血が淋漓とほとばしった。戦闘意志の高さが伺はれる。）
- 16(略)
17. 寄せては返し又寄する 敵の新手を幾たびか 打ち返ししも如何にせん 味方の残兵すくなきに 中佐は更に命ずらく「軍曹銃を執って立て」（敵が押し寄せて来れば押し返す、敵は人数が多いのである。新たな兵を投じて押し寄せて来る。味方の残兵は数少なくなった。我等の先達は、弱気になって退却せよ、ではなかった。「軍曹銃を執って立て」と命じたのであった。勝機は時の運とも言ふ、神が味方するまで戦ひに戦ったのである。）
18. 軍曹やがて立ち戻り「辛くも敵は払へども 防ぎ守らん兵なくて この地を占めんこと難し 後援来たるそれまで」と 中佐を負ひて下りけり（敵を払ふことだけは出来たがこの地の占領を続ける事は出来ない。歩けない中佐を内田軍曹は背負って下ったのであった。）
19. 屍踏み分け壕を飛び 刀を杖に岩を越え 漸く下る折も折り 虚空を摩して一弾は 復も中佐の背を貫きて 内田の胸を破りけり（屍とは私たちの肉親であり、先祖様であるのです。内田軍曹に負はれて下るその刹那、

橋中佐の背中に一弾が当たった。その銃弾は橋中佐の背中を貫通して内田軍曹の胸を打ち破った。

歌から、感慨無量の戦ひをなされたのが偲ばれます。このやうに自己の限界を優に超える戦ひの総和が難攻不落と云はれたロシア軍の要塞を落としたのであります。

『坂の上の雲』の視点

司馬遼太郎の『坂の上の雲』は乃木將軍を「凡将・愚将」として否定することで自分の視点を打ち出してゐます。

「旅順における要塞との死闘は、なおもつづいている。

九月十九日、乃木軍の全力をあげておこなわれた第二回総攻撃も、惨憺たる失敗におわった。作戦当初からの死傷すでに二万数千人という驚異的な数字にのぼっている。

もはや戦争というものではなかった。災害といいいであろう。」(第四卷七頁)

日露大戦中に「乃木を更迭せよ」と言ふ論は大きいものであったやうです。だが途中で換へたならば全兵士のモラルが低下するので、総司令官大山巖は賛成しなかつた。私はその判断は正しかった、と思つてゐます。結果論からして司馬遼太郎の云ふやうに賢しらに更迭してゐたならば、日本軍の勝利は無かつたに違ひないでせう。戦後の時流は、軍神を否定するところに立脚してゐますが、それでは歴史のいのちにふれることは出来ないのです。

最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

- 司馬遼太郎『坂の上の雲』第四卷 文芸春秋社
- 「橋中佐(上)」明治37年頃
- 『日本思想の系譜』下 時事通信社
- 『明治天皇御集 卷中』

「かちどきのひびくにつけて」 [Exulting with triumphant shouts]

かちどきの
ひびくにつけて
むらぎもの
心たゆむな
わがいくさ人

Exulting with triumphant shouts,
And drunk with victory,
May not your high elated hearts
Rest in security !

大陸での戦ひに於て、勝ち鬨を上げるときが来たのであります。「かちどきのひびくにつけて」あの地でもこの地でも勝ち鬨を上げる声が響く。「勝って兜の緒を締めよ」と云はれますが、「わがいくさ人」に祈るやうなお気持で「心たゆむな」つまり、「勝ちに心が傲ったり心に弛みが生じたりすることがないやうにせよ」、と神に祈られます。

明治三十九年には同じ「かちどき」の詞書きで次の御製があります。

かちどきをあげてかへれる軍人^{いくさびと}まぢかく見るがうれしかりけり

この御製は日本に帰って来た「軍人^{いくさびと}をまぢかく」ご覧になられ、お喜びになられてゐるのであります。上の御製はご創作の時期が分りません。だが、明治三十九年前であると言ふことだけは、この御製から想像がつかます。

一行目から入ります。

[Exulting with triumphant shouts,] [exult]=[to leap for joy]=「小躍りして喜ぶ」の意。
[triumphant]=[victorious, celebrating victory]=「勝利の、勝利を祝つて」の意。[shout]=[a sudden loud cry]=「突然上げる叫び声」ここでは[shouts]複数形であるから「(あちこちで上がる)歓声」の意でせう。
一行目の訳は「勝利の歓声を上げ小躍りして喜び」となります。

二行目に進みます。

[And drunk with victory,][drunk]=[controlled by some feeling as if under the influence of alcohol]=「アルコールの影響を受けてゐるかのやうに、ある感情に支配されてゐる、酔ひしれて、夢中になつて」の意。
[victory]=[the overcoming of an enemy]=「敵を負かすこと、勝利」の意。
二行目の訳は「勝利に酔ひしれて」となります。

三行目に進みます。

[May not your high elated hearts][May not] は古文体で[must not]=「不可」の意。[high]=[strong, powerful]=「強い、強力な、大層」の意。[elate]=[to fill with joy or pride]=「意気さかんな」の意。
三行目の訳は「意気さかんな心が」となります。

四行目に進みます。

[Rest in security !] [rest]は「その105」に既出=「任務を放置する」の意。[security]=[the state of being

secure : safety]=「安全な状態、無事」の意。[in security]=「油断して」の意となるでせう。

三・四行目を合はせて「油断して任務を放置してはならぬ!」となります。

【戦争の勝敗が意味するもの】

戦争には必ず勝敗が伴ふものであります。だからと云って「唯何をしても勝てば良い。負けなければ何をしても良い。」と勝敗が終着点(ゴール)となって良いものなのでせうか。断じてさうであってはならないでせう。明治天皇はいつ如何なる時も「道」を正しく踏むやうに求めてをられるのです。

孔子も「道はただ一つだ。」と度々、云ってをります。そこに言はれる「道」の正体とは何でありませうか。孔子が他のところで「仁」である。「忠恕」である、と言葉で言ひ換へてゐる所を探し求めても、分つたやうな気分になるだけではありませんか。

高校の古典の授業では、空想的に他の言葉に置き換へたり結びつけたりする知的領域の学問になってゐるやうです。大学に於いても其の域を出てゐないでせう。孔子が道を踏み生きた日々の弟子たちとの対話の中で事象を取り裁き発言する。孔子のその心持ちを実感的に味はふことは容易なことではありません。しかし、其処まで心を注ぎそれを掴むことこそ学問ではないでせうか。

心に緩みが出たりすると「道」が一時、見えなくなります。諺に「油断大敵!」があります。英語ではそれを [Security is the greatest enemy!]と云ひます。

また「勝って兜の緒を締めよ」とも言はれます。英語ではそれを [Do not be elated(心が驕る) with success.]と云ひます。

安全であると思ひ込んで気が弛み、油断して仕舞ふ所から重大な問題が発生する。云ふならば最大の敵は自分の心の中に潜んでゐると言へるのではないでせうか。皆様の体験を振り返って見て下さい。

【橋中佐(下)】

前回に引き続き「橋中佐(下)」を歌ひませう。遼陽城の^{とりで}保塁を一旦攻め落としたのであります。歌には「万歳声裡に日の御旗 朝日に高くひるがへし」とありますやうに「勝鬨の声」は高らかに上がった。油断してゐたわけではないが、敵は「逆襲の鬨の声」をあげてきたのであります。

1. ああああ悲惨極の極 父子相抱く如くにて とともに倒れし将と士が ^{さんせん}山川ふるう

勝鬨に 息吹き返し見返れば 山上すでに敵の首

(「ああ悲惨」とは普通に聞きますが「あああ悲惨極」と言はねば状況を表現できなかったのでせうか。どのやうな状況であつたかを振り返って見ます。橋中佐の背を打ち貫いた一弾が内田軍曹の胸をも又、破り共に倒れた。山川に響く勝鬨の声に息を吹き返して見返れば、山上は既に敵が占有してゐる。嗚呼、嗚呼悲惨の極にある。)

2. 飛び来る弾の繁ければ 軍曹ふたたび立ち上がり 無念の涙はらひつつ 中佐を扶けて山の影 たどり出でたる松林 わづかに残る我が味方

(軍曹の無念の涙が理解できますか。軍曹の年齢は二十歳余でせう。軍曹は「無念の涙」をうち払ひながら橋中佐を扶助して松林のある山の影に運ぶ。我が味方の軍は僅かしか残ってゐない。だが、命に掛けても持ち堪えたいとの一念が伝はつて来る。)

3. 阿修羅の如き軍神の 風発叱咤今絶えて 血に染む眼打ち開き 日出ずる國の雲千里 千代田の宮を伏し拜み 中佐かしくみ奏すらく

(日出づる国・日本の皇居を遙か遠く伏し拜んで橋中佐は、かしくみ次のやうに奏上した)

4. 「周太が嘗て奉仕せし 儲けの君のかしくも 生れ給ひし良き此の日 逆襲うけて遺憾にも 将卒あまた失ひし 罪はいかでか逃るべき

(儲けの君とは、皇太子殿下のことを言ひ後の大正天皇であります。皇太子御誕辰は明治十二年八月三十一日。自分の最期となる日が、国を挙げての目出度い日と重なる運命にあつた。)

5. さはさりながら^{もののか}武士の とりはく太刀は思ふまま 敵の血潮に染めてけり 臣が武運はめでたくて 只今ここに戦死す」と ^{げんげん}言々悲痛声りんりん

(敵の逆襲を受けて多くの将卒を失ってしまった。逃られない罪である。然は言へど、武士として最善を尽し、一里塚は打ち立て只今此处に戦死す、と悲痛なる最期の声を遺した。)

6. 中佐は更に顧みて「我が戦況はいまいかに 連隊長は無事なるか」「首山堡すでに手に入りて 関谷大佐は討死」と 聞くもかたるも血の涙」
(「首山堡すでに」我が軍の手に入った。だが関谷大佐は討死したのであった。連隊長は、最前線に出てみたのである。指揮官だからと言って弾の来ない部下の兵隊の後ろに引っ込んでみたのではなかった。安全なところに隠れたい。そのやうな卑怯な精神で戦場に立つ者は一人も居なかった。)
7. わが勝鬨の声かすか 四辺の銃の声絶えて 夕陽とおく山に落ち 天籟閑寂静まれば 闇のとばりに包まれて あたりは暗し小松原
(満洲の赤い夕陽も山の向こうに落ちた。「天籟閑寂静まれば」風の音も銃の声も絶え果てて静けさが戻った。)
8. 朝な夕なを畏くも 打ち誦じたる大君の みことのままに身を捧げ 高き尊うとき 聖恩に 答へ奉れる隊長の 終焉の床の露さむし
(朝な夕な「我国の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にぞある昔神武天皇躬づから」に始まる「軍人勅諭」を拝誦し、その御言葉のままに身を捧げた。「終焉の床の露さむし」祖国日本のために戦ひ戦死するのが武士の本望であるとは雖も、「終焉の床の露さむし」に悲劇の終局が奏でられます。私達もその場に居合はせたやうに目を凝らして見ませう。耳を澄ませて奏でられる悲劇のメロディを聴くべきでありませう。)
9. 負ひし痛手の深ければ なさけ手厚き軍曹の 心づくしの甲斐なくて 英魂ここにとまらねど 中佐は過去を顧みて 終焉の笑をもらしけん
(「英魂ここにとまらねど」中佐の魂は戦場の此処に留まらないけれども、靖国神社に帰ると言ふこと。「終焉の笑をもらしけん」情け深く手厚い看護をしてくれた軍曹を初め人生全てに対する「終焉の笑」をもらしたのでせう。悔いが残らない男子の本懐としての美学が唱はれてゐる。)
10. 君身を持して敵なれば 挙動に規矩を失はず 職を奉じて忠なれば 功績常に衆を抜き 君交はりて信なれば 人は鑑と敬ひぬ
(規矩とは自分を律するルール。「誠実に人と交はる。」と安全なところでは簡単に言へる。敵の弾が飛んでく中で状況が厳しくなればなるほど自分に厳しくないならば、実行は難しいでせう。死ぬまで誠実に勤め人は橋中佐を鑑として慕ひ敬愛する。)
11. 忠肝義胆才秀で 勤勉刻苦 学すぐれ 情けは深く勇を兼ね 花も実もある武士の 君が終焉の言葉には 千歳たれか泣かざらん
(「忠肝」とは忠なるまごころ「義胆」とは正義に強い心。「君が終焉の言葉には 千歳たれか泣かざらん」中佐の終焉の際に居合はせた人と同じ気持ちになれば皆永遠に涙を流すでせう。)
12. 花深く散り果てて 護国の鬼と誓ひてし 君軍神とまつられぬ 忠魂義魂後の世の 人の心を励まして 武運は永久に尽きざらん
(「護国の鬼と誓ひてし」生前より護国の鬼となるのだと固く誓ってゐた。今では靖国神社に軍神として祀られてゐる。後世の人は中佐を仰ぎ、人の心を励まし武運長久、永久に尽きることがない。)
13. 国史伝うる幾千年 ここに征露の師を起す 史ひもときて見るごとに わが日の本の國民よ 花橘の薫りにもしのべ軍神中佐をば
(国の歴史には幾千年の歩みがある。「ここに征露の師を起す」ここにロシアを伐つ戦を起した。命を捧げて戦った父祖方の悲しく尊い物語を繙いて見る度に橋中佐のことを思ひ起してくれ。)
- 最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

- 『中国古典新書 論語 下』宇野哲人 昭和五十三年 四版
○『思い出の日本軍歌集』昭和三十六年 三版 金園社

「よろこびをいひかはしつ」 ['Twixt realm and realm reigns]

よろこびを
いひかはしつ
くにぐにの
をさまる時に
あふぞうれしき

'Twixt realm and realm reigns peace again
Mid universal joy ;
I bless my star that I have liv'd
To see this joyous day !

いつも参考にしてゐます『明治天皇御集』には掲載されてゐません。「宴」と言ふ詞書きで次の御製がありますからご紹介してをきます。

宴 明治三十九年

よろこびの うたげするこそ 嬉けれ ものの司を うちつどへつ

皆様はこの「よろこびのうたげ」に対してどのやうな感想を抱きますか。明治の日本人は――戦場に立つ者に劣らず、銃後で國を守る人達も同様に――皆この「よろこびのうたげ」の輪の中に入り喜びを共感し合つたのです。皆様とこの輪の中へ入ることにしませう。

一行目から入ります。

['Twixt realm and realm reigns peace again] ['Twixt]=[Betwixt]の[Aphaerisis](語頭音省略)であります。(『英語韻律法概説』70頁参照)[betwixt]は古語であり=[between]=[「…の間に」]の意。[realm]=[kingdom]=[「王国」]の意。['Twixt realm and realm]=[Between Russia and Japan]=[「日露の間に」]の意となります。[reign]=[exist]=[「行き渡る」]の意。散文的になります。平易に書き直しますと [Peace has finally come between Russia and Japan]となります。一行目の訳は「遂に日露の王国の間に平和が行き渡つた」となります。

二行目に進みます。

['Mid universal joy ;] ['Mid]=[Amid]の[Aphaerisis](語頭音省略)。「amid」は古語であり=[among]=[「～のまただ中で」]の意。[universal]=[「万国の」]の意。[joy]=[a feeling of great pleasure or happiness that comes from success, good fortune, or a sense of well-being]=[「成功、幸運、或は幸福感から生じる、大きな喜び又は幸福な気持ち」]の意。二行目の訳は「みんなで喜びをわかちあふ」となります。

三行目に進みます。

[I bless my star that I have liv'd] [bless]=[praise, honour]=[「賞賛する、尊む」]の意。[star]=[fortune]=[「運」]の意。例へば、神に感謝したいほど運が良かったと思へるときに「私は果報者だ。」と言ひます。英語では [I may bless my star that I was there.]と言ひます。又、「運の良い星に感謝せよ。」と言ふ時は英語では [Bless your star !]と言ひます。[that I have liv'd]=[That I have lived] [liv'd]は結果を導く不定詞を四行目で従へてゐます。

例へば「私は生きて故郷に帰る」を英語に直すと

[I have lived to see my native land.]と言ひます。そこで、四行目と併せて解釈しませう。[that]以下で[my star]の内容が示されます。

[I have liv' d to see this joyous day !] [this]=adj.[being the one present or just mentioned]=形容詞で「その場所にあるもの、或はたった今述べたばかりのものである」の意。後ろの[joyous day]を修飾する。

四行目の訳は「私は生きてこの喜ばしい日に会ふとは!」となります。

【Universal Joy (万国の喜び)とは】

日露の戦ひで、まさか日本が勝つたらうと世界のどの国が予測したであらうか。ロシアの帝国主義に危機意識を抱いてゐたのは、ヨーロッパではフィンランド等の北欧でありました。小アジアではトルコがさうでした。いつロシアが侵略の牙を自国にむけて来るかと戦々恐々としてゐたのでありました。予想に反して日本が勝つと言ふ報を聞いたのでありましたから、その喜びの様子は推して知るべしであります。

【ポーツマス(Portsmouth)に鳴った平和の鐘——日露講和条約(Treaty of Portsmouth)の締結】

日露講和条約の調印式は、一九〇五(明治三十八年)九月五日ポーツマスの海軍工廠で行なはれました。式場では午後三時四十分、小村、高平両日本全権とウイッテ、ローゼン両ロシア全権が講和条約英仏文各二通及び追加約款同じく各二通にそれぞれ署名したのでありました。[Treaty of Portsmouth]については、どの本もここまでしか書いてゐませんが、実は次に感動的なセレモニーがあつたのです。次を読んでみませう。

「両国全権の署名が全部終わると、アメリカの國務省の一属官が急ぎ玄関先に出て、そこに堵列してゐた海兵隊一分隊の分隊長に『三時四十七分、一同署名済み』と合図した。たちまちにして十九発の砲声が殷々と天にとどろき、汽笛と寺鐘がここかしこで鳴りわたり、ポーツマスは平和の喜びにわき返った。」(475～476頁)『日本外交史 7 日露戦争』鹿島研究所出版会 昭和四十五年版

十九発の祝砲がポーツマスの空に順に撃たれた。その砲声は「殷々と天にとどろき、汽笛と寺鐘がここかしこで鳴りわたり、ポーツマスは平和の喜びにわき返った。」アメリカのポーツマスでこんなに喜ばれてゐたのであります。汽車が祝福の汽笛を、ここもかしこも全ての教会は喜びの鐘をうち鳴らしてくれたのです。アメリカの心からの善意に今日の私も嬉しくなります。

【アジア諸民族の喜びは】

日本の勝利が世界のどのやうな人々に影響を与へたのか見てみませう。

①孫文(Sun Wen 1863～1941)の例

当時孫文は、清を追はれイギリスに亡命してゐました。イギリスから帰途についてゐた時のことです。孫文は、スエズ運河を通過してゐました。その際に希有な体験したのであります。そこで居合はせたアラビア人との対話を書きしるしてゐる感激的な文章があります。それを読んでみませう。

「沢山のアラビア人が・・・かれらは私が黄色人種でありますのを見て非常に喜び勇んだ様子で、私に『お前は日本人か』と問ひかけました。私はそうではない、私は中国人だ。何かあつたのか。どうしてそんなに喜んでゐるのかと問ひましたところ、彼らの答は、『自分達は今度非常に喜ばしいニュースをえた。なんでも日本はロシアが新たにヨーロッパより派遣した海軍を全滅させたということを知った。この話しは本当か。自分達はこの運河の両側にいてロシアの負傷兵が舟毎にヨーロッパに送還されて行くのを見た。これは必定ロシアの大敗した証拠だと思ふ。いぜんはわれわれ東洋の有色人種はいずれも西方民族の圧迫を受け、苦痛をなめていて全く浮かぶ瀬がなかつた。だが今度日本がロシアに勝つたということは東方民族が西方民族をうちやぶつたことになる。日本人は戦争に勝つた。われわれも同様に勝たなければならない。これこそ歓喜しなければならないことではないか』ということであつた。」(『世界史上より見たる 日露戦争』216頁 昭和三十九年三版 至文堂)

これは、日露戦争が日本とロシアだけの単なる戦ひではなく従来劣つてゐると見られてゐた有色人種が、優勢

な白色人種を打ち破ることが出来たと言ふ世界史的な意義があったのであります。黄色人種である日本人が勝ったことにより、後進地域諸民族は見事に覚醒されたのであります。孫文はアラビア人の喜びを伝えてみますが、彼らの喜びと同時に黄色人種であります孫文の歓喜でもありました。日露戦争の勝敗に触発され孫文は、すぐに1905年(明治三十八年)日本にやって来ました。ここで中国革命同盟会を組織したことはご存知の通りであります。清国の打倒そして数々の紆余曲折はありましたものの遂には、中華民国の建国へと繋がったのであります。

このやうに日本の勝利は取りも直さず白色人種に対する有色人種の勝利として熱狂的に迎へられたのであります。当時英国の支配下にありましたインドに於いても同様の動きがありました。

例へば、ハンス・コーンは『アジアの民族運動』の中で次のやうに言っています。

「日露戦争は周囲の諸民族をして爪先立てで彼らの将来を待ち望ませた。昂奮の波濤は北インドを越えて進んだ。最も遠隔の村落の住民でさえ夕方仲間と同席すると日本の勝利の話をした。長年西アジアに住んでいたあるトルコの領事は、大陸の内地ではいたるところ最も無知な農民にもかような報告は行き渡っていると私に話した。こうしてアジアは一端から他端へと刺激され幾百年の夢はついに破れた。」と、当時のインドに於けるイギリス人観察者が報告してゐるところであります。

各国の独立運動の志士たちに勇気と立ち上がる切っ掛けを与へたのは、日露戦争に於て日本が勝利を握ったことにあったやうです。平成十九年九月の初旬、安部前総理はインド独立運動に挺身した志士たちの子孫に会ったと言ふニュースを特別な思ひで見たものでした。アジアの各国が独立を勝ち得た原動力に日露戦争の我国の勝利があったことに目を止めるならば安部前総理は着眼がいいと言ふことになります。

風のない日、山の中の湖はさざ波一つ立ってゐません。そんな日に石を湖面に投げ込むとどうなるでせうか。石が落ちた一点を中心にして波紋がぐんぐん広がって行くでせう。皆様も体験なさったことがあると思ひます。二十世紀の初頭、日本が勝利したことは、丁度、中心に落ちた石の如きものだったのである、と私には思はれます。広がる波紋にばかり目が行って仕舞ふと事の本質が見えなくなって仕舞ひます。最後に二度日英の御製を拝誦して終ります。

《参考文献》

ハンス・コーン 『アジアの民族運動』

○『世界史上より見たる 日露戦争』東北大学教授 黒羽 茂

○『日本外交史 7 日露戦争』鹿島研究所出版会 昭和四十五年版

「あとがき」に替へて

「まこと実の大事——文化と歴史の連続性」

小野吉宣

[[Lame Duck]となったブッシュ大統領]

現今のアメリカのマスメディアは、日本人の目からすれば失礼千万な呼称であるが、自国の大統領を [Lame Duck] (手足が不自由なアヒル) 呼ばはりして平気のやうだ。三選が憲法上あり得ないアメリカでは、再選された大統領の任期が残り二年を切るころから、時期大統領の選挙に関心が移る。現に昨二〇〇七年(平成十九年)から民主党の大統領候補は誰某が有力だとか、共和党候補は劣勢であるとかとの予測報道がマスメディアを賑はしてゐる。

このやうに再選の大統領は任期が終はる残りの一年は、国家元首としての権威は失墜し、政治指導力(権力)が著しく弱まる。[Lame Duck] となったブッシュ氏は舞台の袖に追ひやられ、マスメディアは去って行くのを待ってゐるかのやうに次期大統領選に焦点を当てるのだ。私は、ここに日米の国柄の違いを見る。

「アメリカの国柄」

アメリカがイギリスから独立してアメリカが独立宣言(Declaration of Independence)をしたのが一七七六年であつた。ヨーロッパの文化と伝統を否定した移民達によって建国されたことは周知の通り。アメリカの独立宣言から十三年後の一七八九年にはフランス革命が起る。破壊から革命へが流行してゐた時代なのであり、ワシントンがアメリカ初代の大統領に就任した年でもあつた。

その後、万延元年(一八六〇)日米通商条約の批准交換の使節に随行してアメリカに渡った福沢諭吉は興味深い体験をしてゐた。

「所で私が不図胸に浮かんで或人に聞いて見たのは外でもない、今 華盛頓の子孫は如何なつて居るか尋ねた所が、その人の云ふに、華盛頓の子孫には女がある筈だ、今如何して居るか知らないが、何でも誰かの内室になつて居る容子だと、如何にも冷淡な答で何とも思て居らぬ。是は不思議だ。勿論私も亜米利加は共和国、大統領は四年交代と云ふことは百も承知のことながら、華盛頓の子孫だと云へば大変な者に違ひないと思つた・・・」(一三六頁) (『福翁自伝』昭和二十二年版 森下書房)

去りつつある又去つてしまつた大統領に「冷淡な」態度を取るのがアメリカの伝統であらう。国家の元首を選挙で選ぶ共和国とはかう云ふものなのだ。現に今のアメリカ国民の心理は、マスメディアにより次期大統領を誰にするべきかに誘導されてゐる。

「『うらやましい』ことなのか」

かねてから日本もアメリカのやうに共和制にすべきだ、と云ふ論が存在する。勿論確信犯的な革命分子はマイノリティだが、何となく米国のやうな大統領制の方が分りやすくいいと思つてゐる「隠れ共和制論者」は少なくないのではなからうか。今年(平成20年)二月の産経新聞「正論」欄で「保守」と目される人の中にさへ、「今、行なわれているアメリカ大統領選の予備選挙」に羨望の目を向けたのか次のやうに言ふ者もゐた。「アメリカ人にとって『建国の精神』を確認するのが四年に一度の大統領選ということらしいが、国を挙げて『建国の精神』に立ち返る姿はうらやましくもある。」(産経新聞「正論」欄・八木秀次氏「建国の精神に立ち返ろう——日本本来の高貴さを取り戻すために——」・平成二〇年二月九日付。傍点引用者)。

確かにアメリカにはアメリカの建国の精神がある。だが彼我の国柄の本質的差違に思ひを致せば譬へ持論の枕であつても、口角泡を飛ばす予備選を「うらやましくもある」などと言ふことは私には理解しがたい。何よりも其処にアメリカンデモクラシーの浅ましきを見るからである。予備選の候補者達は自分が如何に優れてゐるかを言葉の限りを尽くし資力を傾け誇示してゐるのではないか。お世辞にも「うらやましくもある」などと私は言へない。そんな「甘い」姿勢では「日本本来の高貴さを取り戻す」ことができはしまい。彼らは建国二百年余の歴史無き人工国家である故に「歴史を形づくる」産みの苦しみを積み重ねてゐるやうに私には思へるのである。

現代は地球規模で情報が容易に伝播する。まづは国柄の違いを見極め、心を込めて自らの伝統を味はひ継承し、それを以て他国と交ることがいよいよ重要事になつてゐる。それを前提に、それぞれの文化と伝統を大切にすべきなのである。

鎌倉時代の最も優れた知性と言ってもいい兼好法師は、けげげげしい鎌倉幕府の執権を「うらやましく」見ることはなかつた。「みかどの御位は、いとまかしこし。竹の園生そのふの末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。」(『徒然草』第二段)と言つてゐる。血で血を洗ひ武力で権力を握つた鎌倉幕府への根本的な批判が籠められてゐる。天皇の御位は、歴史と文化の連続性と云ふ観点から今日の私達が真に嘔みしめねばならないことである。日本に於ける歴史の真実を確認するべく私たちは努めなけれ

ばならないと強く思ふ。

「涙たむけて」

歴史は知識の集積から甦るものではない。時代を生きた人々に共感の涙を思はず流す瑞々しい情意それを感じ取ってこそ歴史の真実に迫ることができるのではないか。

左記は日露戦争時に、明治天皇が詠まれた御製である。

神がきに涙たむけてをがむらし帰るを待ちし親も妻子も

「神がき」とは神社や神域の周囲の垣の意で神と云ふ神聖なる対象を直接指さないでそのあたりを呼称するといふ昔から日本に伝はる奥床しい言ひ方である。それを踏まへられての「神垣に」の御表現である。一家の大黒柱を戦地に送りだしてゐる家族は無事な帰還を祈つてゐた。だが悲しくも戦死の報が入ったのであらう。涙を手向けて拝んでゐる。その姿を詠まれた御歌と思はれる。

なぜ①「涙流して」拝むらしてではなく②「涙たむけて」拝むらしとお詠みになつたのだらうか。畏れ多い事ながら、管見を記してみよう。

①「涙流して」では涙を流してゐる人とそれを目にしてゐる人との関係は直叙的で、その涙を詠者が自分の心に受け止めてゐるのか、或いは傍観者的に見てゐるだけなのか分らない。②「涙たむけて」となるとどうだらう。「手向く」とは「供へ物を神仏にささげる」の意。ここでは供へ物は何であるか。神への供へ物は涙なのである。何と悲しいお供へ物であらうか。明治天皇も祈願する家族とご一緒に涙を流されたのではなからうか。天皇も国民と共に神に頭を垂れて祈つてをられる。ここに美しい日本の国柄が感じられるのである。

「涙の系譜」

卑近な例で恐縮であるが、私には四才上に兄がゐて小さい頃よく兄弟げんかをしては泣かされてゐた。するとその度に祖母から「喧嘩をしても良いが男は泣いてはいけない。」と諭されたから、涙を流すのは良くないことだと子供なりに思つてゐた。ところが小学校四年の時、全く逆のことを祖母が言ふ場面に出會つた。

胃ガんで亡くなつた叔父の葬式が始まる一時間ほど前、喪服に着替へた叔母が急に座り込んで泣き出した。日清・日露の戦ひを銃後で支へた日頃厳しい祖母(明治十三年生れ)は「泣いてはいけない」と孫の私に言つたのと同じやうに娘である叔母に言ふだらうと思つて見てゐた。ところが、祖母は叔母の方へ近づくと背中に手を置きそして実に優しく「今の裡に十分に泣きなさい。涙を流して仕舞ひなさい。その上で葬式に出なさい。」と言って叔母の背を撫でてやつたのである。

時と場合によっては泣くことも大切なのだと幼稚な子供ながらも感じた。祖母は「たけさ河のみなざり流るるが如き」「実の大事」に如何に対処すべきか私達に教へてくれてゐたのである。(『徒然草』第百五十五段)

本紙二月号の巻頭に「母と子に通ふ真心こそ世の清水にあらずや」と題した小柳左門氏の玉稿が掲載されてゐた。それを参考にして、ここで『万葉集』防人の歌から涙の系譜を辿つて見よう。

わが母の袖持ち撫でてわが故(註・ゆえに)に泣きし心を忘れえぬかも(物のべをとら)

(わが母が私の袖口を持ち、片方の手で背中を撫でながら泣いた心を忘れることができない)

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ(刑部 直千國)

(蘆で結はれた垣根の物陰に立って、愛しい妻が袖もぬれるほどしぼりと泣いたのが今も思ひ出される)

韓衣裾に取りつき泣く子を置きてぞ来ぬや母なしにして(他田舎人大島)

(大陸風の衣服の裾に取りすがり 泣く子供を残して来たことだ 子供らの母は既にこの世にゐないのに)

センチメンタルな戦後思潮に立てば、なぜ徴兵拒否をしなかつたのかなどといふ高踏的な批評がなされるだらうが、万葉時代

の防人達は「抑へようにも抑へ切れない」「消さうに消し切れない」私情を三十一文字に表現して征途に着いた。そのことにより肉親との別離といふこの上ない悲劇を乗り切ったのだ。そこに悲しみを乗り越える心の浄化(カタルシス)が生れた。

私達のみ祖^{おや}たちは私情を無視したり否定しようとしたのではない。心の動きは無視することも否定することもできない。しかし私情を抱きながらも心の姿勢を「私」から「公」へと向けたのだ。その上で国家公共の為に生きる力を沸き立たせるべく決意したのだ。

父祖達が聖徳太子が云はれる「背私向公」の精神に生きてきたが故に今の私達の生命がある。先人の心の裡を憶念することなく、安易に忘れ去り現世現在の生活を謳歌してゐるだけでよい筈がない。

「文化と歴史の連続性」

『万葉集』の防人の歌を鑑賞してその心持ちを偲んだが、千三百余年もの時間的な隔りがあるにも関わらず別離の情や流した涙の意味が十分に伝はつて来たのではないだろうか。それがなぜ可能になるのかよく考へて見ていただきたい。

日本は王朝が断絶せずに古代の奈良朝から否、太古の神話伝承の時代にまで遡及する一系の皇位が今日まで一本の縄のやうに繋がってゐる世界唯一の国なのである。『万葉集』の歌に、現在の我々の心が「動く」のは、一本一本の糸を寄合はせた長い紐のやうに伝統精神の精髓が切れることなく、営々と守り抜かれ生きて続いてゐるからなのである。このことを思ふと報恩感謝の念が湧いて来るのを私は、抑へることができない。

下記は平成二年、皇后陛下がお詠みになつた御歌である。

旬祭

神まつる昔の手ぶり守らむと旬祭^たに発たす君をかしこむ

(註)旬祭 毎月一日、十一日、二十一日に行なわれる御祭祀 天皇陛下は通常各月一日の祭祀にお出ましになり国の無事をご祈願になる

『日本書紀』に依れば日本の皇室(The Japanese monarchy)の起源は古く、西暦紀元前の六百六十年に初代の神武天皇がご即位されてゐる。以来、第百二十五代に当たられる今上陛下は平成二十年の今日も「神まつる昔の手ぶり」を守られ國と私達国民の平安を御祈念なされてをられる。皇后陛下の御歌に、伝統精神の精髓が守られ厳修されてゐる日本の国柄の本質を現に仰がしめられるのである。

世界で最も古く長い歴史を有し最も高貴なるモナーキーを私達が戴いてゐる。その事を実感し仰ぐとき私の心に電気が走り抜ける感じがする。そしてこの日本に生きる喜びを覚え、如何にご恩に報いるべきかを自問するのである。

(福岡県立直方高等学校教諭 数へ六十二才)



小野吉宣(その よしのぶ)

〒823-0011宮若市宮田4086-1
TEL 0949-32-3660

福岡県立直方高等学校 教諭
社団法人 国民文化研究会 参与

昭和22年 福岡県宮若市生まれ、
西南学院大学文学部卒。久留米大学付
設高校講師、嘉穂高校教諭、新宮高校
教諭等を経て直方高校教諭(英語)
福岡地区の高校、大学生に古典読書・
短歌創作を指導。分担執筆著書に「戦
後世代からの発言」(正・統)「日本への
回帰」(国文研刊)「平成の大みうたを
仰ぐ」(展転社)『台湾派遣学生研修団
一報告集』など。

「英訳明治天皇御集」を読み解く

平成21年(2009年)9月1日

初版発行
(価額 1,500円)

発行者 小野 吉宣

印刷製本 株式会社 第一紙行

